The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 現代日本語における空間的な関係を表す表現の 意味用法と機能語化 ー意味機能の広がりにおける関連性を中心にー |
| Author(s) | 張, 希西 |
| Citation | 大阪大学, 2020, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/76324 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

博士学位申請論文

# 現代日本語における空間的な関係を表す表現の意味用法と機能語化

## —意味機能の広がりにおける関連性を中心に—

大阪大学大学院　文学研究科

文化表現論　日本語学

学籍番号　20B15811

張　希西

# 目　次


序論　第 1 章　問題提起と研究目的　1

第 2 章　考察全体に関する先行研究の概観と本研究の立場　2

第 3 章　考察対象と考察方法　5

本論　第 1 章　自立語「うえ」の意味用法と機能……7

1.1　はじめに　7

1.2　先行研究　8

1.3　「うえ」の意味用法に影響する要素　10

1.4　語や句が前起する「うえ」の意味用法と機能　12

1.5　節や文が前起する「うえ」の意味用法と機能　25

1.6　各意味機能の広がりにおける関連性と共通点　33

1.7　まとめ　39

第 2 章　自立語「うち」の意味用法と機能…… 41

2.1　はじめに　41

2.2　先行研究　42

2.3　「うち」の意味用法に影響する要素　44

2.4　語や句が前起する「うち」の意味用法と機能　46

2.5　節や文が前起する「うち」の意味用法と機能　51

2.6　各意味機能の広がりにおける関連性と共通点　53

2.7　まとめ　56

第 3 章　語構成要素「上（じょう）」の意味用法と語「―上」の機能……57

3.1　はじめに　57

3.2　先行研究　58

3.3　語「―上」における「上（じょう）」の意味用法と機能　60

3.4　「上（じょう）」の接尾辞化と用法の広がり　64
3.5　文における「―上」の機能と機能の移行　65
3.6　「―上」の接続用法の使用条件と機能移行の原因　67
3.7　まとめと今後の課題　71

第 4 章　「事実上」の意味用法と機能…… 74
4.1　はじめに　74
4.2　先行研究　75
4.3　文において副詞として働く「事実上」　76
4.4　文を越えて接続詞のように振る舞う「事実上」の意味機能と性質　85
4.5　「事実の上」「事実」と異なる側面を持つ「事実上」　91
4.6　「事実上」の各意味機能の関連性と接尾辞「上（じょう）」の働き　103
4.7　まとめと今後の課題　105

第 5 章　関連性と共通性からみる空間的な関係を表す表現　109

**結論**　第 6 章　結論と今後の課題　112

参考文献
用例出典
謝辞

# 要　旨

本論文は、現代日本語における空間的な関係を表す表現について、自立語「うえ」、自立語「うち」、語構成要素「上（じょう）」と「上（じょう）」を後要素とする語「―上」、「事実上」といった表現を対象に、各表現の意味機能を記述、分析し、その意味機能の広がりにおける関連性を明らかにしたものである。

空間表現の各意味用法の連続性については、認知言語学の視点から考察するものが多い。この立場は意味間の繋がりを説明するのに有効かもしれないが、各意味機能の間の関連性を説明するにあたり不十分なところがあると考えられる。本稿では、通時的な派生または共時的な拡張の方向を考察するのではなく、現代日本語における空間的な関係を表す表現が、それぞれどのような意味と用法を持っているか、いかに空間的な関係を表すものから、文において、または文を越えて、抽象的、論理的な関係を表すものになることができるかという疑問を念頭に置き、以下のような点に注目し、各意味機能の間の関連性を考察した。

①空間的な関係を表現の意味と用法に影響する要素

②これらの表現の具体的な用法ごとに、いかに具体的な位置方向などを表す意味を反映させ、接続表現として用いることができ、また、繋がりを持つと考えられるそれらの意味と用法にどのような関連性があるのか

③各表現によって関連付ける事物や事態の間の「関係」のあり方、各「関係」の共通点と相違点

④同じく「空間的な関係を表す表現」として、各表現の間にどのような共通点と相違点があるか

空間的な関係を表す表現の各考察対象について、明らかにしたことは以下のとおりである。

**（1）自立語「うえ」（第 1 章）**

現代日本語における「うえ」は多様な意味用法を持ち、その意味用法は共起する要素、特に前起する要素に大いに影響される。本稿は「関係」を検討するため、前後の両要素と

も存在する場合を中心に考察した。

空間的な関係を表す表現としての「うえ」が、その意味用法を広げ、接続表現のように機能することには、可能性とある程度の必然性があると考えられ、その理由として両方とも「関係」を示す表現として機能することを挙げた。「うえ」は「要素 A＋うえ（で／に／から……）＋要素 B＋述語」のように、2 つ（あるいは 2 つ以上）の要素を関連付け、その間の空間的な相対位置関係を示す用法を持つ。これに対し、接続表現は前件を受け、後件に引き継ぐような働きを有し、前件と後件の間の論理的な関係を表す。要素の種類によって「うえ」の意味用法は異なるが、要素と要素を関連付け、その間の関係を表すというところに共通点があると考えられる。

また、「うえ」の各意味機能に関連性、共通点が見られるのは、「うえ」が関連付ける要素と要素の間の関係のほか、共起する要素の種類、性質と関わる「うえ」が「ある側面の前面化」と「先行条件」という意味を持つためである。「うえ」の意味用法の広がりに 2 つの意味の競合（潜在的な意味か顕在的な意味か、優位に立つかどうか）が見られる。

更に、今後より詳しく考察する余地があるが、節や文が前起する場合、「うえ」が関連付ける要素と要素は、空間的な関係と時間的な関係にも関わり、それぞれの要素の性質によって、要素間の時空関係が異なると考えられる。

**（2）自立語「うち」（第 2 章）**

「うち」の意味も共起する要素に影響される。要素 A と要素 B が揃っていることを前提に、「うち」は前起要素で示すある空間的な側面・範囲、時間的な範囲、抽象的な範囲あるいは部分が所属する全体の範囲を前面に出し、後続要素と関連付け、その間の空間的な相対位置関係、相関関係あるいは所属関係を示す。その各意味機能の関連性は、「うち」が前起要素と共に表す「範囲」のあり方と「うち」によって関連付ける要素間の関係のあり方に見られる。「要素 A＋うち」が表す「範囲」は用法によって異なる性質を持つと考えられることから、両者を分けて見る必要があることを主張し、「範囲の設定」と「範囲の限定」に分け、説明した。

「うち」が空間的な範囲と方向、抽象的な範囲、時間的な幅を示す範囲を表す場合、「要素 A＋うち」は述語の補語のようなものであり、後続する事物との空間的な相対関係に関

わる場所などのような条件として、あるいは述語で表す事態の時間的な先行条件として前面に出る。これを本稿では「範囲の設定」と提示する。

前起要素の種類と関わらず、「うち」が、部分の所属する全体の範囲を表し、「要素 A＋うち」は後続内容で示す事態全体と関わる範囲ではなく、要素 A の下位のものに該当する後続内容の一部（主体、客体、あるいは時間など）を規定する範囲である。これを本稿では「範囲の限定」と提示する。

節や文が前起する場合、「範囲」を示す「うち」の前起要素は、存在している状態や持続している動作、時間的に幅を持つ動作及び一定の時間内で反復性を持つ動作を表すものであるという傾向が見られる。この点は、動詞の分類と関わる前起要素のあり方として、より詳しく検討する余地があると考えられる。

**（3）語構成要素「上（じょう）」と「上（じょう）」を後要素とする語「—上」（第 3 章）**

語構成要素「上（じょう）」は、具体的な意味を表す前要素と結合する場合、「ある側面において」という意味を表し、述語の補語として、述語で示す動作、状態などの具体的な場所を前面に出し、話し手／語り手の叙述として示す。また、抽象的な意味を表す前要素と結合する場合、後続する話し手／語り手の判断、認識を出す条件、立場を前面に出して示すことで、話し手／語り手の主観的な事態把握を表していると考えられる。結合要素の種類と前後文脈によって、「ある側面において」「ある側面から見ると／言うと」という意味を表す「—上」は前面に出され、後続する内容に先行する条件として働く。

「上（じょう）」は前接要素の拡大を伴って生産力を増し、接尾辞化し、抽象的な側面・範囲という意味を表すようになる。その前接部分は語の内部のみならず、語を越えて句まで拡大し、それによって、接尾辞「上（じょう）」が前接要素とその修飾部分を包み込む「句の包摂」現象が見られる。

「上（じょう）」は、抽象的な事柄を表す自立形態素と結合する場合、副詞のように振る舞うことが多い。しかし、修飾成分が必要かどうか、必要な場合、修飾成分が前文または前文脈にあるかどうか、などの条件によって、副詞のように使用される「—上」が接続助詞的、接続詞的に機能することがある。

「上（じょう）」の前接要素自身で完全な意味を表すことができない場合、その意味内容

を補足するための修飾部分が必要となる。この修飾部分が前文または前文脈にあり、「―上」は単独で使用され、先行内容から後続内容に引き継ぐ機能を果たす。このような機能の移行は、語彙的な意味が残っている前接要素と、「上（じょう）」が結合して構成した「―上」が先行内容と後続内容の意味的関係に影響を与えることに起因すると考えられる。「―上」が後続内容とともに先行内容に対する状況説明、情報付加の働きをする場合、後続内容との緊密度がより高く、接続詞のように振る舞うと考えられる。

**(4)「事実上」（第 4 章）**

「事実上」は副詞として働く場合と接続詞のように振る舞う場合があり、また、談話のレベルにおいて、談話標識に近づく場合もある。これらの用法の間には関連性はあるものの、はっきりとした境界線がなく、「事実上」の機能はそれが働く具体的な言語環境によって多様な側面を持つ。

文中で副詞として働く「事実上」は、述語を修飾するものとしても、文全体を修飾する文副詞としても、「（前述した内容を踏まえて）事実という側面から見ると／言うと」という意味を表し、後続内容で表す話し手／語り手の判断、認識が示される条件として前面に現れる。また、接続表現と共起し、前後内容との相反の関係、または相関の関係を強める役割を果たす。

接続詞のように振る舞う「事実上」は、「事実という側面から見ると／言うと」という意味を表し、前後の内容を関連づけようとする話し手／語り手の立場や観点を表すことで、前述内容を受けて後続内容に引き継ぐ働きを持つ。「事実上」は後続内容と共に、前述内容の成り行きへの帰結、前述内容を踏まえた情報の補足、または前述内容の修正を表し、前後の一貫性に関わって働く。

「事実上」と意味的に共通点を持つ表現として「事実の上」が、機能的に共通点を持つ表現として「事実」があるが、「事実上」はこれらと違う性質をも持ち、「事実の上」と「事実」には見られない、談話標識に近づく一面を有している。

以上の内容を踏まえ、現代日本語における空間的な関係を表す表現の意味機能には、意味と用法に影響する要素、各表現が関連付ける要素間の関係のあり方、各意味機能に見ら

れる関連性、及びその関連性と関わる現象のような点において、関連性と共通点が見られると考えられる。

また、以下のような内容について、更に詳しく考察する余地があると考えられるため、今後の課題として示す。

①動詞の性質と関わる要素間の空間的な関係、時間的な関係、名詞が前起する場合における要素間の時空関係。

②節や文が前起し、「うち」が前起要素と共に時間的に幅を持つ状態や事態が存続する範囲を表す場合における、動詞の分類と関わる前起要素のあり方。

③空間的な関係を表す語構成要素を後要素とする語について、「―上」のほか、「句の包摂」現象が見られるものの考察。

④日本語における「事実上」、中国語における「事実上」に関する対照考察、及び両言語における「―上」全般に対する対照考察。

⑤「うえ」と「した」、「うち」と「そと」のような意味的に対となる空間的な関係を表す表現の対照考察。

# 序　論

## 第１章　問題提起と研究目的

日本語の名詞の中には、「時間的・空間的な相対的位置関係」[1]を表すものが多数あり、共通の特性がある。例えば、「うえ」「うち」などの表現があり、具体的な空間における位置方向を表すのみならず、「いろいろ考えた**うえで**決めた」「暗くならない**うちに**帰る」のように、時間的な表現あるいは論理的な関係を表す表現としても使用される。また、語のみならず、語構成要素（例えば「上（じょう）」）及びそれを構成要素とする語（例えば「―上」）にもこのような現象が見られる。

（1）a 机の**うえ**に本を置いた。

b 仕事の**うえ**で、大きなミスをした。

c すべての条件を承知した**うえで**、契約を結んだ。

（2）a 芝居じみた混乱のうちに、基一郎は玄関の**内**に運ばれた。（楡家の人びと　北杜夫）

b 五年間の**うち**に、私は何度か転居していた。（一瞬の夏　沢木耕太郎）

c アイデアを求めている**うち**、しだいに案がまとまってきた。（人民は弱し官吏は強し　星新一）

（3）a 僕は乗降台からプラットフォームと反対側の**線路上**に押し飛ばされ、誰か女の人らしい柔かい体の上に被さった。（黒い雨　井伏鱒二）

b 特色ある学校づくりは**教育上**大きな効果がある。（生活科授業研究　川上昭吾　教育出版）

c 従来は、上告を比較的無制限に許していて、だからこそ三審制だったのだが、現在では、かつて「まだ最高裁がある」といわれたような状況はすでになくなってしまっている。**事実上**、日本はいま二審制なのである。（離婚の作法　山口宏　PHP 研究所）

上記の用例における「うえ」「うち」「上（じょう）」のような表現は「机」と「本」、ある人物「基一郎」と玄関、ある人物「僕」と「線路」、といった事物・人物と事物との空間

[1] 寺村（1992:13）

的な位置関係と関わって使用される。そのほか、「すべての条件を承知した」と「契約を結んだ」、「アイデアを求めている」と「しだいに案がまとまってきた」、「従来は、（中略）現在では、（中略）状況はすでになくなってしまっている」と「日本はいま二審制なのである」のような、事態と事態の関係と関わって使用されることもある。このような「空間的な関係を表す表現」は事物間の具体的な空間関係を表すとともに、抽象的な事物間の関係、事物と事態間の関係、あるいは事態間の論理的な関係を表すことができる。また、「うえ」「うち」「上（じょう）」のような表現は、例（1）a、（2）a と（3）a のように具体的な位置方向を表す場合と、例（1）c、（2）c と（3）c のような接続表現のように振る舞う場合がある。

本研究では、上記のような表現を「空間的な関係を表す表現」と呼ぶ。現代日本語における空間的な関係を表す表現が、それぞれどのような意味と用法を持っているか、いかに空間的な関係を表すものから、文において、または文を越えて抽象的な、論理的な関係を表すものになることができるかという疑問を念頭に置き、以下のような点に注目し、これらの表現の意味機能の広がりにおける関連性について究明することを目的とする。

①「うえ」「うち」「上（じょう）」のような、空間的な関係を表す表現の意味と用法に影響する要素

②これらの表現の具体的な用法ごとに、いかに具体的な位置方向などを表す意味を反映させ、接続表現として用いることができるのか。また、繋がりを持つと考えられるそれらの意味と用法にどのような関連性があるのか

③各表現によって関連付ける事物や事態の間の「関係」のあり方、各「関係」の共通点と相違点

④同じく「空間的な関係を表す表現」として、各表現の間にどのような共通点と相違点があるか

## 第 2 章　考察全体に関する先行研究の概観と本研究の立場

各空間的な関係を表す表現に関する先行研究は、該当する章で具体的に紹介する。ここでは、「空間的な関係を表す表現」の位置づけと全体に関する先行研究について述べたうえで、本研究の立場について説明する。

「うえ」「うち」などのような空間的な関係を表す表現が名詞においてどのような存在であるかについて、鈴木（1972）、中野（2004）、方（2008）などは「形式名詞」と、松下（1924）、田窪（1984）、寺村（1992）、高橋（2009）などは「相対名詞」としている。寺村（1992:13）では、「時間的・空間的な相対的位置関係」を表す表現として、「うえ」などを挙げている。本研究では、各表現に単独で使用され、実質的な側面もあると考えられ、形式名詞や相対名詞といった用語の違いには触れず、言語の実態について記述する。

寺村（1981:104）では、「名詞の中のあるものが、本来の名詞に託される構文的機能――述語に対する補語となったり、文の題目や、題目に相対する述語の実質概念を表したりする――を離れて、形式的には連体修飾構文の被修飾語としてあるコトを承け止め、それを次の文に副詞的に修飾させる、つまり接続助詞のような働きをしたり、ダと結びついて助動詞のように働いたり、あるいは文末に来て終助詞化したり（「マア、イイ子ダコト」）する、そのような構文的な機能を担うのに応じてその実質的な意味が稀薄になる、そのことが「名詞の形式化」であると理解すべきであろう。「形式名詞」という名詞の下位類があって、それが共通の意味・機能を常にもつと考えるのは正しくない。もっとも、このことは、そのように機能的に分化した名詞を、それぞれの統語類型の中に分属させれば万事コトが済むということを意味しはしない。トコロならトコロ、モノならモノという語の本来持っていた実質的な意味[2]――（中略）――が、どの程度「機能語」化したそれらに残っているかということはそれなりに興味ある題材であろう。」[3]と示唆され、このうちの「ハズダ、ワケダ、モノダ、コトダ、トコロダ、ノダ」を取り上げ、論じた。引用者による下線部で示しているように、「ところ」「こと」「もの」のような名詞の類型分属というより、このような名詞の本来持っていた実質的な意味がどの程度機能語化したそれらに残っているかということは興味ある題材である。空間的な関係を表す「うえ」「うち」「上（じょう）」などについても、同様に思われる。

「うえ」「うち」などのような空間的な関係を表す表現の機能語化した用法は漂白化[4]、

---

[2] 本稿で取り扱う「うえ」「うち」「上（じょう）」のような語・語構成要素においても、その本来の意味を持つ場合について述べるとき、「実質的な意味」という用語を使用する。

[3] 下線部は引用者による。

[4] 具体的・文字通りの意味の消失。（秋元（2015:20））

保持化[5]、脱範疇化[6]などのような文法化と関わる現象が見られるため、先行研究では、空間表現の機能語化した用法（例えば、「うえ」の接続助詞用法、「うち」の時間的な接続助詞用法）や、ほかの類似表現との対照考察などに注目し、考察したものが多い。また、「うえ」のような表現の意味用法の連続性に関して、共時的には、認知言語学の立場から、類似性による図示でその拡張方向を考察するものがある。一方、通時的には、明治時代の用例と現代の用例を比較し、各用法の派生について考察したものがある。

空間表現の各意味用法の連続性については、認知言語学の視点から考察するものが多い。この立場は意味間の繋がりを説明するのに有効かもしれないが、内容語と機能語の間の繋がりを説明するには不十分なところがあると考えられる。本研究では、通時的に派生の方向性などを考察するのではなく、意味機能に広がりがある空間的な関係を表す表現の各意味用法の間の関連性に注目したい。これは、日本語教育の立場においても意義のある視点であると考えられる。

また、今まで注目されてきた「うえ」「うち」のような語のみならず、冒頭で触れたように、本稿は意味機能に広がりがある空間的な関係を表す表現として、語構成要素（例えば「上（じょう）」）及びそれを構成要素とする語（例えば「―上」）もあり、空間的な意味用法と接続表現のように振る舞う用法を持ち、その間に関連性と共通点があり、検討す余地と価値があると主張したい。

本研究は、各表現の各意味用法の間の関連性を把握するには、意味機能にある共通点を論じることが必要であると考えられる。また、空間的な関係を表す表現は、話し手／語り手による事態把握のあり方とも関わる。具体的には、動作の発生や状態の存在の位置方向などに関する叙述としての事態把握と、話し手／語り手がある事物や事態、あるいは事態間の関係に対する判断、認識を出す立場や条件としての事態把握などがあり、これらを言語化する手段と方法として各表現が多様な用法で使用されると考えられる。

「うえ」「うち」「―上」などのような表現は機能語化し、前後文脈の間の関係を示す接

---

[5] 語彙的機能から文法的機能へ文法化する際、その語彙の元々の意味が残っており、それが文法的な分布に制約を与える。（秋元（2015:10）

[6] 名詞や動詞のそれぞれが持っている形態的・統語的特性を失って、前置詞や接続詞などの特性を新たに持つことである。（秋元（2015:10）

続表現のように振る舞うのには必然性があると考えられる。本来の用法として、要素と要素を関連付け、その間の空間的な関係を表すことができるためである。このことから、このような要素間の関係のあり方を視野に入れて検討する必要がある。この要素と要素を関連付け、その間の関係を示すのが各用法の間で共通しているものであると思われる。

また、空間的な関係を表す表現が共起する要素（主として前起要素[7]）と共に表す意味も大切なポイントであると考えられる。本研究では、基本的な意味として、「ある側面／範囲において」という意味を表し、共起する要素の種類と性質によって、この「ある側面／範囲の前面化」は後続内容に先行する条件になることを提示する。また、抽象的な意味の場合、空間的な関係を表す表現は前起要素と共に接続の前件となり、先行条件という意味が優位となることがあることも主張する。なお、この「ある側面／範囲の前面化」は意味的側面から見て、各用法の間で共通しているところであると思われる。

更に、話し手／語り手による事態把握のあり方は、意味機能と連動し、述語で表す場所の叙述、ある側面という立場・条件を前面に出し、それに基づく判断と認識を述べる場合、後続内容を述べる先行条件として前述内容を出す場合、などがある。

このように、空間的な関係を表す表現と共起する要素間の関係のあり方の把握、話し手／語り手の事態把握の仕方に加え、全体の意味と用法の共通点も視野に入れ、空間的な関係を表す表現の意味機能の広がりにおける関連性を記述することが本研究の最大の目的である。空間的な関係を表す表現が接続表現のように振る舞うメガニズムとして、上記のような関連性を明らかにしたい。

## 第 3 章　考察対象と考察方法

本研究では次の表現を考察対象とする。

①空間的な上下関係を表す表現：自立語「うえ」(「した」についても該当する部分で少々触れる)、語構成要素「じょう」とこれを後要素とすると語「―上」、「―上」のうち個別に考察する「事実上」

[7] 空間的な関係を表す表現と共起する要素は「机の上に本を置いた」の「机」と「本」のように、複数の場合が多く、そのうち、「上」の前にくる「机」のような要素を「前起要素」と呼ぶことにする。

②空間的な内外関係を表す表現：自立語「うち」(「そと」についても該当する部分で少々触れる)

考察対象の選定理由は以下のとおりである。

①これらの表現は事物と事物を関連づけて、その間の空間的な関係を表すという実質的な意味を表す用法を持っており、機能語化した用法として、接続表現のように振る舞う用法も持つ。

②具体的な事物間の空間的な関係を表す用法のみならず、抽象的な事物間の関係または事物と事態の関係を表す用法、そして事態間の関係を表す用法があり、用法と機能の広がりが見られる。

③具体的な意味を表す場合、抽象的な意味を表す場合と機能的な働きをする場合の間に関連性がある点において、これらの表現にはある程度の共通性が見られ、それが空間的な関係を表す表現全体としての共通性ともいえると考えられる。

④上記のような、意味用法の広がりとして機能語化した用法を持つ空間的な関係を表す表現は「うえ」のような語に限らず、「上（じょう)」のような語構成要素にも見られ、結合する要素によって、意味用法に広がりが見られる。また、よく使用される個別用法である「事実上」は副詞用法、接続詞のように振る舞う用法と談話標識に近い用法があり、意味用法の更なる広がりが見られるため、「―上」の全体像の一環として取り上げる。

上記のような考察対象を現代日本語のコーパスで検索し、収集した用例に基づき、分類したうえで、記述と分析を進める。

以下、第 1 章で自立語「うえ」の意味用法と機能について、第 2 章で自立語「うち」の意味用法と機能について、第 3 章で語構成要素「上（じょう)」の意味用法と語「―上」の機能について、第 4 章で「事実上」の意味用法と機能について、第 5 章で関連性と共通性からみる空間的な関係を表す表現について、第 6 章で考察のまとめと今後の課題について論じる。

# 本　論

## 第１章　自立語「うえ」の意味用法と機能

### 1.1　はじめに

日本語の名詞の中には、「時間的・空間的な相対的位置関係」を表すものが多数あり、それらには共通の特性がある。「うえ」はその中の一語であり、多く使用されている。

現代日本語において、「うえ」には次のような用法がある。

(1) 机の**うえ**に本を置いた。[8]

(2) 彼らは私たちが勉強している**うえ**で騒いでいる。

(3) 僕の**うえ**に兄と姉がいる。

(4) 仕事の**うえ**で、大きなミスをした。

(5) このお店はおいしい**うえに**、やすい。

(6) すべての条件を承知した**うえで**、契約を結んだ。

例で示したように、「うえ」は多様な表現が前起して、空間的な位置方向（例（1）（2））、抽象的な社会や年齢などの属性（例（3））、話題の側面や範囲（例（4））などを表すことができる。また、「で」「に」などとひとまとまりになり、累加、条件などの事態間の相乗関係、論理的な関係（例（5）（6））表す場合もある。これらの「うえ」は用法によって意味機能が異なるが、共通している部分があると考えられる。

このような空間的な関係を表す「うえ」について、それが機能語化した後の接続表現としての意味用法、あるいはほかの類義表現との区別に注目する先行研究が多い。しかし、具体的な用法ごとに、いかに実質的な意味を反映させ、接続の機能語として用いることができるのか、繋がりを持つと考えられるそれらの用法間の関連性と共通しているところを考える視点も大切である。

---

[8] 本章で用例を挙げるとき、語や句が前起する場合において、「要素 A＋の＋**うえ**＋に＋要素 B＋述語」のように下線、ゴシック体、波線で「うえ」の空間的な関係に関わる対象、「うえ」と述語を示す。節や文と共起する場合においては、述語があっても、それを含む節や文が要素 A と要素 B に該当すれば、その節や文の全体を直線で示すことにする。

この章では現代日本語における「うえ」を取り上げ、空間的な意味を表す場合と、その意味用法が広がり、接続表現のように機能する場合との間にどのような関連性があるか、その関連性を検討する鍵は何であるか、「うえ」の各意味用法と機能との共通点が何であるか、などについて記述し、考察する。

以下、先行研究の紹介は 1.2 節で、「うえ」の意味用法に影響する要素については 1.3 節、語や句が前起する「うえ」の意味用法と機能については 1.4 節、節や文前起する「うえ」の意味用法と機能については 1.5 節、各意味機能の広がりにおける関連性と共通点については 1.6 節で詳述する。そして、1.7 節で記述した内容をまとめる。

## 1.2　先行研究

「うえ」のような表現の性質と位置づけについて、先行研究としては「形式名詞」「相対名詞」などと呼ぶもの、「時間的・空間的な相対的位置関係」を表すとするもの、「空間的な関係を表わす語彙」として扱うものがある。

全体的に、「うえ」の機能的用法に注目している研究が多い。空間的な意味を表す意味用法と機能的用法の間の連続性について考察した研究もあるが、ほとんど認知言語学の立場から図示しながら論じたものである。機能語化した用法に注目する研究として、文法化や複文などの視点から考察した砂川（2000）、日野（2001）、田中（1999）（2004）、馬場（2005）（2006）、方（2008）（2009）（2013）、黄（2014）、安（2016）などがある。また、空間的な用法を取り上げた研究には森田（1989）、高橋（2009）、陳（2014）などがあり、そして、認知言語学の視点からの考察には安（2014）、鍾（2013）、長谷部（2013）、趙（2016）などがある。以下、その中の一部を紹介する。

森田（1989）は、「うえ」を取り上げ、分析 1 と分析 2 に分け、前者を図を用いて、具体な基準点によって方向、位置、段階、連続していることばの「前後」に、後者を使用タイプと意味によって「うえに」「うえは」「うえで」「うえ」の四つに分けてそれぞれ説明しているが、意味用法の連続性については触れていない。

砂川（2000）は、空間の概念を表す語が時間の概念を表す付属語になったものを取り上げ、「うえ」を含む時間表現を説明し、「した」を用いた時間表現は普通許されないと述べ

ている。その理由として、時間経過に伴って経験を重ねていくという「累加」の概念は我々に馴染みやすいが、時間経過に逆らって経験を取り除いていくという「減少」の概念は馴染みにくいという日常的な事柄に対する把握のあり方の違いを提示している。

日野（2001）は、指示的なものから文法的なものになる例として「うえ」を挙げ、上代の「うへ」は「ものの上の表面」を指す名詞として使われていたのに対して、現代語の「うえ」は形式名詞として用いられ、二つの節をつなぐ文法的な機能を持っていると説明している。

方の一連の研究は、「うえ」「した」「もと」「なか」「まえ」など空間を表す形式名詞を取り上げ、これらの表現の文法化について通時と共時の両観点から考察した。方（2008）は名詞と述語の組み合わせに注目し、「うえ」「した」「もと」などを後置詞化用法と接続助辞化用法に分けて意味機能を記述した。両用法における各表現の特徴を比較し説明したが、連続性については触れていない。修飾名詞と述語の意味タイプのみならず、具体名詞と抽象名詞に分類したうえで、修飾語と対象語及び述語の様相などを含む意味の存在条件を総合的にみる必要があると考えられる。

高橋（2009）は「相対名詞とはそれ自体では意味として完結せず、修飾要素を伴うことで意味的に充足する名詞類である」としており、空間相対名詞の修飾節構造を取り上げ、「基準点用法」と「部分用法」の観点から特徴を述べ、「部分用法が節をとれない」ことを示している。

長谷部（2013）は「前接句の特徴と「うえ」に後接する助詞の現れ方、つまりある種の格助詞（場合によってはとりたて助詞）に固定されているかどうかを指す」という統語的な制約の度合によって、「うえ」を空間名詞（実質名詞）、形式名詞、複合辞に分け、意味を分類、包括的に整理した。統語的な特徴について詳しく論じているが、空間的な意味と非空間的な意味の拡張関係について、他の連続性を取り上げる考察と同様に、認知言語学の視点から図示しながらその関連性を述べている。また、「うえ」の意味補足をする共起表現の省略可否についてや、認知的な視点から捉える意味の連続に関して、示唆的な指摘を行っている。

黄（2014）は「うえ」が方位詞から形式名詞になり、連体修飾成分を受け、再分析で修飾関係を離脱し、助詞と共に接続助詞のように機能すると提示した。そして、日本語の形

式名詞にはこのような現象がよく見られると述べた。

趙（2016）は認知言語学の枠組みに基づき、日本語と中国語における空間辞の意味的・機能的な共通点と相違点を記述した。「うえ」の空間的な意味を図示し、「物体の外側」と「位置的高所」に、非空間的で語彙的な意味を「優れる」「より高い社会地位」「数量が多い」「表向き」の四つに、事柄の関係を示す機能拡張という非空間的な用法を「うえで」の「前提・継起」「領域・側面」、「うえに」の「添加」、「うえは」の「因果関係」に分け、メタファーによる拡張の観点から検討した。趙（2016）は、空間的な意味と機能的な意味との連続性を視野に入れて紹介したが、各意味用法の存在条件については詳しく論じていない。また、意味的な連続性と機能の拡張のほか、形式的な連続性もあり、連続性に関しては「うえ」「した」の意味用法の全体像を示しながら、更に掘り下げる余地があると考えられる。

「うえ」の意味の拡張については、認知言語学の立場から説明したものが多い。この立場は意味間の繋がりを説明するのに有効かもしれないが、内容語と機能語の間の繋がりを説明するのには足りないところがあると考えられる。方（2008）のように名詞と述語の組み合わせに注目する必要があると述べた先行研究があるが、述語とともに、「うえ」によって関連付けた要素間の関係を総合的に見る必要があると考えられる。

本章では「うえ」の性質を定める用語に拘らず、「うえ」を用法と機能から「空間的な関係を表す表現」と呼び、序論で述べた内容に基づき、以下の 3 点を軸に、「うえ」の各意味用法と機能、特にその間の関連性と共通点について検討する。

①「うえ」の意味用法に影響する要素

②前起要素のあり方、「うえ」と前起要素を合わせた構成体の意味と機能

③「うえ」によって関連付ける要素間の関係のあり方、各関係の共通点と相違点

### 1.3　「うえ」の意味用法に影響する要素

現代日本語における「うえ」には多様な用法がある。例えば、例（7）のように「上」が上着を表し、実質的な意味を持ち、単独で使用される場合、例（8）のように前起要素が「うえ」の直前ではなく、文脈にある場合、また、1.1 で挙げた例のように様々な要素と共起す

る場合がある。

(7)「風邪だろう。畑ばかり耕していて疲れたんだ。**上**を脱ぎたまえ。診るだけみよう」医者は聴診器をとりあげた。(冬の旅　立原正秋)

(8) 彼らはかなり沖に泳ぐ人が休むために浮かしてある古い和船のところまでいった。それから船の上に、「ちょっといいネエちゃん」が二、三人休んでいたので、二人も**上**に上った。(太郎物語　高校編　曾野綾子)

上記のような、内容を補足する要素と共起せず単独で使用される「うえ」があるが、この研究は「うえ」の各用法の間の関連性を検討し、「うえ」によって関連付ける要素のあり方と要素間の関係に注目するため、「うえ」と関わる要素が 1 つしかない場合（要素間の関係について論じることができない場合）は用法として触れることはするが、関連性の検討の対象としない。ここでは、以下のような形式で使用される「うえ」を中心に論じる。実際、用例を観察した結果として、「うえ」は普通このような形式で使用されていることが分かる。

要素 A＋**うえ**＋要素 B＋述語

要素 A と要素 B はそれぞれ異なる集合の中の変項と見なすことができる。「うえ」によって 2 つの要素[9]が関連付けられる。例えば、例（1）では、「机」と「本」は「うえ」と共起し、「うえ」によって関連付けられる両要素である。具体的な動作を表す述語「置く」と共に、「机」と「本」の間の空間的かつ具体的な位置関係が明らかになる。これはまさに上記の形式に当てはまる典型的な用法である。また、要素間に空間的な関係があるが、「うえ」によって関連付けられるのは場所名詞や物名詞ではなく、例（2）で示している「私たちが勉強している」「(彼らは）騒いでいる」のような節や文である。更に、例（6）のように、「うえ」は「すべての条件を承知した」と「契約を結んだ」という 2 つの節や文を関連付け、その間の関係を示す場合がある。

[9] 要素 A と要素 B はそれぞれ 1 つとは限らず、複数の場合もある。

（1 再掲）机の**うえ**に本を置いた。

（2 再掲）彼らは私たちが勉強している**うえ**で騒いでいる。

（6 再掲）すべての条件を承知した**うえで**、契約を結んだ。

このように、1.1 節で挙げている例（1）～（6）において、「うえ」によって関連付ける「机」と「本」、「仕事」と「大きなミスをした」、「私たちが勉強している」と「(彼らは)騒いでいる」、「僕」と「兄と姉」、「すべての条件を承知した」と「契約を結んだ」のように、「うえ」によって関連付けられる要素 A と要素 B とは、事物間、事物と事態の間、あるいは事態間の空間的、時間的、社会属性的（抽象的）、論理的な関係であり得る[10]。ただし、要素 A、要素 B と述語はいつも揃って現れるのではなく、場合によって、一部が現れないこと、述語と対象語などがともにある事態を表し、全体で 1 つの要素に該当することがある。

上述したように、共起する要素の種類と性質によって、「うえ」の具体的な意味と用法が異なる。そのため、「うえ」の共起要素、特に前起要素を大きく語や句、節や文の 2 つの部分に分け、部分ごとに節を立てて論じる。

### 1.4　語や句が前起する「うえ」の意味用法と機能

この節では、語や句が前起する「うえ」の意味用法を考察するが、主として、名詞が前起するものに注目する[11]。「うえ」自身が位置、方向、範囲、対象などの意味を表すのではなく、共起する表現との組合せなど、使用される具体的な言語環境によって、これらの意味が現れるのである。例えば、「机のうえ」は共起する表現（格助詞、対象語の有無、述語など）によって、ものや人の存在位置、動作或いは変化の位置・方向・範囲、移動の経路、動作の対象などの意味を表すことができる。「ある人物のうえ」は、それが現れる具体的な言語環境によって空間的な位置方向、抽象的な意味を帯びている位置、あるいは社会・年

---

[10] 「過荷重発艦の**うえに**艦の動揺が激しい」という文における「過荷重発艦」のように、事物であるか、事態であるか、どちらにも入れにくいものもある。

[11] 「承知したうえで決めた。」のように、稀に対象語がなく（前文脈にある）、動詞一語が前起するものがあるが、それを「承知のうえで決めた。」のように言い換えることができる。動詞の場合、次節で述べるような節として前起するものが普通である。

齢・等級などの高低位置（属性というランキングのあるものにおける位置）などの意味を表すことができる。このように、前起する要素の細分類は「うえ」の意味用法を考察するのに有効である。また、位置、方向、範囲、属性などの意味のうち、具体的にどの側面が前面に現れるかは、文におけるほかの要素、述語なども含め、総合的に見る必要がある。

この部分の考察は、『分類語彙表—増補改訂版』の分類を一部援用し、「うえ」に前起する名詞を意味的に「自然物と自然現象」「身体と身体部分」「生産物と用具」「人間活動の主体」「抽象的な関係と人間活動（精神と行為）」に分け、各類における「うえ」の意味と用法を考察する。以下、具体的な事物を表す前の 3 類を合わせ、1.4.1、1.4.2 と 1.4.3 の 3 節に分けて述べる。

### 1.4.1「自然物と自然現象」「身体と身体部分」「生産物と用具」を表す名詞が「うえ」に前起する場合

「うえ」に前起する名詞には、「自然物と自然現象」「身体と身体部分」「生産物と用具」を表すものがあり、それぞれ次のような語例がある。

「自然物と自然現象」を表すもの

砂、坂、崖、岩、土、波、水、地面、雪、草、芝生、海、石、砂利、丘、湖、火、雲、山、洲、礁、氷、葉、地平線、灰土、赤土、枝、花、原、草原、野、空、など

「身体と身体部分」を表すもの

膝、頭、顔、皮膚、眼／目、乳房、胸、唇、口、腕、体／躯、痣、額、肩、手、掌、背、胃、腹、眉、目蓋、耳、足、頬、もも、鼻柱、素肌、地肌、鎖骨、尻、腰、など

「生産物と用具」を表すもの

机、畳、床、リング、ベッド、テーブル、屋根、布団／蒲団、橋、棚、紙、線路、塔屋、台、道、舟／船、卓、椅子、ベンチ、箪笥、十字架、塔、マット、カウンター、パジャマ、輸送車、枕、絨緞、板、堤、膳、板張、藁、莫蓙、布、コンクリート、階段、靴、皿、シャツ、マットレス、など

この場合、「うえ」は前起する名詞と共に文中で具体的、空間的な意味を表す。用例として、以下のようなものがある。

(9) 男は、砂に刻まれた風紋が見分けられなくなるまで、砂丘の**上**を歩きまわった。(砂の女　安部公房)

(10)「なんだかすごいですね」「朴葉っていうのよ。大きい葉っぱでしょ。この葉っぱの**上**で味噌を焼くの」(中略) 森川が解説者のような口調で言った。(新橋烏森口青春篇　椎名誠)

(11) 老師の姿だけが見えないので、思わず首を生垣の**上**へもたげて見まわした。(金閣寺　三島由紀夫)

(12) 良子は、セーターの**上**に、チョッキを着て、どこから見ても、その辺のおかみさん族としか見えないような恰好をしていた。(太郎物語大学編　曾野綾子)

(13) ステージの**上**でジャズが演奏され、裾長いドレスを着た化粧の濃い女たちが、複雑な照明のあるほの暗い部屋のなかを半透明のようになって静かに歩きまわった。(青春の蹉跌　石川達三)

これらの例において、「前起要素＋うえ」は 1 つの文の成分（多くの場合、場所を示す補語）として働き、「で、に、から、まで、を、へ」など多様な格助詞と共起し、述語動詞と格関係をなし、具体的な位置方向などを表す。

この場合、上記した「机のうえ」のように、「うえ」は共起する表現によって、前起要素で表す事物の位置、方向、範囲などのような各側面のうちの一側面を前面に出して、具体的に表す。例 (9)「男は……砂丘の**上**を歩きまわった」のように、「うえ」は 2 つ（あるいは 2 つ以上）の要素と共起し、、前起要素である「砂丘」のある側面（中でもなく横でもない「うえ」という側面）を前面に出して、後続するもう 1 つ（あるいは複数）の要素との空間的に相対する位置関係（ここでは述語動作の経路）を表す。これらの例において、「砂丘」と「男」、「葉っぱ」と「味噌」、「首」と「生垣」、「セーター」と「チョッキ」などは「うえ」によって関連付けられ、それに後続する、述語で表す動作、状態などによって、その間の具体的な位置関係が明示される。

「自然物と自然現象」
「身体と身体部分」　を表す要素 A　＋**うえ**＋要素 B＋述語
「生産物と用具」

「自然物と自然現象」「身体と身体部分」「生産物と用具」を表す名詞が「うえ」に前起する場合、要素 A、要素 B と「うえ」との順序が固定せず、「うえ」と各要素との組合せ方は多様である。「うえ」は、上記のような 2 つ（または 2 つ以上）の要素を関連付ける場合と、1.3 節で挙げた例（7）のような実質的な意味を持ち、単独で使用される場合、例（8）のような前起要素が「うえ」の直前ではなく、文脈にある場合、「机の**上**を片づけた」「ステージの**上**は明かるい」のように、「うえ」と共起する要素が 1 つであり、「名詞＋うえ」が対象語あるいは主題になる場合とがある。

このように、要素 A と要素 B のあり方として、それぞれ以下のような場合がある。

①要素 A が必要ではない場合[12]（1.3 節で述べた）

②要素 A が必要であるが、省略され、前文または文脈にある場合

③要素 B がなく、「要素 A のうえ」が対象語または主題になる場合

④要素 B が述語動詞で表す動作、変化、状態の主体であり、前文または文脈にある場合（例えば、例（16））。これと関連するものとして、述語に要素 B ではない別の対象語があり、要素 B は「対象語＋述語」全体で表す動作、変化、状態の主体であるという場合がある（例えば、例（17））。

（7 再掲）「風邪だろう。畑ばかり耕していて疲れたんだ。**上**を脱ぎたまえ。診るだけみよう」医者は聴診器をとりあげた。（冬の旅　立原正秋）

（8 再掲）彼らはかなり沖に泳ぐ人が休むために浮かしてある古い和船のところまでいった。それから船の上に、「ちょっといいネエちゃん」が二、三人休んでいたので、二人も**上**に上った。（太郎物語　高校編　曾野綾子）

（14）表参道までくると、勤労奉仕の女学生の一団が玉砂利の**上**を清掃していた。（楡家の人びと　北杜夫）

（15）水の**上**は急にうす暗くなり、あたりの山々がまっ黒になった。（青春の蹉跌　石川達三）

[12] 節のタイトルは「「自然物と自然現象」「身体と身体部分」「生産物と用具」を表す名詞が「うえ」に前起する場合」であり、前起要素である要素 A があるということが前提となっているが、要素 A、要素 B と「うえ」の組合せ方として、要素 A がない場合があるため、1.3 で述べた内容をここでもう一度提示することにする。後述する 1.4.2 の場合も同様である。

（16）かなり長時間を要したような気持がする。やがて地面の**上**に立つことが出来た。（黒い雨　井伏鱒二）

（17）小さな獣が一匹、きょとんとした表情で、枝の**上**から僕等を見下していた。（草の花　福永武彦）

①の例として、例（7）がある。この場合、関連付ける要素がなく、「うえ」は実質的な意味を持ち、単独で使用される。

②の例として、例（8）がある。「うえ」は文脈にある、あるいは省略され潜在的になった要素 A「船」の一側面を前面に出し、「二人」という要素との空間的な位置関係を示す。

③の場合、例（14）と例（15）がある。要素 A の一側面が「うえ」によって前面に出され、述語動作・状態の対象語または文の主題になる。この場合、「うえ」によって関連付けられる要素間の関係というものが存在しない。

④で示す 2 つの場合において、例（16）のように、形式上要素 B がないようであるが、実際には前文または文脈に潜在しており、それは語り手または登場人物のような主体である。例（17）において、要素 B が述語動作の対象語である「僕等」ではなく「僕等を見下していた」という「対象語＋述語」全体で表す動作の主体「獣」であり、文脈に潜在的に存在し得る。いずれにしても、「うえ」は要素 A の一側面を前面に出し、要素と関連付き、述語と共に、その要素間の空間的な関係を示す。

これらの用法から、「うえ」は多様な用法を持ち、各要素との組合せ方も多様であることが分かる。ただし、共起する要素の種類、特に前起要素のあり方によってそうとは限らない場合があり、これに関しては後述する節で述べる。

1.4.1 では、「自然物と自然現象」「身体と身体部分」「生産物と用具」を表す名詞が「うえ」に前起する場合について述べた。この場合、「うえ」と要素間との組合せ方が多く、「うえ」と前起要素を合わせた構成体は 1 つの文の成分として働き、多様な格助詞と共起し、述語動詞と格関係をなし、具体的な位置方向などを表す。要素 A と要素 B はそれぞれ現れない場合があるが、両方とも現れる場合において、「うえ」は要素 A の一側面を前面に出し、述語で表す動作や状態と共に、要素 B との空間的な位置関係を示す。

### 1.4.2「人間活動の主体」を表す名詞が前起する場合

「うえ」に「人間活動の主体」を表す名詞が前起する場合、人名や人称代名詞のようなものがよく現れるが、人物のほか、「都会」「都市」のような人間の組織・団体・グループなどを表すことができる抽象的な人間活動主体と共起するものもある[13]。

このような場合、具体的、空間的な意味を表すものと抽象的、属性的な意味を表すものがある。属性的な意味を表すことができるのは、人間という主体の特性と関わり、年齢や地位、階級などの社会的な属性があるためである。

（18）木の葉が、はらはらと僕等の**上**に落ちて来た。（草の花　福永武彦）

（19）四畳半に、敷布団を二枚敷き、そこへ三人の青年たちが転がっているのだから、雨戸も閉めてなければ、掛けものもない。泥棒が入って来たら、三人の男たちの**上**に足を踏み入れてたまげるであろう。（太郎物語大学編　曾野綾子）

（20）客車は無気味にきしんで、信夫の**上**に乗り上げ、遂に完全に停止した。（塩狩峠　三浦綾子）

（21）「私は」と、なおも院長はつづけた。彼は普通の会話では「ぼく」と言い、機嫌がよくなるにつれてよく「ぼかあねえ」と言ったが、それは決して軽佻にはひびかず、充分にモダンで人の**上**に立つ者として可笑しくもなかったのである。（楡家の人びと　北杜夫）

---

[13] 例として、以下のようなものがある。

①雲はじっとしているようで、決してじっとしていなかった。ぐらぐらと東に向けて傘を拡げるかと思うと、また西に向けて広がって行き、東に向けてまた広がって行く。（中略）それが広島市の**上**へ襲いかかりそうだ。（黒い雨　井伏鱒二）

②犬の遠吠えが聞えたが、応ずる他の犬の声はなかった。飼犬たちも多くは捨てられたり殺されたりしているのだ。やがてこのところどころ傷めつけられた都会の**上**におおいかぶさろうとする夜は、燈火管制のゆえだけではなく、異常に濃く深く、あたかも古代の、原始時代のそれを連想させた。（楡家の人びと　北杜夫）

③待てども待てども、京都は空襲に見舞われなかった。あくる年の三月九日に、東京の下町一帯が火に包まれたというしらせをきいても、災禍は遠く、京都の**上**には澄んだ早春の空だけがあった。（金閣寺　三島由紀夫）

（22）保男は、三人兄弟のいちばん**上**で、下に弟と妹がいる。（冬の旅　立原正秋）

この場合においても、「前起要素＋うえ」は 1 つの文の成分として働き、「に、から、へ」などのような多様な格助詞と共起し、述語動詞と格関係をなすことができる。ただし、1.4.1 節の場合ほどではなく、人間活動の主体という空間性に満ちていない名詞の性質に制限されていると考えられる。

例（18）（19）（20）における「うえ」は空間的な意味を持ち、登場人物とほかの人物や事物との空間的な位置関係を表す。この場合、1.4.1 節で述べたものと同様に、「うえ」は前起要素で表す人物の空間的な位置、方向などの各側面の内の一側面を前面に出して、具体的に示す。「僕等」と「木の葉」、「三人の男たち」と「泥棒」、「信夫」と「客車」のような要素は「うえ」によって関連付けられ、それに後続する、述語で表す動作、状態などによって、その間の具体的な位置関係が明示される。

例（21）（22）における「うえ」は空間的な意味がなくなり、社会地位・年齢・階級など、ランキングをつけて属性となる位置の高低という抽象的な位置を表す。この場合において、「うえ」は前起要素を比較の基準として前面に出し、関連付ける要素間の抽象的な位置関係であるランキング関係を示す。比較の基準を 1 つの捉える角度と見ると、この場合における「うえ」も「ある側面を前面に出す」用法があると考えられる。また、比較基準の前面化は基準という比較する先行条件を前に出すという読み方もでき、「先行条件」という意味が潜在的に存在すると考えられる。

属性を表す場合、例（23）のように、比較の基準はよく「のうえ」の直前ではなく、文脈に現れる。

（23）坊主頭の中学四年生の米国も、その目を少し赤くしていた。が、隣にいるすぐ**上**の姉が、あまりに大量の涙を顔じゅうに滴らせるので、彼はいささかのばつの悪さ、それほど涙の出てこない自分に罪ぶかさをも覚えていた。（楡家の人びと　北杜夫）

このように、「人間活動の主体」を表す名詞が「うえ」に前起する場合においても、要素 A、要素 B と「うえ」との順序が固定せず、以下で示しているように、「うえ」と各要素と

の組合せ方は多様である。ただし、組合せ方は 1.4.1 の場合ほど自由ではない。

①要素 A が必要ではない場合

②要素 A が必要であるが、省略され、前文または文脈にある場合

（24）こういった変った性格の人物だから、星の記事が連日の紙面をにぎわしたのも、**上**からの指示でなく彼の独断だったのかもしれない。（人民は弱し官吏は強し　星新一）

（25）純子は、短大出というので、後輩とはいえ、高卒の伸子より少し給与は**上**なのである。（女社長に乾杯！　赤川次郎）

①の例として、例（24）があり、「うえ」は「上司」という実質的な意味を持つものとして単独で使用され、要素 A が必要ではない。

②の場合、例（23）と例（25）のようなものが挙げられる。例（23）において、「米国の上の姉」のように、基準となる「誰か」である人物が文脈にあると解釈できるが、「うえ」に後接する要素 B、例えば「兄」「姉」などにも内容補足の機能があるため、前接する実質的な意味を補う部分がなくても使用でき、年齢の意味を表すことができると思われる。地位を表す場合も同様であり、「うえ」は要素 A で表している基準がなくても文脈で年齢、地位などを表すことができる。

要素 A が「人間活動の主体」を表す場合、1.4.1 で現れた要素 B がなく、「要素 A のうえ」が対象語または主題になるようなものは見当たらない。

また、「人間活動の主体」を表す名詞が「うえ」に前起する場合において、次のようなものがある。この場合、「うえ」によって関連付けられる要素間の関係は上記のものと異なると考えられる。

（26）ふたたび床にもぐりこむと、幼い頃から不眠症気味であったこの数え年十九の――歳ばかり徒らに増した周二の**うえ**に、ふしぎと素早い眠気が厚ぼったくおおいかぶさった。（楡家の人びと　北杜夫）

（27）彼は法科の学生であったから、国家の法律がどんなに重く人民の**上**にのしかかり、どれほど厳しく人民を拘束しているかを、充分に知っていた。革命を志すということは、この法律を敵に廻すことだった。（青春の蹉跌　石川達三）

（28）信夫は吉川が好きだった。ときどき思い出して会いたいと思っていたことも事実である。それなのに、その吉川の父の死を聞いても、信夫は吉川の**上**に起きた不幸を心から悲しんでやることができない。（塩狩峠　三浦綾子）

これらの例において、見た目は空間的な位置方向を表す場合と似ている。しかし、「うえ」によって関連付けられる主体と事物・事態との間の関係においては、空間的な位置方向を表す場合より空間性が薄くなっていると考えられる。「登場人物という人の境遇」「人が置かれている状態・状況」のような「要素 A のうえ」による抽象的な意味が前面化しており、「うえ」によって関連付けられる要素間に空間的な位置方向と関わらない抽象的な関係があると考えられる[14]。

1.4.2 では、「人間活動の主体」を表す名詞が「うえ」に前起する場合について述べた。この場合、「うえ」と要素間との組合せ方が多いが、1.4.1 の場合ほどではない。「うえ」と前起要素を合わせた構成体は、1 つの文の成分として働き、「に、から、へ」のような格助詞と共起し、述語動詞と格関係をなし、空間的な位置方向を表すほか、社会地位・年齢・階級のような抽象的な位置を表すことがある。要素 A がない場合もあるが、「うえ」は要素 A の一側面を前面に出し、述語で表す動作や状態と共に要素 B との空間的な位置関係を示すほか、要素 A を比較の基準として前面に出て、関連付ける要素間の抽象的な位置関係であるランキング関係を示す。「比較の基準」として先行する「要素 A＋うえ」から「先行条件」という意味も読み取れる。比較の基準は比較する対象より前面に出る必要があるためである。この場合において、「ある側面の前面化」という意味には空間的な意味を持つときと空間性がなくなり、抽象的な意味を表すときがあり、「先行条件」という意味は潜在的に存在するものであると思われる。

### 1.4.3「抽象的な関係と人間活動（精神と行為）」を表す名詞が前起する場合

「うえ」に前起する「抽象的な関係と人間活動（精神と行為）」を表す名詞には、次のよ

[14] 「身体と身体部分」を表す名詞が「うえ」に前起する場合においても、このような抽象的な関係を表すものがあるが、「身の上」のような慣用表現である。

うなものがある。

権利、生活、意識、抽象世界、友情、推測、仮説、平衡、意識、性格、名、気持、人生、感覚、現実、仕事、形、籍、手数、芸術、統計、操作、気持、承知、合意、覚悟、約束、考慮、全員立ちあい、覚悟、承知、協議、署名、御調査、共謀、学部別、恰好、風習、描写、一時間、二尺、など

このような抽象的な意味を表す名詞[15]が「うえ」に前起する場合、「要素 A＋うえ」という構成体は、文において 1 成分として働くが、「うえ」は空間的な位置方向などの一側面を前面に出すことができない。

（29）私は、数カ月前に、仕事の**上**で、致命的な失敗を犯していた。（一瞬の夏　沢木耕太郎）[16]

（30）操縦席の前部にいるパイロットは、いずれも怕いような、歯を喰いしばったような顔つきで前方を睨んでいる。過荷重発艦の**うえに**艦の動揺が激しいからだ。（楡家の人びと　北杜夫）

この場合、「前起要素＋うえ」と共起できる格助詞の種類は少なく、「で」「に」またはゼロ格である。例（29）において、「うえ（で）」は「ある側面において」という意味を表す。この例における「仕事の上」は全体として抽象的な側面を表し、後続する「致命的な失敗を犯していた」という話し手の叙述と認識を述べる立場として働き、「致命的な失敗を犯していた」という事態は「仕事という側面において・仕事という側面から言うと」という発言の立場（条件）から述べたことである。方（2008）で述べられているように、抽象的な名詞が「うえ」に前起する場合、後続内容にはよく話し手／語り手の判断、評価、認識を示す内容がしばしば現れる。本稿の立場から見れば、このような現象が話し手／語り手の

---

[15] 稀に、「（前略）茎が伸びかけていた。ところが、今日は二尺の**上**も伸びている。」「私はもう、一時間の**上**も待っとるですが」のような尺度を表す名詞が前起するものがある。

[16] 「うえ」に「抽象的な関係と人間活動（精神と行為）」を表す名詞が前起し、「ある側面において」という意味を表す場合、よく「～のうえで」のような形で現れるが、「～のうえに」もあり、例えば、「（前略）慎重に、この予定された筋道を自分の人生の**うえ**に実現して行かなくてはならない。（青春の蹉跌　石川達三）」のような例がある。

事態把握とも関わると考えられる。「子供の教育の**うえで**、いつも叱るのはよくない」のような文において、話し手／語り手は「子供の教育」という側面から後続事態を捉え、その立場が先行することで、認識、判断、評価などを表すものが後続するのである。この意味で、「要素 A＋うえ」は後続要素 B の先行条件として捉えることができると考えられる。

また、例（30）のように、「うえに」全体が累加の意味を表すひとまとまりとなり、「前起要素＋うえ」は述語動詞と格関係を持たないものがある。後続内容で示す状態の全体がひとまとまりの要素となり、「うえに」によって「過荷重発艦」という状態を示す前起要素と関連付けられる。累加という意味について、ある事物・状態・事態にもう 1 つの事物・状態・事態を追加すると捉えれば、前の事物・状態・事態を示す前起要素を後に追加するものの先行条件と捉えることができる。また、ある状態・事態の存在・発生と非存在・未発生をそれぞれ 1 つの側面と捉えれば、この場合における「うえ」も同様に、前起要素の一側面を前面に出し、後続する状態・事態を示す要素と関連付け、その間の相乗関係を示すと捉えることができると考えられる。

このように、「抽象的な関係と人間活動（精神と行為）」を表す名詞が前起する場合、「うえ」はある抽象的な側面、累加などの抽象的な意味を表し、空間的な意味を持たなくなる。「うえ」によって前面化する前起要素は、後続する状態・事態の先行条件となる。更に、「承知の**うえ**」「覚悟の**うえ**」のような場合において、「要素 A＋うえ」全体が後続事態の先行条件となる。ただし、このような場合はよく動詞や句が前起要素として現れる。これについては 1.5 節で詳述する。

要素 A と要素 B のあり方及び「うえ」と各要素の組み合わさり方について、これらは 1.4.1 節と 1.4.2 節で述べたような多様性を持たず、用法が限られている。要素 A も要素 B も必要なものであり、現れない場合は見当たらなかった。「要素 A が必要であるが、省略され、前文または文脈にある場合」があるが、その場合「その」「それ」のような指示詞が必要となり、例（8）のような省略の用法はない。また、この場合、「要素 A＋うえ」で示す抽象的な事物・状態・事態は、要素 B で示す状態・事態の先行条件となるため、普通、「要素 A＋うえ（で／に／ゼロ形式）＋要素 B」といった、ある程度固定している形式となる。

1.4.2 節の場合と同様に、この場合も見た目は空間的な位置方向を表す場合と似通っている。しかし、実際は「うえ」によって関連付けられる主体と事物・事態との間において、空間性が薄くなっていると考えられるものがある。

（31）家ごとに、男が居り女が居り、そして子供が居る。そこに家庭があり、人間の生活がある。その生活の**上**に、まるで黒い雲のように、国家の法律が重く掩いかぶさっているのだ。（青春の蹉跌　石川達三）

（32）星は最後にこう語り終えた。「……阿片事件の発端から結審までの、このおびただしい犠牲の**上**に築かれたものに、なにがあるでしょうか。そこには、ただひとつの教訓があるだけです。（後略）」（人民は弱し官吏は強し　星新一）

「うえ」が「生活」「犠牲」のような前起要素と合わせた「要素 A のうえ」によって、抽象的な側面が前面化しており、「うえ」によって関連付けられる要素間に空間的な位置方向と関わらない抽象的な関係があると考えられる。具体的な動作や変化を表す述語と共起しながらも空間的な意味を表さないこのようなものは「うえ」の比喩的な用法であると考えられる。

1.4.3 節では、「抽象的な関係と人間活動（精神と行為）」を表す名詞が「うえ」に前起する場合について述べた。「うえ」と前起要素を合わせた構成体は 1 つの文の成分として働き、「に、で」のような格助詞と共起し、抽象的な側面を表すほか、「うえに」のようにひとまとまりになり、累加の意味を表すことがある。この場合、「うえ」と要素の組み合わせの種類は 1.4.1 節と 1.4.2 節の場合と比べて少ないといえる。また、組み合わせる順序から、形式の固定化現象が見られる。要素 A も要素 B も必要なものであり、要素 A は省略可能であるが、その代わりとなる指示詞が必要である。抽象的な側面を表す場合、「うえ」は要素 A という側面を前面に出し、話し手／語り手の判断、評価、認識を出す立場を先行条件として示す。累加の意味を表す場合、「うえ」はある状態・事態の存在・発生と非存在・未発生のうちの一側面を先行条件として前面に出し、後続する状態・事態を示す要素と関連付け、その間の相乗関係を表す。この場合において、「ある側面の前面化」と「先行条件」は

共存するものであり、用法によって競合し、どちらかが優位になると思われる。

以上、1.4 節で、語や句が前起する「うえ」の意味用法について、「うえ」に前起する名詞を「自然物と自然現象」「身体と身体部分」「生産物と用具」「人間活動の主体」「抽象的な関係と人間活動（精神と行為）」といった意味的観点から分け、考察した。具体的な前起要素によって、共起する格助詞の減少、「要素 A＋うえ」と述語動詞との格関係の喪失、「うえ」と各要素との組み合わせ方の減少と制限、具体的な位置方向の表示から抽象的な側面の表示や累加への意味の変化など、「うえ」の意味用法の広がりには文法化と関わる現象が見られる。これらの現象と文法化の理論とを合わせることで、ある程度拡張の方向は把握できるが、方向性ではなく、空間的な関係を表す表現が接続表現として使用されるメカニズムを明らかにしたいため、各意味用法の間に共通し、関連するものに注目する。

「うえ」の意味用法に影響を与えるものとして、共起する要素と述語があり、なかでも前起要素に注目する。具体的な事物を表す名詞または人名詞が前起する場合、要素が必要でない場合や、省略され、文脈に存在する場合がある。一方、抽象的な関係や人間活動を表す名詞が前起する場合、要素の存在が必須（指示詞によって示される場合も含む）となり、「うえ」との組み合わせ方と順序も固定するようになる。このような相違点があるが、「うえ」の意味用法の広がりには共通点と関連性が見られ、それは「ある側面を前面に出す」ことと「先行条件」である。

空間的な位置方向を表す場合、「うえ」は具体的な事物のある側面を前面に出し、後続する要素と関連付け、その間の空間的な相対位置関係を示す。前面化する側面は、後続する事物に対するある程度の「先行条件」と捉えることができ、潜在的なものであると考えられる。

属性と関わる、年齢や社会地位、等級の高低を表す場合、「うえ」は比較の基準という側面を前面に出し、後続する人物・事物と関連付け、その間の属性関係を示す。比較の基準というものも潜在的な先行条件と見なすことができると考えられる。

抽象的な側面を示し、話し手／語り手の判断、評価、認識に先立つ立場として前面に出る場合、「要素 A＋うえ」は後続する内容である判断などを出す条件となり、顕在的な先行条件といえる。この場合、「うえ」は抽象的な側面を示す物事と後続する事態の間の相関関

係を示す。

累加を表す場合、「うえ（に)」はある事態・状態の発生・存在または未発生・非存在のどちらか一方の側面を前面に出し、後続する事態・状態と関連付け、その間の相乗関係を示す。累加の前項として、それ自身に先行条件の意味が読み取れると考えられる。また、「承知の**うえ**」のような後続事態の先行条件として使用されることがあり、累加の場合を含め、先行条件という意味が優位に立つと考えられる。

名詞が前起する場合のみならず、節や文が「うえ」に前起する場合においても、「ある側面を前面に出す」ことと「先行条件」から意味用法の広がりにおける共通点と関連性を見出すことができる。これについて、次節で検討する。

### 1.5　節や文が前起する「うえ」の意味用法と機能

1.4 節では、語や句が「うえ」に前起する場合について、名詞が前起するものを中心に述べたが、ここでは節や文が前起する場合について述べる。

先行研究では、節や文が「うえ」に前起する場合の「うえ（で／に／ゼロ形式)」の接続表現としての意味用法、他形式との対照などの観点から注目されてきた。本節では、各意味用法の関連性、その間で共通しているものに注目し、節や文が前起する「うえ」について、空間的な意味を表すもの、非空間的で抽象的な側面を表すもの、非空間的で前後内容の相乗関係、論理的な関係を示すものの 3 つに分けて述べる。

まず、節や文が前起する「うえ」が、空間的な意味を表す例として以下のようなものがある。

（2 再掲）彼らは私たちが勉強している**うえ**で騒いでいる。

（33）満池谷見下す丘に穴を掘り、行李に節子をおさめて、人形蟇口下着一切をまわりにつめ、いわれた通り大豆の殻を敷き枯木をならべ、木炭ぶちまけた**上**に行李をのせ、硫黄の付け木に火をうつしほうりこむと、大豆殻パチパチとはぜつつ燃え上り煙たゆとうとみるうち一筋いきおいよく空に向い、清太、便意をもよおして、その焔ながめつつしゃがむ、清太にも慢性の下痢が襲いかかっていた。（火垂るの墓　野坂昭如）

例（2）における「うえ」は、前起する節「私たちが勉強している」が示す事態全体を前面に出し、後続事態の「（彼らは）騒いでいる」と関連付け、空間的な位置方向を表し、その間の空間的な相対位置関係を示す。両方とも進行中の動作・状態であるため、場面性が強い感じがする。次の例（2）’と比較すれば、「勉強している私たちのうえで」より、「私たちが勉強しているうえで」の方が臨場感があり、前起する節で示す事態全体が「うえ」によって空間性を獲得していることが分かる。

（2）’ 彼らは勉強している私たちの**うえ**で騒いでいる。

例（33）における「うえ」は前起内容「（前略）大豆の殻を敷き枯木をならべ、木炭ぶちまけた」で示す動作の結果状態を前面に出し、後続する「行李」と関連付け、その間の空間的な相対位置関係を示す。

「うえ」が空間的な意味を表す修飾節と共起する「彼らは私たちが勉強している**うえ**で騒いでいる」のような構造をもつ文について、寺村（1992）に言及がある。寺村（1992）では連体修飾構造の類型として次のように分けている。

- 内の関係：付加的修飾（例：さんまを焼く男→男がさんまを焼く）
- 外の関係：内容補充的修飾
  - ふつうの内容補充（例：さんまを焼く匂い）
  - 相対的補充（例：深酒をした翌日）

そのうち、主名詞の種類（意味的特性）による「外の関係」の下位分類として、「上」と「下」、「前」と「後」、「当日」と「翌日」、「原因」と「結果」、「罪」と「罰」などのような「相対性」の名詞が主名詞であるものがあり、例えば次のような例である。「私たちが勉強をしている」という修飾節が主名詞「上」を「内容補充的」に修飾している。

（34）私たちが勉強をしている**上**で誰かが柔道の練習をしていた。[17]

[17] 用例番号はこの章の通し番号である。

また、黄（2016）では中右（1980）などを踏まえ、このようなものを主要部が関係節の内部にあるような節とし、「主要部内在型関係節（internally headed relativizative clauses）」と呼び、「ぼくはうっそうと茂る森の中を一人散歩した」と「ぼくは森がうっそうと茂る中を一人散歩した」を次のように区別した。

表 1　「［うっそうと茂る森］の中」と「［森がうっそうと茂る］中」の区別

| | ［うっそうと茂る森］の中 | ［森がうっそうと茂る］中 |
|---|---|---|
| 構文的 | 名詞性補文；<br>「森」は従属節を持つ外的主体；<br>「中」は二つの名詞をつなげる | 補文と副詞節の間の中間的構文；<br>「森」は従属節の主語に当たる内的主体；<br>「中」は二つの命題をつなげる |
| 意味論的 | 「森」は散歩の場所、「モノ（things）」をプロファイルする | 「森」は散歩の背景、「デキゴト（events）」をプロファイルする |
| 語用論的 | 「中」は二つのものをつなげるため、話し手はこの二つの名詞の意味関係を考えなければならない | 「中」は二つの命題をつなげるため、話し手はこの二つの命題の意味関係を考えなければならない |
| 認知的 | 事後の経験、臨場感なし；客観的な概念、抽象的 | 直接的な経験、臨場感あり；主観的な知覚、具体的 |

このように、意味的に同様なものでありながら、言い方によって違いが生じる。「彼らは私たちが勉強している**うえ**で騒いでいる」という例においても、同様のことがいえると思われる。「彼らは勉強している私たちの**うえ**で騒いでいる」と異なり、「私たちが勉強している」という出来事が「うえ」によって空間化され、「うえ」は「私たち」と「彼ら」との空間的な位置関係を示すとともに、空間性をもつ 2 つの出来事である「私たちが勉強している」と「彼らが騒いでいる」を繋げている。これは話し手／語り手による事態把握のあり方と関わり、黄（2016）で述べたように、臨場感のある主観的な知覚であり、話し手は「うえ」によって関連付ける 2 つの命題の意味関係を考えなければならないということである。

更に、この場合から、「うえ」によって関連付ける要素間の関係のあり方にある特性を見出すことができる。砂川（2000）では、空間概念を表す動詞と名詞が、実質的な意味を表す自立語から時間概念を表す機能語的な付属語へと変化するときの意味の転写について考察し、名詞においては空間の相対的位置や空間の形状に関する意味が、さまざまな時間概念として転写されることについて説明した。メタファーによる転写は有効な解釈であるといえるが、本稿は「うえ」によって関連付ける要素間の関係のあり方の視点から、要素 A と要素 B の関係は本来空間と時間の両方と関わり、用法によって、そのどちらか一方が劣り、もう一方が優位になることを主張したい。以下の 2 つの例を例（2）と例（33）と比べてみよう。

(2)”＊彼らは私たちが勉強した**うえ**で騒いでいる。[18]

(33)’ 満池谷見下す丘に穴を掘り、行李に節子をおさめて、人形蟇口下着一切をまわりにつめ、いわれた通り大豆の殻を敷き枯木をならべ、木炭ぶちまけている**上**に行李をのせ、(后略)

上記の例（2）における「うえ」の前起要素の「私たちが勉強している」は、例（2)”のような「私たちが勉強した」に言い換えられない。これに対し、例（33）における「うえ」の前起要素である「大豆の殻を敷き枯木をならべ、木炭ぶちまけた」は、「大豆の殻を敷き枯木をならべ、木炭ぶちまけている」と言い換えられる。これは、空間化の手続きとしての「うえ」によって関連付けた要素間の空間的な関係と時間的な関係に関わると考えられる。例（2）において、「うえ」は空間化の手続きとして働き、それによって空間化されている 2 つの進行中の事態である「私たちが勉強している」と「彼らが騒いでいる」は同一の空間、且つ同一の時間帯にあるものと考えられる。そのため、例（2)”のように言い換えることはできない。例（2)”における「私たちが勉強した」は完了した事態であり、なお、動作の結果として存続しておらず、この事態と後続する「彼らは騒いでいる」という事態とは時間的にずれているため、空間的な相対位置関係をなすことができない。これに対し、例（33）の「うえ」に前起する「大豆の殻を敷き枯木をならべ、木炭ぶちまけた」という一連の動作がもたらした結果は空間性のある実物として存続しており、後続する「行

[18] ここにおける「＊」は、この文のように言い換えられないことを示す記号である。

李」という事物と同一の空間、同一の時間帯にある。例（33）’において、「大豆の殻を敷き枯木をならべ、木炭ぶちまけている」は、進行中の動作ではなく、これらの動作の結果状態を表しているため、例（33）の言い換え文として成立する。このような要素間の空間的な関係と時間的な関係は共起する動詞の性質と関わり、今後より詳しく検討するつもりである。関連付ける要素の性質によって、要素間の空間的な関係と時間的な関係が異なると考えられる。また、名詞が前起する場合においても、空間的な関係以外に、潜在する時間的な関係があると考えられるが、これに関する詳しい検討は今後の課題の 1 つとする。

以上、節や文が前起する「うえ」が空間的な意味を表す場合について述べてきた。この場合、「うえ」は空間化の手続きとして前起する節で示す事態全体を前面に出し、空間的な位置方向を表し、後続する事物／事態と関連付け、その間の空間的な相対位置関係を示す。また、前面に出されるものは、進行中の動作としても、動作の結果状態としても、後続する事物／事態に先行するものであり、これとの空間的な相対位置関係を述べることの条件にもなっていると考えられる。この意味で、1.4 節で述べたように、前面化する空間的な側面は後続する事物に対するある程度の「先行条件」として捉えることができ、潜在的なものであると考えられる。

空間的な意味を表す場合のほか、節や文が前起する「うえ」は空間性を持たず、抽象的な側面、あるいは前後内容の論理的な関係を示すのに使用される場合が多い。

（35）探偵社は、何ともさびれた感じで、「外見はパッとしません」と、社長に当たる男は認めた。「しかし、事務所の広さ、人数の多さ、そんなものは、真実を探り当てる**上で**、何の意味もありません！」と強調する。（女社長に乾杯！　赤川次郎）

（36）「彼」を守ろうとする「意志」が「彼」に直接危害を加えようとしているわけでもない人間を、ただ「彼」が社会生活を営む**上で**不都合だからというのであっさり殺してしまうといった盲目性は、どちらかといえば女性的であり、母親のものであったが、あいにく「彼」の母親はすでに死んでしまっている。（エディプスの恋人　筒井康隆）

例（35）と（36）において、「うえ（で）」は「ある側面において」という意味を表す。

これらの例における「節＋上（で）」は全体として抽象的な側面を表し、後続する「何の意味もありません」「不都合（だ）」という話し手／語り手の判断と認識を述べる前の立場として働く。このような「節＋上（で）」で示す発言の立場という条件のもと、後続する内容で示す発言（判断、認識など）が述べられている。

寺村（1992:301）は、「「相対性」をもつもの（「上、下、前、後、結果」など）は、一般に副詞的性格をあわせ持っていることが多い。だからこれらの名詞を底とする連体修飾構造は、全体として名詞句としてより大きな文の中の構成要素となることもできるのだが、一方底の副詞性のゆえに、また全体が複雑な内容をもった副詞として働くこともできる。」と述べている。しかし、「抽象的な意味を表す名詞＋うえ（で）」としても、この場合における「節＋上（で）」としても、それが話し手／語り手の判断と認識を述べる主節全体を修飾する副詞のように働き、全体として、副詞節化していると考えられる。

このような「節＋うえ（で）、……」という文において、1.4 節で述べた名詞が前起する場合と同様に、話し手／語り手は前起する内容で示す側面から後続事態を捉え、その立場が先行することで、判断、認識などのようなものが後続するのである。この意味で、「要素 A＋うえ」は後続要素 B の先行条件として捉えることができると考えられる。また、話し手／語り手の判断、認識に先立つ立場として前面に出ることから、顕在的な先行条件といえると思われる。この場合、「うえ」は前起する内容で示す抽象的な側面と後続する事態の間の相関関係を示す。

「うえ」は空間性を持たず、抽象的な側面を示すほか、前後内容の相乗関係、論理的な関係を示す際にも多く使用される。

(37) 必ず生きるという自信を持たせなくてはいけないのだ。一日ごとに衰弱して行く**上に**治療法がないのだから、食餌と気力で生きてもらうよりほかはない。今が瀬戸際だ。（黒い雨　井伏鱒二）

(38) ホテルの前でタクシーを拾おうとしたが、空車がまったく通りかからない。絶対数が少ない**うえに**、たまにやってくるタクシーも、スーパードームに向かうらしい客を乗せて、どれもふさがっていた。（一瞬の夏　沢木耕太郎）

例（37)、(38）において、「うえ（に)」は累加を表し、後続内容で示す状態・事態の全体がひとまとまりの要素 B となり、「うえに」によって「一日ごとに衰弱して行く」「絶対数が少ない」という事態・状態を示す前起要素と関連付けられる。前述したように、累加という意味について、ある状態・事態にもう 1 つの状態・事態を追加すると捉えれば、前の状態・事態を示す前起要素を後に追加するものの先行条件と捉えることができる。また、ある状態・事態の存在・発生と非存在・未発生をそれぞれ 1 つの側面と捉えれば、この場合における「うえ」も同様に、前起要素の一側面を前面に出し、後続する状態・事態を示す要素と関連付け、その間の相乗関係を示すと捉えることができると考えられる。

（39）この食糧は、通信隊と西部二部隊から預かっていたものである。（中略）僕は会社へ電話して富士田工場長の許可を得た**上で**、会社の倉庫へその夜のうちに運んでもらって預かった。（黒い雨　井伏鱒二）

（40）おそらく康子は賢一郎との間に一定の間隔を保ちながら、しかし或る程度の接触をも保ちながら、様子を見ようとしているに違いない。つまり賢一郎が司法試験に合格するかどうか。それを見定めた**上で**自分の態度をきめようとしているのではないかと思われた。それは女の打算だった。（青春の蹉跌　石川達三）

例（39）と（40）における「うえで」は、例（35）と（36）における抽象的な側面を表すものと異なり、先行条件を示すものである。方（2008）で述べたように、このような場合において、前起する動詞あるいは前起する節末の述語である動詞はタ形である。この場合、前起する節と後続する内容はそれぞれひとまとまりとして要素 A と要素 B に該当し、両要素の間に時間的な前後関係、即ち継起の意味を読み取れることが多い。ただ、それと同時に、方（2004）で述べたように、「～した後で、……」のような継起を表す表現よりも、前後の論理的な関係が読み取れるということである。継起としても、前後内容の論理的な関係としても、「うえ」によって前面化する要素 A は、後続する事態を表す要素 B の先行条件となることが分かる。ある事態に発生と未発生の両方の状態があると考えれば、「うえ」は、要素 A で示す事態の発生または未発生のどちらか一方の側面を前面に出し、後続する要素 B と関連付け、その間の論理的な関係を示す。ただし、この場合において、ある側面

の前面化という意味は潜在的であり、先行条件という意味が優位になっているといえる。

また、例（33）のところで触れた要素間の空間的な関係と時間的な関係という視点からみれば、この場合における要素 A と要素 B の間の空間性こそなくなっているが、要素 A で示す前起事態がもたらした結果として、その効力が存続しているため、後続する事態と関連する。この視点から、例（33）における要素間の関係には、共通点、繋がりがあると考えられる。

以上、節や文が前起する「うえ」について、空間的な意味を表すもの、非空間的で抽象的な側面を表すもの、非空間的で前後内容の相乗関係、論理的な関係を示すものの 3 つに分けて述べてきた。節や文が前起する場合においても、「うえ」の意味用法に影響を与えるものとして、共起する要素、特に前起要素がある。ただし、この場合における要素は、節や文で示す事態・状態のひとまとまりであることが多い。要素間の関係に空間性があるかどうかによって、「うえ」の意味用法は異なるが、「うえ」の各意味用法には共通点と関連性が見られる。そしてそれは、「ある側面を前面に出す」ことと「先行条件」というものである。

節や文が前起しながら、要素間に空間的な関係があり、「うえ」が空間的な位置方向を表す場合、「うえ」は空間化の手続きとして前起する節で示す事態全体を前面に出し、空間的な位置方向を表し、後続する事物／事態と関連付け、その間の空間的な相対位置関係を示す。また、前面に出されるものは、進行中の動作としても、動作の結果状態としても、後続する事物／事態に先行するものであり、これとの空間的な相対位置関係を述べるための条件とも考えられる。前面化する側面は、後続する事物に対するある程度の「先行条件」と捉えることができ、潜在的なものであると考えられる。

要素間の関係に空間性がなく、「うえ（で）」が「ある側面において」という意味を表し、「節＋上（で）」が全体として抽象的な側面を表す場合、「うえ（で）」によって前面化する側面は、後続する話し手／語り手の判断と認識を述べる立場として働く。この場合、話し手／語り手は前起する内容が示す側面から後続事態を捉え、その立場が先行することで、判断、認識などのようなものが後続するのである。この意味で、「要素 A＋うえ」は後続要素 B の先行条件として捉えることができると考えられる。また、話し手／語り手の判断、

認識に先立つ立場として前面に出ることで、顕在的な先行条件といえると思われる。この場合における「うえ」は、前起する内容で示す抽象的な側面と後続する事態の間の相関関係を示す。

「うえ」が非空間的で前後内容の「累加」という相乗関係を表す場合、「うえ（に）」はある事態・状態の発生・存在または未発生・非存在のどちらか一方の側面を前面に出し、後続する事態・状態と関連付け、その間の相乗関係を示す。累加の前項として、それ自身が先行条件の意味を持ち、優位に立つと考えられる。

「うえ」が非空間的で前後内容の論理的な関係を示す場合、「うえ」によって前面化する要素 A は、後続する事態を表す要素 B の先行条件となり、この意味は優位になっているといえる。また、「ある側面において」という意味は潜在的なものとなる。ある事態に発生と未発生の両方の状態があると考えれば、「うえ」は、要素 A で示す事態の発生または未発生のどちらか一方の側面を前面に出し、後続する要素 B と関連付け、その間の論理的な関係を示す。

以上のことから、節や文が「うえ」に前起する場合においても、名詞が前起する場合と同様、「ある側面を前面に出す」ことと「先行条件」から意味用法の広がりにおける共通点と関連性を見出すことができると考えられる。

### 1.6　各意味機能の広がりにおける関連性と共通点

現代日本語において、「うえ」は多様な表現が前起し、また、「で、に、から、まで、を、へ」などの多様な格助詞と共起し、空間的な位置方向、抽象的な社会や年齢などの属性、話題の側面や範囲などを表すことができる。また、「で」「に」などとひとまとまりになり、累加、条件などの事態間の相乗関係、論理的な関係を表す場合がある。これらの場合における「うえ」は用法によって意味機能が異なるが、各意味機能に関連性と共通点があると考えられる。

空間的な関係を表す「うえ」が意味用法の広がりによって、接続表現のように機能することができるということには、可能性とある程度の必然性があると考えられる。接続表現は前件を受け、後件に引き継ぐような働きを持ち、前件と後件の間の論理的な関係を表す。

「うえ」は内容を補足する要素と共起せず、単独で使用される場合と、共起する要素が 1 つしかなく、「～のうえ」のような形で文中において対象語または主題として使用される場合とがある。しかしこれに加え、「要素 A＋うえ（で／に／から……）＋要素 B＋述語」のように、2 つ（あるいは 2 つ以上）の要素を関連付け、その間の空間的な相対位置関係を示す用法もある。要素、特に前起する要素の種類によって、「うえ」の意味用法は異なるが、要素と要素を関連付け、その間の関係を表すというところに共通点があると考えられる。

要素 A、要素 B と「うえ」との組み合わさり方には、以下のような多様性がある。

①「要素 A＋うえ（で／に／から……）＋要素 B＋述語」のように、要素が揃っている場合。「膝と足の**うえ**に毛布を掛けた」や「机の**うえ**に本とカバンを置いた」で示しているように、要素 A も、要素 B も複数の事物・事態である場合がある。

②要素 A が必要ではない場合。「うえ」は単独で使用される。

③要素 A が必要であるが、省略され、前文または文脈にある場合。

④要素 B がなく、「要素 A のうえ」が対象語または主題になる場合。

⑤要素 B が述語動詞で表す動作、変化、状態の主体であり、前文または文脈にある場合（例えば、例（16））。これと関連するものとして、述語に要素 B ではない別の対象語があり、要素 B は「対象語＋述語」全体で表す動作、変化、状態の主体であるという場合がある（例えば、例（17））。

しかし、このような多様性は「うえ」のすべての用法に見られるのではない。1.4 節で述べたように、具体的な前起要素によって、共起する格助詞の種類の減少、「要素 A＋うえ」と述語動詞との格関係の喪失、「うえ」と各要素との組み合わせ方の種類の減少と制限などの現象が見られる。また、累加、先行条件のような意味を表す場合、「要素 A＋うえ（で／に／ゼロ形式）＋要素 B」のような、ある程度固定している形式として現れる。この場合において、要素 A と要素 B はしばしば節や文のひとまとまりの形で現れ、両方とも必須の部分である。要素 A と要素 B を関連付ける「うえ（で／に／ゼロ形式）」は、前述内容を受けて後続内容に引き継ぎ、接続表現のように機能することで、要素間の接続関係を示す。

「うえ」は要素と要素を関連付け、その間の空間的な相対位置関係、接続関係などを示

すことができる。では、この「関係」として、どのようなあり方があるのだろうか。要素 A と要素 B が揃うことを前提とし、この章の冒頭に挙げた例を再掲しながら、説明する。

（1 再掲）机の**うえ**に本を置いた。

（2 再掲）彼らは私たちが勉強している**うえ**で騒いでいる。

（3 再掲）僕の**うえ**に兄と姉がいる。

（4 再掲）仕事の**うえ**で、大きなミスをした。

（5 再掲）このお店はおいしい**うえに**、やすい。

（6 再掲）すべての条件を承知した**うえで**、契約を結んだ。

例（1）において、「うえ」は「机」と「本」のような 2 つの事物を関連付け、その間の空間的な相対位置関係を表す。これに対し、例（2）における「うえ」は空間的な位置方向を表すものの、関連付けるのは事物ではなく、「私たちが勉強している」と「（彼らは）騒いでいる」の 2 つの事態である。ここにおける「うえ」は空間化の手続きとして、臨場性のある動作・状態を繋げている。

例（3）における「うえ」は空間性がなく、年齢の高低を表し、人物と人物を関連付け、その間にある属性関係を示す。また、空間性がなく、抽象的な意味を表す「うえ」には、例（4）のような前起要素と共にある抽象的な側面を表す場合がある。語や句が前起する場合にも、節や文が前起する場合にも、このような話し手／語り手の判断、認識の立場を示し、抽象的な側面を表す用法があり、「うえ」は抽象的な意味を表す事物、あるいは事態と判断、認識を表す事態を関連付けている。

例（5）、（6）のような場合において、語や句より、節や文が前起するものが多く、しばしば節や文のひとまとまりの形で現れる。「うえ」は 2 つの事態を関連付け、その間の接続関係を示す。

このように、共起する要素の種類と性質によって、「うえ」は事物間、事物と事態との間、あるいは事態間の関係を示すことができ、各「関係」に空間性があるかどうか、接続関係であるかどうかなどによって多様性を持っているが、「うえ」によって関連付けられる要素間の「関係」というものが共通点としてあると考えられる。ただし、例（30）における「過

荷重発艦」のように、抽象的な事物であるか、事態であるか判断しかねるものがあり、事物間の関係か、事態間の関係かという点はあくまで傾向であり、はっきりとした境界線がないと考えられる。

1.4 節と 1.5 節で述べたように、要素と要素を関連付け、その間の関係を示すと共に、「うえ」の意味用法の広がりに「ある側面の前面化」と「先行条件」の意味の競合が見られると考えられる。その傾向についてまとめる。

①優位に立つ「ある空間的な側面の前面化」と潜在的な「先行条件」

「うえ」は前起要素で示す具体的な事物のある側面を前面に出し、後続する要素との空間的な相対位置関係を示す。このとき、先行条件は潜在的な意味となる。節や文が前起しながら空間的な意味を表す場合、「うえ」は空間化の手続きとして働くが、意味的な特徴は同様である。例えば、例（1）と例（2）のようなものがある。

②優位に立つ「ある側面の前面化」と潜在的な「先行条件」

例（3）のように、属性と関わる年齢、社会地位、等級の高低を表す場合、「うえ」は比較の基準という側面を前面に出し、後続する人物・事物と関連付け、その間の属性関係を示す。比較の基準というものは普通比較する対象に先行することで、潜在的な先行条件と見なすことができると考えられる。

③顕在的な「ある側面の前面化」と顕在的な「先行条件」

例（4）のように、ある抽象的な側面を示し、話し手／語り手の判断、評価、認識に先立つ立場として前面に出る場合、「要素 A＋うえ」は後続する内容である判断などを示す条件となり、顕在的な先行条件といえると思われる。節や文が前起し、抽象的な側面を表す場合においても、意味的な特徴は同様である。

④潜在的な「ある側面の前面化」と優位に立つ「先行条件」

「うえ」は非空間的で前後内容の「累加」という相乗関係を表す場合と、非空間的で前後内容の論理的な関係を示す場合において、「うえ」によって前面化する要素 A は、後続する事態を表す要素 B の先行条件となり、この意味が優位になっていると考えられる。ある事態・状態に発生と未発生、または存在と非存在の両方の状況があると考えれば、「うえ」は要素 A で示す事態・状態のどちらか一方の側面を前面に出し、後続

する要素 B と関連付け、両者の接続関係を示す。このように、「ある側面の前面化」という意味は潜在的なものとなる。

上記で述べたように、「うえ」の各意味機能の広がりには関連性と共通点がある。そしてそれは、具体的には、「うえ」が関連付ける要素と要素の間の関係と、「うえ」と共起する要素の種類と性質による「ある側面の前面化」と「先行条件」という意味の競合に見られると考えられる。

このような現象と傾向は空間的な関係を表す表現において、「うえ」のみならず、ほかの表現にも見られる。ただし、表現によって、意味機能の広がりに範囲と程度の差があり、現象と傾向の一部しか現れないことがあると考えられる。例えば、「うえ」と意味的に対になる表現「した」はその一例である。以下、「うえ」と対照するため、現代日本語における「した」の例[19]を一部挙げながら、その意味用法に見られる関連性と共通点を提示する。

例（41）、（42）において、「した」は「ケンポナシ」のような前起要素で示す具体的な事物のある側面を前面に出し、「涼台」のような後続要素との空間的な相対位置関係を示す。「うえ」の場合と同様に、節や文が前起して空間的な意味を表す場合、「した」は空間化の手続きとして働き、前後の事態・状態の間の空間的な相対位置関係を示す。

（41）わしらが爺さんの若い時分、むかしむかしその昔、このケンポナシの**下**に涼台を出して宵涼みをし

---

[19] 「した」も「うえ」と同様に、単独で使用される①のような場合、②と③のような要素 B がなく、「要素 A＋した」が対象語または主題になる場合がある。「うえ」が主な記述対象であるこの章では、対照する表現である「した」について、その要素と要素を関連付ける場合に絞り、述べることにする。

①和倉がどこかに栄転になる日が、全く来ないと思っていたわけではない。**下**からも上からも受けのよい和倉が、このまま札幌にいるとは考えられなかった。上司としては、申し分のない人間と言ってよかった。（塩狩峠　三浦綾子）

②首と、脇の**下**を洗い流し、指のまたの砂を拭きとった。（砂の女　安部公房）

③僕は藤木と二人、見晴らしのよい樹蔭に腰を下していた。（中略）眼の**下**は断崖になって、そこから海が一面にひろがり、平べったい波は亀の子模様をつくって陽にきらきらと光っている。（草の花　福永武彦）

ておったげな。（黒い雨　井伏鱒二）

（42）ふと見ると、泉水の隅でキャラの枝がのし出ている**下**に、一尺あまりの鯉や六寸七寸ぐらいの鮒が腹をふくらまして死んでいる。腐ると臭が他のものや蚊帳に移るので、拾いあげて煉瓦塀の根元に棄てた。（黒い雨　井伏鱒二）

また、「うえ」と同様に、属性と関わる年齢、社会地位、等級の高低を表す場合があり、「した」は比較の基準という側面を前面に出し、後続する人物・事物と関連付け、その間の属性関係を示す。

（43）彼のお父さんは、一流の銀行だか商社だかの偉い方らしいんです。とにかく、彼は長男なの。**下**に弟が二人いるんだけど……（太郎物語　高校編　曾野綾子）

しかし、「うえ」の場合より、「抽象的な関係と人間活動（精神と行為）」を表すものと共起する用例が少ない。例えば、「空襲、銃爆撃、意識、不安、普通、階級」のようなものがあり、例（44）のように、「ある状況において」という意味を表す。この場合において、「度重なる空襲の**下**」のような「した」によって前面化する状況は後続する事態の先行条件と捉えることができると考えられる。なお、「した」の場合、接続表現のように機能するものが見当たらない。方（2008）では、このような現象について、「もと」という表現が抽象的な意味を表し、接続表現のように機能することで、「した」と用法を分担すると提示している。

（44）そそくさと弁当を食べ終えてじっとうずくまりながら、周二はなにがなしの畏怖を覚えた。度重なる空襲の**下**、生命がもっと直截におびやかされている東京の日常にあっては、かつて覚えたことのない畏怖である。（楡家の人びと　北杜夫）

このように、「うえ」と意味的に対になる表現「した」においても、意味用法に広がりがあり、「した」が関連付ける要素と要素の間の関係と、共起する要素の種類・性質と関わる「した」の「ある側面の前面化」と「先行条件」という意味において、各意味機能の間に

関連性と共通点が見られると考えられる。ただし、「うえ」の場合と比べ、現象と傾向の一部しか現れないことが分かる。また、「うえ」と意味的に対になる表現のみならず、同じく空間的な関係を表す表現としての「うち」にも同様な現象が見られる。これについては次章で取り上げる。

## 1.7　まとめ

本章では、現代日本語における「うえ」を取り上げ、空間的な意味を表す場合と、その意味用法が広がり、接続表現のように機能する場合との間にどのような関連性があるか、その関連性を検討する鍵は何であるか、「うえ」の各意味用法と機能との共通点が何であるか、などについて次の 3 つの観点から記述した。

①「うえ」の意味用法に影響する要素

②前起要素のあり方、「うえ」と前起要素を合わせた構成体の意味と機能

③「うえ」によって関連付ける要素間の関係のあり方、各関係の共通点と相違点

現代日本語における「うえ」は幅広く使用され、多様な意味用法を持つ。「うえ」の意味用法はそれと共起する要素、特に前起する要素に強く影響される。そのため本章では、「うえ」の前起要素を大きく語や句、節や文の 2 つに分け、また、『分類語彙表―増補改訂版』の分類を一部援用しながら、「うえ」に前起する名詞を意味的に「自然物と自然現象」「身体と身体部分」「生産物と用具」「人間活動の主体」「抽象的な関係と人間活動（精神と行為）」の 5 つに分け、具体的な事物を表す前の 3 類を合わせて検討した。

空間的な関係を表す表現として、「うえ」の意味用法の広がりに、接続表現のような機能が見られるのには、可能性とある程度の必然性があると考えられ、それは両方とも「関係」を示す表現として機能することである。「うえ」は、「要素 A＋うえ（で／に／から……）＋要素 B＋述語」のように 2 つ（あるいは 2 つ以上）の要素を関連付け、その間の空間的な相対位置関係を示す用法を持つ。これに対し、接続表現は、前件を受けて後件に引き継ぐような働きを有し、前件と後件の間の論理的な関係を表す。要素の種類によって、「うえ」の意味用法は異なるが、要素と要素を関連付け、その間の関係を表すというところに共通点があると考えられる。

また、「うえ」の各意味機能に見られる共通点と関連性とは、「うえ」が関連付ける要素と要素の間の関係以外に、共起する要素の種類・性質と関わる「うえ」の「ある側面の前面化」と「先行条件」という意味を持つことである。「うえ」の意味用法の広がりに 2 つの意味の競合が見られる。

更に、節や文が前起する場合、「うえ」が関連付ける要素と要素は、空間的な関係と時間的な関係にも関わり、要素それぞれの性質によって、要素間の時空関係が異なると考えられることを述べた。要素間の空間的な関係と時間的な関係は共起する動詞の性質と関わり、また、名詞が前起する場合においても、空間的な関係以外に、潜在する時間的な関係があると考えられる。ただし、これに関する詳しい検討は今後の課題とする。

## 第 2 章　自立語「うち」の意味用法と機能

### 2.1　はじめに

第 1 章で述べた「うえ」と同様に空間的な関係を表す表現として、「うち」がある。「うち」においても、「うえ」と同様、その意味用法に広がりがあり、「うち」が関連付ける要素と要素の間の関係と、共起する要素の種類、性質と関わる「うち」の具体的な意味から、各意味機能の間にある関連性と共通点が見られると考えられるが、「うえ」の場合と異なる性質がある。以下で取り上げ、検討する。

現代日本語において、「うち」には次のような用法がある。

(1) 芝居じみた混乱のうちに、基一郎は玄関の**内**に運ばれた。（楡家の人びと　北杜夫）

(2) シゲ子の話の**うち**に、物理学的にも常識から云っても、どう考えても理解できないことがある。（黒い雨　井伏鱒二）

(3) 五年間の**うち**に、私は何度か転居していた。（一瞬の夏　沢木耕太郎）

(4)「藤原の父ちゃん、一人で演説ぶっちゃってさ、二時間の**うち**一時間四十八分は一人で喋ってたよ。（後略）」（太郎物語高校編　曾野綾子）

(5) 外国兵の**うち**、きわめて若い雀斑のある男が、銃を腰にかまえて桐の梢を狙った。（不意の唖　大江健三郎）

(6) アイデアを求めている**うち**、しだいに案がまとまってきた。（人民は弱し官吏は強し　星新一）

(7)（前略）龍子は本当にその家を出て行ったのである。子供たちが何も知らない**うち**に、その三人の子、峻一と藍子と周二とをあとに残して。（楡家の人びと　北杜夫）

上記の例で示したように、「うち」は多様な表現が前起し、様々なものを表す。まず、語や句が前起し、例（1）のように空間的な範囲と方向、例（2）のように抽象的な範囲、例（3）のように時間的な幅を示す範囲、例（4）、（5）のように部分が所属する全体の範囲を表すことができる。また、例（6）、（7）のように、節や文が前起し、時間的に幅を持つ状態や事態が存続する範囲を表すことができる。これらの場合における「うち」は用法によって意味機能が異なるが、共通している部分があると考えられる。

このような空間的な関係を表す「うち」についての研究は、「うえ」の場合と同様に、そ

れが機能語化した後の接続表現としての意味用法、あるいはほかの類義表現との区別に注目するものが多い。しかし、具体的な用法ごとに、いかに実質的な意味を反映させ、接続の表現として用いることができるのか、繋がりを持つと考えられるそれらの用法間の関連性と共通点を考える視点も大切である。

本章では現代日本語における「うち」を取り上げ、空間的な意味を表す場合、その意味用法が広がり、時間的な範囲などを表す場合、接続表現のように機能する場合の間にどのような関連性があるか、「うち」の各意味用法と機能との共通点は何であるか、などについて記述し、考察する。

以下、先行研究の紹介は 2.2 節で、「うち」の意味用法に影響する要素と「うち」の特質については 2.3 節、語や句が前起する「うち」の意味用法と機能については 2.4 節、節や文が前起する「うち」の意味用法と機能については 2.5 節、各意味機能の広がりにおける関連性と共通点については 2.6 節で詳述する。そして、2.7 節で記述した内容をまとめる。

## 2.2　先行研究

「うち」に関する先行研究としては、森田（1989）、大島（1999）、砂川（2000）、梁（2000）方（2008）、松中（2008）などが挙げられる。全体として、「うち」の場合は「うえ」と同様に、その機能語化した用法に注目する先行研究が多く、特に、接続表現として使用される「うちで／に」の詳細分類と説明が多く見られる。空間的な意味を表す意味用法と機能的用法の間の連続性について、認知言語学の立場から考察した研究もある。以下、そのうちの一部を紹介する。

森田（1989:180）では、「ある範囲・領域において、その範囲・領域を越えない部分。本来、空間的な範囲について用いられたが、時間や物・数量・事柄などについても「その範囲で」の意味で「内」が用いられるようになった。」と述べ、地理的な場面を表す場合、時間的な範囲を表す場合、事物を並べ立て（または一つ挙げ）その例示した範囲を超えないことを表す場合に分け、「うち」の意味用法について説明した。しかし、各意味用法における「範囲」のあり方と関連性、どのように空間的な範囲という意味を反映させ、接続表現

として用いることができるのか、などについてまだ検討の余地があると考えられる。

砂川（2000）では空間概念を表す動詞と名詞が、実質的な意味を表す自立語から時間概念を表す機能語的な付属語へと変化するときの意味の転写について考察し、名詞においては空間の相対的位置や空間の形状に関する意味が、さまざまな時間概念として転写されることを説明した。メタファーによる転写は有効な解釈であるといえるが、本稿では「うち」によって関連付ける要素間の関係のあり方という視点から記述し、「範囲」と関わる各意味用法の関連性に注目したい。

梁（2000）は「うち」の基本的な意味を、限定された空間の内部、物体の裏面、中心から相対的に近いところにあるとし、抽象的な領域へ転移される意味を限定される時間の内部、限定される集合の内部、隠密なこと、自分の領域などに分け、隠喩的転用の立場からその拡張方向について説明した。しかし、「うち」の意味用法に影響するもの、拡張の方向という表層的な方向以外の、「うち」の各意味用法間の共通点に関する検討は足りないと考えられる。

方（2008）は名詞と述語の組み合わせに注目し、名詞に接続する「うち」の意味機能を記述し、空間、状況、時間、範囲の 4 つに分け、明治期の意味用法と対照し、説明した。しかし、考察対象が名詞に限定されており、「うち」の意味用法の全体像を記述できているとは言えない。名詞のみならず、節や文に接続する「うち」の意味機能も取り上げ、検討する必要があると考えられる。

空間的な関係を表す「うち」について、具体的な用法ごとに、いかに基本的な意味を反映させ、接続の表現として用いることができるのか、繋がりを持つと考えられるそれらの意味用法と機能に共通している点は何であるのか、などについて、検討する余地があると考えられる。

「うち」の記述について、序論で述べた内容に基づき、以下の 3 点に注目し、各意味用法と機能、特にその間の関連性と共通点について検討する。

①「うち」の意味用法に影響する要素

②前起要素のあり方と「うち」の意味機能からみる「範囲」のあり方

③「うち」によって関連付ける要素間の関係のあり方、各関係の共通点と相違点

## 2.3　「うち」の意味用法に影響する要素

現代日本語における「うち」には多様な用法があり、例（8）、（9）のように、心理上の内部の範囲といった意味を表し、単独で、あるいは「うちの～」のような形で使用される場合、例（10）のように前起要素と合わせた構成体が主題・主語である場合[20]、また、2.1で挙げた例のように様々な要素と共起する場合がある。

（8）「**うち**のおふくろは、蒲団、縫えんのだ」太郎は言った。（太郎物語大学編　曾野綾子）

（9）「私立の精神病院といっても、**うち**だけじゃありませんからね」と、徹吉は朴訥な笑顔で言い、なにか冗談を言おうとしたが、それがうまく喉からでてこなかった。（楡家の人びと　北杜夫）

（10）（前略）「体もフトコロも手の**内**もさむいやあ」小耳の川ちゃんのぼやきポーカーが早くもはじまろうとしていた。（新橋烏森口青春篇　椎名誠）

上記のような「うち」の用法があるが、本章では「うち」の各意味用法の間の関連性を検討し、「うち」によって関連付ける要素のあり方と要素間の関係に注目するため、「うち」と関わる要素が 1 つしかない場合は、関連性の検討対象から除外する。以下のような形式[21]で使用される「うち」を中心に論じる。

要素 A＋**うち**＋要素 B＋述語

「うち」によって 2 つの要素[22]が関連付けられる。例えば、例（1）では、「基一郎」と「玄関」は「うち」と共起し、「うち」によって関連付けられる 2 要素である。具体的な動作を表す述語「運ばれる」と共に、「基一郎」と「玄関」の間の空間的、かつ具体的な位置関係が明らかになる。これは、上記の形式通りの典型的な用法である。また、「うち」によって関連付けられるのは具体的な場所や事物を表す名詞のほか、例（2）で示している「話」

---

[20] 「手の内」における「内」は「手」の空間的な相対位置のほか、手の一部を表し、実質的な意味を持つと捉えることができると考えられる。

[21] 「うち」と共起する要素の性質と「うち」が関連付ける要素間の関係によって、述語を含む節全体がひとまとまりの要素になる場合がある。

[22] 要素 A と要素 B はそれぞれ 1 つとは限らず、複数の場合もある。

と「理解できないこと」のような抽象的なものもある。また、例（3）のように、共起する要素が語や節、文の組み合わせである場合がある。更に、例（6）のように、「うち」は「アイデアを求めている」と「しだいに案がまとまってきた」という 2 つの節や文を関連付け、事態・状態間の関係を示す場合がある。

（1 再掲）芝居じみた混乱のうちに、基一郎は玄関の**内**に運ばれた。

（2 再掲）シゲ子の話の**うち**に、物理学的にも常識から云っても、どう考えても理解できないことがある。

（3 再掲）五年間の**うち**に、私は何度か転居していた。

（6 再掲）アイデアを求めている**うち**、しだいに案がまとまってきた。

このように、2.1 節で挙げている例において、「うち」によって関連付ける「基一郎」と「玄関」、「話」と「理解できないこと」、「五年間」と「私は何度か転居していた」、「アイデアを求めている」と「しだいに案がまとまってきた」のように、「うち」によって関連付けられる要素 A と要素 B は、事物間、事物と事態の間、あるいは事態・状態間の空間的、抽象的、時間的な関係であり得る。ただし、要素 A、要素 B と述語はいつも揃って現れるのではなく、場合によって、述語と対象語などが共にある事態・状態を表し、全体で 1 つの要素に該当することがある。

上述したことから、「うえ」と同様に、共起する要素の種類と性質によって、「うち」の具体的な意味と用法が異なり、前起要素による分類が必要であるように思えるが、「うち」においては、特別な状況がある。

（8）食後、私は良ちゃんと連立って、治療棟へ出向いた。（中略）二台の手術台の**うち**、成形手術に充てる方の分はすっかり終ったらしかった。何という時間の長さだろう、と私は思った。（草の花　福永武彦）

例（8）で示しているように、「うち」は「手術台」のような具体的な事物を表す名詞が前起し、「手術台」と「成形手術に充てる方（の手術台）」の両要素を関連付けるが、その間の空間的な相対位置関係を示しておらず、むしろ空間性と関わらない所属関係を示して

いるといえる。この場合、要素 A と要素 B とは、ある程度同質のものであり、種類のうえで、要素 B は要素 A の下位にあるものである。ここにおける「うち」は共起する要素の種類に関わらず、部分が所属する全体の範囲を表す。そのため、「うち」の場合、直接「うえ」の場合のように『分類語彙表—増補改訂版』の分類を援用できず、「範囲」の性質による分類が必要である。

次の 2 つのものを比べてみよう。

・「外にいる彼をのれんの**うち**に引っ張ってきた」

・「外に掛けてあるのれんの**うち**、椿の模様が入っているのれんが一番きれいと思う」

「うち」に前起するものは同じく「のれん」であるが、前者が空間的な位置方向、空間的な内部である範囲を表すのに対し、後者は部分が所属する全体の範囲を表す。そのため、「うち」が関連付ける要素間の関係は、前者は空間的な相対位置関係であり、後者は所属関係である。本稿はこのような用法を分け、前者における「うち」の用法を「範囲の設定」、後者における「うち」の用法を「範囲の限定」と呼ぶことにする。異なる「範囲」の性質が見られる用法として、両者を分ける必要があることを主張したい。後述する内容とも関わるが、「範囲の設定」の場合における「要素 A＋うち」は述語の補語のようなものであり、述語で表す事態の時間的な先行条件として、あるいは場所などを表す先行条件として前面に出る。これに対し、「範囲の限定」の場合は、後続内容で示す事態全体と関わる範囲ではなく、要素 A の下位のものに該当する後続内容の一部（主体、客体、あるいは時間など）を規定する範囲である。

以下、「うち」の共起要素、特に前起要素を大きく語や句の場合と、節や文の場合の 2 部分に分け、「範囲の設定」と「範囲の限定」という用法の区別に注意しながら、2 つの節で論じる。

### 2.4　語や句が前起する「うち」の意味用法と機能

2.1 節のところで述べたように、「うち」は、語や句が前起する場合、空間的な範囲と方向、抽象的な範囲、時間的な幅を示す範囲、部分が所属する全体の範囲を表すことができ

る。以下、例を挙げながら、「うち」に前起する要素の種類ごとに、具体的な事物を表す名詞、時間を示す表現、「人間活動の主体」を表す名詞、抽象的な意味を表すものの 4 つに分けて述べる[23]。

「うち」は、具体的な事物を表すものが前起する場合、例（1)、(9）のように、空間的な位置方向、あるいは空間的な内部範囲を表すことができる。「うち」は共起する表現によって、前起要素で表す事物の位置、方向、範囲などのような各側面の内の一側面を前面に出し、具体的に表すと共に、関連付ける要素間の空間的な相対位置関係を示す。

（1 再掲）芝居じみた混乱のうちに、基一郎は玄関の**内**に運ばれた。（楡家の人びと　北杜夫）

(9）金閣は私の手の**うち**に収まる小さな精巧な細工物のように思われる時があり、又、天空へどこまでも聳えてゆく巨大な怪物的な伽藍だと思われる時があった。美とは小さくも大きくもなく、適度なものだという考えが、少年の私にはなかった。（金閣寺　三島由紀夫）

また、2.3 節で述べたように、具体的な事物が前起しても、空間的な位置方向を表すとは限らない（むしろ、空間的な位置方向を表すものは少ないといえる）ため、「うえ」の場合のように、前起要素のみの分類による検討では不十分である。より有効な方法として、2.3 節で提示した要素間の「関係」に基づく「範囲」の分類、即ち「範囲の設定」と「範囲の限定」という用法の区別というものがある。

例（8）のほか、例（10）のようなものがあり、具体的な事物が前起しながらも、実際、空間性と関わらず、部分が所属する全体の範囲を表す。このような場合において、「うち」は前起要素で示す「ある範囲」を前面に出し、後続する要素と関連付け、その間の所属関係を示す。この場合はしばしば数量を示す表現と共起する。

---

[23] 「うち」は、前起要素が具体的な事物であるものが少なく、また、関連付ける要素間の「範囲」と関わる関係に注目するため、「うえ」のような詳しい分類にしなかったのである。ここにおける「具体的な事物を表す名詞」は 1.4.1 節における「うえ」の前起要素の分類に、「人間活動の主体」を表す名詞の場合は 1.4.2 節、「抽象的な意味を表すもの」は 1.4.3 節における「うえ」の前起要素の分類に該当する。なお、「うち」は時間的な範囲を表す場合に多く用いられるため、「時間を示す表現」が前起する場合は別立てとした。

（8 再掲）食後、私は良ちゃんと連立って、治療棟へ出向いた。（中略）二台の手術台の**うち**、成形手術に充てる方の分はすっかり終ったらしかった。何という時間の長さだろう、と私は思った。（草の花　福永武彦）

（10）自分の絵の稚拙さを指して下手も絵の**うち**などと称している老大家がいることも七瀬は知っているが、その作品にはやはり風格があり技法の完成がある。（エディプスの恋人　筒井康隆）

「うち」は上記のような具体的な事物を表すものが前起する場合のほか、時間を示す表現が前起する場合に多く使用される。次の例で示すように、「うち」に「五年間」「わずかな時間」「一生」のような時間表現が前起し、時間的な幅を示す範囲を表す[24]。

（3 再掲）五年間の**うち**に、私は何度か転居していた。（一瞬の夏　沢木耕太郎）

（11）峻一はここ二年ほど軍の飛行基地参りから遠ざかっている。もちろん初めて目にする機種であった。その見慣れぬ低翼単葉の戦闘機の深いカウリングを、美しい曲線をなした翼のフィレットを、敏捷な淡水魚を思わせる胴体を、彼はわずかな時間の**うち**にしっかりと記憶に留めた。（楡家の人びと　北杜夫）

（12）私の二十年の短い経験から申しあげて、それこそとるにたらない経験かも知れませんが、人間、一生の**うち**、なにかの機会に、転身することが幾度もあるような気がいたします。（冬の旅　立原正秋）

また、時間を示す表現が前起しながら、実際には、後続事態と関わる時間的な幅を示す範囲ではなく、部分が所属する全体の範囲を表す場合がある。「うち」は前起要素で示すある期間の範囲を前面に出し、その期間の具体的な一部分を示す後続要素と関連付け、その間の所属関係を示す。

（13）父の故郷は、光りのおびただしい土地であった。しかし一年の**うち**、十一月十二月のころには、たとえ雲一つないように見える快晴の日にも、一日に四五へんも時雨が渡った。私の変りやすい心情は、この土地で養われたものではないかと思われる。（金閣寺　三島由紀夫）

---

[24] 次のような形容詞が前起する場合があり、時間的な幅を示す範囲を表す。

・「それじゃ、僕は、ここで……」行助がたちどまった。門のところだった。「ちかい**うち**にまた訪ねてきていいかね」（中略）そして父子は門を境にして別れた。（冬の旅　立原正秋）

（14）「藤原の父ちゃん、一人で演説ぶっちゃってさ、二時間の**うち**一時間四十八分は一人で喋ってたよ。（後略）」（太郎物語高校編　曾野綾子）

このほか、「うち」の場合にも「人間活動の主体」のような意味を表す名詞が前起する場合があった。また、「うえ」の場合における属性と関わる年齢、社会地位、等級の高低を表すものは見当たらず、以下のような、抽象的な範囲、時間的な幅を示す範囲、部分が所属する全体の範囲を表すものがある。

（15）また澄江は、理一が、行助を実の子同様に見てくれたことに感謝していた。ここのところで、母子の**うち**に暗黙の理解が成立していた。こと修一郎に関しては、彼がどのようなわがままを通そうと、母子を侮辱しようと、これを理一に告げてはならない。（冬の旅　立原正秋）

例（15）において、「うち（に）」は「母子」と「暗黙の理解」を関連付け、抽象的な範囲という意味を表し、その間の相関関係を示す。

（16）「ところが、この人は、気の毒なことに、子供が皆死んじゃうんですね。六人、いや七人……やっぱり六人かな、子供ができるんですけど、皆子供の**うち**に死んでしまって、遂には奥さんまで死んじまうんです。それで彼はその淋しさを紛らわすために、釣りに熱中するんです。（後略）」山口百三は言い訳するように言った。（太郎物語高校編　曾野綾子）

例（16）は「子供」のような人名詞が前起しながらも、「子供である期間」という意味を表し、「うち」は時間的な幅を示す範囲を表す。

（5 再掲）外国兵の**うち**、きわめて若い雀斑のある男が、銃を腰にかまえて桐の梢を狙った。（不意の唖　大江健三郎）

（17）三好君も来た。伊藤君も来た。最後列の方に並んでいたものばかりである。みんな口もきけそうにない。前列にいた人たちの**うち**には、家の下敷になって出られない者もたくさんいるに違いない。いかんせん負傷した体で、しかも素手で、すでに火を噴いている倒潰家屋の下から救助することは

不可能である。（黒い雨　井伏鱒二）

（18）伊助はシャツのポケットから煙草の箱をとりだし、利兵衛に渡した。「ちくしょうッ、こんな真白な一本の煙草は久しぶりだ」利兵衛が煙草を一本ぬくと、伊助がライターをつけてやった。一方、乗車券売場に歩いて行った六人の少年の**うち**、安をのこして五人の少年が、それぞれ自宅までの乗車券を買い、駅に入って行った。（冬の旅　立原正秋）

（19）「彼女は、今、出家しようと思って夢中だ」「まさか。息子三人の**うち**長男が未決、次男も三男も左翼運動に入るかも知れない、って時にか？」「（中略）自分は女房失格・母親失格だ、というんだ。だから、別れて尼寺へ行く、と言うんだ」（太郎物語大学編　曾野綾子）

また、上記の 4 例で示したように、「うち」に「人間活動の主体」のような意味を表す名詞が前起する場合において、このようなある部分が所属する全体の範囲を表すものが多く、「うち」が関連付けるのは人数のような範囲と関わる要素であるといえる。そのため、例（19）における「息子三人のうち」のように、数量詞が名詞に付いて「うち」に前起するものも見られる。

更に、抽象的な意味を表す名詞が前起する場合、「うち」はしばしば抽象的な範囲と、時間的な幅を示す範囲という意味を表し、例えば次のようなものがある。

（2 再掲）シゲ子の話の**うち**に、物理学的にも常識から云っても、どう考えても理解できないことがある。（黒い雨　井伏鱒二）

（20）何かを思い出しかかっている心持なのだが、分らない。分らぬまま、部屋を出た。（中略）俯いた眼に、狭い庭の黒い土と、縁側の下に置かれてある庭下駄が映った。ほとんど無意識の**うち**に、彼の足はその下駄に載り、庭に歩み出た。（砂の上の植物群　吉行淳之介）

以上、語や句が前起する場合の「うち」について、前起する要素の種類ごとに、具体的な事物を表す名詞、時間を示す表現、「人間活動の主体」を表す名詞、抽象的な意味を表すものに分けて述べた。「うち」は、前起要素で示すある空間的な側面・範囲、時間的な範囲、抽象的な範囲あるいは部分が所属する全体の範囲を前面に出し、後続要素と関連付け、そ

の間の空間的な相対位置関係、相関関係あるいは所属関係を示す。上述したように、前起要素の種類と関わらず、「うち」が部分の所属する全体の範囲を表すものも見られる。この場合における「要素 A＋うち」は後続内容で示す事態全体と関わる範囲ではなく、要素 A の下位のものに該当する後続内容の一部（主体、客体、あるいは時間など）を規定する範囲であり、これはつまり 2.3 節で提示した「範囲の限定」である。これに対し、「うち」が空間的な範囲と方向、抽象的な範囲、時間的な幅を示す範囲を表す場合、「要素 A＋うち」は述語の補語のようなものになり、後続する事物との空間的な相対関係に関わる場所などのような条件として、あるいは述語で表す事態の時間的な先行条件として前面に出る。これが 2.3 節で提示した「範囲の設定」である。

## 2.5　節や文が前起する「うち」の意味用法と機能

2.1 節で述べたように、節や文が前起する場合、「うち」は前起要素と共に、時間的に幅を持つ状態や事態が存続する範囲を表す。この場合について、これまでの研究では「うち（に／ゼロ形式）」は接続表現として使用される意味用法、他形式との対照などに注目されてきた。本節では、「うち」が前起要素と共に表す「範囲」のあり方と「うち」によって関連付ける要素間の関係のあり方に注目し、検討する。

この場合において、次のような、形容詞で終わるものが前起する例が多く見られる。それは、形容詞が時間的に幅を持つ状態を表すことが多いためであると考えられる。「要素 A＋うち（に）」は後続する事態に先行し、その時間的な条件として前面に出て、後続する事態と相関関係をなす。

（21）去年、柘榴は塀のこちら側にのぞいている枝に三つか四つか実をつけた。それが青い**うち**にみんな落ちたので、子供は今年こそ無事に育つように声援を送ったのだ。（黒い雨　井伏鱒二）

（22）彼の表情が、その二つの花言葉を読み上げると、曖昧になった。「でも、機嫌がよくなってよかったわ……」「……」「機嫌のいい**うち**に、床屋さんにいらしたら。髪が伸びて、病人みたいだわ」（砂の上の植物群　吉行淳之介）

また、次の例で示すように、「うち」は多様な節や文、特に進行中の動作を表すものと共

起することができる。これもまた、上記の形容詞の場合と同様、「範囲」を表す「うち」に前起する要素として、時間的に幅を持つ動作や状態を表すものが必要となるためであると説明したい。そのため、例（24）、（25）のように、進行中の動作ではないが、時間的に幅を持つ動作である「約半キロばかり歩く」と、反復性を持つ動作である「眼薬をさしては、手拭の端でおさえ、何度かくりかえす」のようなものが前起することが可能となる。

（6 再掲）アイデアを求めている**うち**、しだいに案がまとまってきた。（人民は弱し官吏は強し　星新一）

（7 再掲）（前略）龍子は本当にその家を出て行ったのである。子供たちが何も知らない**うち**に、その三人の子、峻一と藍子と周二とをあとに残して。（楡家の人びと　北杜夫）

（23）「内藤、次の試合は決まったのかなあ」「まだのようなことを言ってましたけど……」「いつ？」「昨日です」「それなら、まだなんだ。早く次をやってあげなければ可哀そうなんだけどな」「そうですね」私がそう言い終らない**うち**に、金子は事務室から出てきてソファに坐った。（一瞬の夏　沢木耕太郎）

（24）ずっと遠くまで見通せたかと思うと、たちまち僕らも煙に包まれて、目も口もタオルで塞がなくてはいけなくなる。約半キロばかり歩く**うち**に、タオルの湿りがすっかり無くなった。（黒い雨　井伏鱒二）

（25）眼薬をさしては、手拭の端でおさえ、何度かくりかえす**うち**に、やっと普通に眼が開けていられるようになる。（砂の女　安部公房）

「うち」は時間的に幅を持つ動作や状態を前面に出し、後続する事態に時間的な先行条件として設定し、後続する事態と関連付け、その間の相関関係を示す。後続事態は、前述事態が設定している時間的な範囲内で発生する。ただし、その時間内で発生した後続事態は例（23）のように一回でその動作が終わるものもあれば、例（25）のように状態の持続性を持つものもある。

このように、「うち」に後続する動作は時間的に幅を持つ動作・状態でなくてもよいが、前起する要素は、存在している状態や持続している動作、時間的に幅を持つ動作及び一定の時間内で反復性を持つ動作を表すものであるという傾向が見られる。この点については、動詞の分類にも関わり、より詳しく検討する余地があると考えられるため、今後の課題と

する。

## 2.6　各意味機能の広がりにおける関連性と共通点

現代日本語において、「うち」は多様な用法を持つ。語や句が前起し、空間的な範囲と方向、抽象的な範囲、時間的な幅を示す範囲、あるいは部分が所属する全体の範囲を表すことができる。また、節や文が前起し、時間的に幅を持つ状態や事態が存続する範囲を表すことができる。これらの場合における「うち」は用法によって意味機能が異なるが、各意味機能に関連性、共通点があると考えられる。

第 1 章で述べた「うえ」の場合と同様に、空間的な関係を表す「うち」は意味用法が広がり、接続表現のように機能することができるということにも、可能性とある程度の必然性があると考えられる。なぜなら、両方とも「関係」を示す表現として機能するためである。「うち」には「要素 A＋うち（に／から……）＋要素 B＋述語」のように、2 つ（あるいは 2 つ以上）の要素を関連付け、その間の空間的な相対位置関係を示す用法がある。これに対し、接続表現は前件を受け、後件に引き継ぐような働きを持っており、前件と後件の間の論理的な関係を表す。このように、要素の種類によって「うち」の意味用法は異なるが、要素と要素を関連付け、その間の関係を表すという点において共通していると考えられる。

「うち」の各意味機能の関連性は「うち」が前起要素と共に表す「範囲」のあり方と、「うち」によって関連付ける要素間の関係のあり方から見られる。「うち」によって関連付けられる要素 A と要素 B が揃うことを前提とし、本章の冒頭に挙げた例を再掲し、説明する。

（1 再掲）芝居じみた混乱のうちに、基一郎は玄関の**内**に運ばれた。

（2 再掲）シゲ子の話の**うち**に、物理学的にも常識から云っても、どう考えても理解できないことがある。

（3 再掲）五年間の**うち**に、私は何度か転居していた。

（4 再掲）「藤原の父ちゃん、一人で演説ぶっちゃってさ、二時間の**うち**一時間四十八分は一人で喋ってたよ。（後略）」

（5 再掲）外国兵の**うち**、きわめて若い雀斑のある男が、銃を腰にかまえて桐の梢を狙った。

（6 再掲）アイデアを求めている**うち**、しだいに案がまとまってきた。

（7 再掲）（前略）龍子は本当にその家を出て行ったのである。子供たちが何も知らない**うち**に、その三人の子、峻一と藍子と周二とをあとに残して。

例（1）のように、「うち」は具体的な事物を表すものを前起し、空間的な位置方向、あるいは空間的な内部範囲を表すことができる。「うち」は共起する表現によって、前起要素で表す事物の位置、方向、範囲などのような各側面の内の一側面を前面に出し、具体的に表すと共に、関連付ける要素間の空間的な相対位置関係を示す。

例（2）のような抽象的な意味を表す名詞が前起する場合、「うち」は「シゲ子の話」と「理解できないこと」を関連付け、抽象的な範囲という意味を表し、その間の相関関係を示す。

例（3）のように、「うち」は「五年間」などのような時間表現が前起する場合、時間的な幅を示す範囲を表し、「私は何度か転居していた」のような後続事態と関連付け、その間の時間的に相関する関係を示す。

上記のような語や句が前起するもののみならず、例（6）、（7）のような節や文が前起する場合もあり、このとき「うち」は前起要素と共に、時間的に幅を持つ状態や事態が存続する範囲を表し、後続する事態に先行する時間的な条件として設定し、後続事態と関連付け、その間の相関関係を示す。後続事態は前述事態が設定している時間的な範囲内で発生するものであり、時間的に幅を持つ動作や状態でなくてもいいが、この場合、「範囲」を示す「うち」の前期要素は、存在している状態や持続している動作、時間的に幅を持つ動作及び一定の時間内で反復性を持つ動作を表すものであるという傾向が見られる。

語や句が前起するもののほか、節や文が「うち」に前起し、空間性とも時間性とも関わらず、部分が所属する全体の範囲を表す場合がある。例えば、例（4）、（5）のようなものである。「うち」は前起要素で示すある期間、あるいはある集合で、ある範囲を前面に出し、その期間または集合の具体的な一部分を示す後続要素と関連付け、その間の所属関係を示す。この場合は数量を示す表現と共起することが多い。この場合における「範囲」は上記のものとは異なる性質を持つと考えられることから、両者を分ける必要があると主張し、「範囲の設定」と「範囲の限定」に分けた。

例（1）～（3)、例（6)、(7）において、「うち」が空間的な範囲と方向、抽象的な範囲、時間的な幅を示す範囲を表す場合、「要素 A＋うち」は述語の補語のようなものであり、後続する事物との空間的な相対関係に関わる場所などのような条件として、あるいは述語で表す事態の時間的な先行条件として前面に出る。これが本稿で提示した「範囲の設定」である。

例（4)、(5）において、前起要素の種類と関わらず、「うち」が部分の所属する全体の範囲を表し、「要素 A＋うち」は、後続内容で示す事態全体と関わる範囲ではなく、要素 A の下位のものに該当する後続内容の一部（主体、客体、あるいは時間など）を規定する範囲である。これが本稿で提示した「範囲の限定」である。

このように、「うち」の各意味機能の広がりには関連性と共通点がある。そしてこれらは、具体的には、「うち」が関連付ける要素と要素の間の関係と、「うち」が前起要素と共に表す「範囲」のあり方に見られると考えられる。

このような現象と傾向は空間的な関係を表す表現において、「うち」や「うえ」のみならず、ほかの表現にも見られる。「うち」と意味的に対となる表現「そと」はその一例であり、以下のように、「外」が関連付ける「窓」と「白梅」との空間的な相対位置関係、「そと」が関連付ける「理解」と「この種の感情」との抽象的な位置関係のような関係を示すことができる。このことから、用法に広がりが見られ、要素と要素を関連付ける「関係」に共通点があると考えられる。

(26)「ああ、窓の**外**に、白梅があって、花が咲いてる」犬みたいな鼻をした奴だ、と太郎は思いながら窓を閉めた。（太郎物語大学編　曾野綾子）

(27) 敵と見た者は嫉妬して山師と呼び、混乱のもとと見た者は、すぐ行きづまるだろうとうわさして自分をなぐさめた。（中略）アメリカ育ちの彼にとって、この種の感情は理解の**そと**にあったのだ。フェアな競争でおくれをとったら、相手を追い抜く新しい道を開拓し、そのつみ重ねで産業が進歩する。（人民は弱し官吏は強し　星新一）

ただし、第 1 章の最後の部分で述べたように、表現によって、意味機能の広がりに範囲と程度の差があり、現象と傾向の一部しか現れないことがあると考えられる。ほかの表現

形式との対照に関しては、今後の課題とし、引き続き考察を行う。

## 2.7　まとめ

本章では、現代日本語における空間的な関係を表す表現である「うち」を取り上げ、空間的な意味を表す場合と、その意味用法が広がり、時間的な範囲などを表す場合、接続表現のように機能する場合との間にどのような関連性があるか、「うち」の各意味用法と機能との共通点が何であるか、などについて次の 3 点に着目し、検討した。

①「うち」の意味用法に影響する要素

②前起要素のあり方と「うち」の意味機能からみる「範囲」のあり方

③「うち」によって関連付ける要素間の関係のあり方、各関係の共通点と相違点

「うち」の意味は共起する要素に影響される。要素 A と要素 B が揃っていることを前提に、「うち」は前起要素で示すある空間的な側面・範囲、時間的な範囲、抽象的な範囲あるいは部分が所属する全体の範囲を前面に出し、後続要素と関連付け、その間の空間的な相対位置関係、相関関係あるいは所属関係を示す。その各意味機能の関連性は、「うち」が前起要素と共に表す「範囲」のあり方と「うち」によって関連付ける要素間の関係のあり方に見られる。「要素 A＋うち」が表す「範囲」は用法によって異なる性質を持つと考えられることから、両者を分ける必要があることを主張し、「範囲の設定」と「範囲の限定」に分け、説明した。節や文が前起する場合、動詞の分類と関わる前起要素のあり方について、検討する余地があると考えられ、また、意味的に「うち」と対になる「そと」との対照考察も詳細に行う必要がある。これらは今後の課題とする。

## 第 3 章　語構成要素「上（じょう）」の意味用法と語「―上」の機能

空間的な関係を表す表現は「うえ」「うち」のような自立語のみならず、「上（じょう）」のような語構成要素も含むと考えられる。本章では、語構成要素「上（じょう）」、とこれを後要素とする語「―上」を取り上げ、検討する。

### 3.1　はじめに

現代日本語において、語構成要素「上（じょう）」を後要素とする語「―上」には次のような用法がある。

(1) a ふたりは新校舎の**屋上**で、一緒に昼食を取っていた。（コスプレ探偵かおり　島津出水　オークス）[25]

b クニヤは怒ってはいたが、その怒りを静めようと一掴みの砂を**地上**にさらさらと落とした。（オーストラリア癒しの大陸をゆく　園田豪　郁朋社）

(2) a 僕は乗降台からプラットフォームと反対側の**線路上**に押し飛ばされ、誰か女の人らしい柔かい体の上に被さった。（黒い雨　井伏鱒二）

b 「へたくそー、実家へ帰れー」一瞬、**舞台上**で演者の手が止まったように見えた。（おぼけさま　西村美智代　東京新聞出版局）

(3) a 特色ある学校づくりは**教育上**大きな効果がある。（生活科授業研究　川上昭吾　教育出版）

b 座席の位置の**関係上**、城吉が先に車を降りる。（楡家の人びと　北杜夫）

c 従来は、上告を比較的無制限に許していて、だからこそ三審制だったのだが、現在では、かつて「まだ最高裁がある」といわれたような状況はすでになくなってしまっている。**事実上**、日本は

[25] （作品名　作者　出版社／出版機構）のように出典を記しているものは「現代日本語書き言葉均衡コーパス（中納言）」で収集した用例であり、（作品名　作者）のように記しているものは本稿の主な用例出典である「新潮文庫の 100 冊」から引いたものである。ただし、用例の同質性を考慮し、前者は検索範囲を「出版・書籍」「図書館・書籍」「特定目的・白書」「特定目的・ベストセラー」に限定した。

いま二審制なのである。（離婚の作法　山口宏　PHP 研究所）[26]

（1）と（2）における「―上」は名詞として使用され、述語動詞の補語として働き、具体的な場所を表す。結合要素の種類によって、ここの「上（じょう）」は語基または接辞として使用される。これらに対し、（3）における「―上」は性質が異なり、副詞として働く。また、機能的側面からみて、（3）のようなものは様々なあり方を呈している。

このような「上（じょう）」を伴う語（以下「―上」とする）は文中で名詞、副詞として、或いは文を越えて、接続助詞的、接続詞的に機能する。本章では、接尾辞「上（じょう）」を後要素とする語「―上」を取り上げ、それが文中で或いは文を越えてどのように振る舞うか、どのように、そしてなぜ、接続詞化するかについて分析する。

以下、先行研究の紹介を 3.2 節で行い、語「―上」における「上（じょう）」の意味用法と機能については 3.3 節、「上（じょう）」の接尾辞化と用法の広がりについては 3.4 節、文における「―上」の機能と機能の移行については 3.5 節、「―上」の接続用法の使用条件と機能移行の原因については 3.6 節でそれぞれ詳述する。そして、3.7 節で記述した内容をまとめる。

## 3.2　先行研究

「上（じょう）」の性質と意味用法を取り上げる先行研究は少なく、国立国語研究所（1985）、野村（1978）、秋元（1991,1994）、黄（2014）などがあるが、このうち、「―上」の副詞的用法のほか、接続詞的な用法について言及したのは秋元（1991,1994）と黄（2014）である。

国立国語研究所（1985：54）では、接尾辞を「名詞性接尾辞」「動詞性接尾辞」「形容詞性接尾辞」「形容動詞性接尾辞」「副詞性接尾辞」と分け、「上」を副詞性接尾辞とし、例と

[26] 本章で用例を挙げるとき、具体的な場所を表し、名詞として使用される「―上」の場合において、「要素＋**―上**＋に・で＋述語」のようにそれぞれ下線、ゴシック体、波線で「―上」の空間的な関係に関わる対象、「―上」、述語を示す。抽象的な側面を表し、副詞などとして使用される場合において、要素に相当する部分は直線で、後件を表す後続内容は波線で、また、「―上」の結合要素の内容補足になる部分（「―上」が接続表現のように振る舞う場合の「前件」に該当する部分）は点線で示す。

して「事実上　形式上　経験上　手続き上」を挙げている。

野村（1978）では「地球上」の例を挙げ、「上（じょう）」を＜位置・順序＞を表す体言型語基としているが、「経済上」の「経済」のような抽象的な概念と結合する場合、「…に関する」という意味しか持たなくなり、相言型語基に近づくと述べている。

秋元（1991）では、「上（じょう）」は「海上」「車庫上」のように、前項の名詞が具体的な物の場合は位置関係や場所を示す意味となり、抽象度が増すにつれて、「学術上」「指導上」にある「上（じょう）」のように、「…に関して」「…の面で」の意味となると述べている。しかし結局、「…に関して」「…の面で」という意味も、「ある抽象的な概念という場所の上で」という意味にすぎず、つまり、「…に関して」「…の面で」などのような意味は具体的概念の延長線上にあるものと考えられている[27]。また、文頭にくる「行きがかり上」「対抗上」「形式上」「便宜上」の四つの例を挙げ、接尾辞「上（じょう）」の意味はすでに希薄化しており、前項の語と結合し先行の表現内容を受けて後続の表現を展開させる接続詞としての働きを持っており、研究の余地があると指摘している[28]。

秋元（1994）は談話における接尾辞「上（じょう）」の機能について、書きことばの場合、先行文（先行文脈）と後続文（後続文脈）との境を明確にするための接続詞が省略されることが多いが、そのとき、「上（じょう）」の付く語は副詞としての機能のほかに接続詞としての機能を担うことになり、どちらの機能が優位に立つかは、「上（じょう）」と結合する語の抽象度の違いによって異なるとしている。特に段落頭に「上（じょう）」が付く語が来る場合は、その段落が意味上まとまりのある前後のいくつかの段落の中心的な内容を含むことになるとしている。また、「上（じょう）」は結合する語に後接し、それをぼかして表現し、書き手（話し手）が断定を避け、緩和させるというような漠然化する働き[29]があると述べる。また、その程度は「上（じょう）」と結合する語の抽象度に関係すると指摘しているが、抽象度の度合いについて、談話における「上（じょう）」の付く語にどの程度の接続詞的な機能があるかについて、更に調べて明らかにする必要があると指摘する。

---

[27] 秋元（1991:23）

[28] 秋元（1991:26）

[29] 例えば、「事実」という語が百パーセント確実な場合にしか用いることができないのに対して、「事実上」という語は、書き手（話し手）がかなり確実だと判断した場合に用いることができる（秋元（1994：13））。

黄（2014）は「うえ」と「じょう」を取りあげ、中国語の「方位詞」と対照させながら、「上」の文法化について考察したが、「じょう」に関する内容は比較的少ない。「じょう」は「関係」「必要」「性質」のような漢語と結合し、「句＋漢語＋上」のような「外の関係」の連体修飾形式で接続助詞化するとされている。

先行研究では「上（じょう）」の性質と意味用法について、述べられている。特に、秋元（1991,1994）の考察では「上（じょう）」を接尾辞とする「―上」の副詞としての機能、及び談話における接続詞としての機能を担うようになることについて説明している。また、黄（2014）は漢語と結合した「上（じょう）」の文法化について、接続助詞化の面から紹介している。しかし、副詞として振る舞う「―上」が、どのような条件で接続助詞または接続詞のように機能するかという機能の移行条件や、「―上」が接続表現のように機能しうる原因については、明らかにしていないといえる。黄（2014）は漢語と結合した「上（じょう）」の接続助詞化について、「外の関係」によるものであるとされているが、これによって、ここにおける「上（じょう）」の必要性と機能は説明できない。その根拠として、「上（じょう）」がなくても接続助詞として機能することができる、「～した結果、……。」のように使用される名詞の存在が挙げられる。

以下、上記のことを解明するため、具体的に検討していく。

### 3.3　語「―上」における「上（じょう）」の意味用法と機能

語構成要素「上（じょう）」には次のような使用例があり、前接する要素の性質と「―上」という語における「上（じょう）」の意味とによって、以下のように分けられる[30]。

A. ＜一語化の「―上」＞（一字漢語＋上）

語例[31]：屋上、頂上、階上、頭上、卓上、席上、地上、陸上、途上、海上、など

---

[30] 現段階では動詞として使用される「―上」は対象外とする。また、結合要素間の関係が透明的で語源に遡らなくて把握できるものに限定する。このため、「上京」「上申」「上告」「上昇」「向上」「返上」「北上」などのような語は対象外とする。

[31] これらの語例は「新潮文庫の 100 冊」より収集した用例に含まれるものである。

B. ＜具体的な事物を表す自立形態素＋上＞（二字以上漢語／外来語＋上）

語例：甲板上、舞台上、線路上、道路上、地球上、リング上、手形・小切手上、など

C. ＜抽象的な事柄を表す自立形態素＋上＞（二字以上漢語／和語＋上）

語例：表面上、美容上、仕事上、立場上、経験上、責任上、実際上、事実上、必要上、関係上、都合上、など

上記のように、語構成要素「上（じょう）」とこれを後要素とする語「―上」のあり方は多様である。「上（じょう）」とそれを後要素とする語「―上」は、意味的にも、機能的にも「うえ」の場合と似通っているところがあると考えられる。ただし、「上（じょう）」は語構成要素であり、普通は結合要素と組み合わさって使用されるため、以下の具体的な考察では、「上（じょう）」ではなく、それを含む語「―上」を取り扱う。3.1 で挙げた用例を再掲し、語「―上」における「上（じょう）」の意味、用法と機能について説明する。

（1 再掲）a ふたりは新校舎の**屋上**で、一緒に昼食を取っていた。（コスプレ探偵かおり　島津出水　オークス）32

b クニヤは怒ってはいたが、その怒りを静めようと一掴みの砂を**地上**にさらさらと落とした。（オーストラリア癒しの大陸をゆく　園田豪　郁朋社）

例（1）a、b における「屋上」や「地上」のような「―上」は、前要素と後要素がすでにひとまとまりとなり、全体で 1 つの意味を成し、ある具体的な場所を示す。例えば、文中において、述語の補語として、述語で示す動作、状態などの具体的な場所を表す。

（2 再掲）a 僕は乗降台からプラットフォームと反対側の**線路上**に押し飛ばされ、誰か女の人らしい柔かい体の上に被さった。（黒い雨　井伏鱒二）

---

32 （作品名　作者　出版社／出版機構）のように出典を記しているものは「現代日本語書き言葉均衡コーパス（中納言）」で収集した用例であり、（作品名　作者）のように記しているものは本稿の主な用例出典である「新潮文庫の 100 冊」から引いたものであるが、用例の同質性を考慮し、前者は検索範囲を「出版・書籍」「図書館・書籍」「特定目的・白書」「特定目的・ベストセラー」に限定した。

b 「へたくそー、実家へ帰れー」一瞬、**舞台上**で演者の手が止まったように見えた。（おぼけさま　西村美智代　東京新聞出版局）

例（2）a と b における「線路上」や「舞台上」のような「―上」は、それぞれ「線路のうえにおいて」「舞台のうえにおいて」という意味を表し、「うえ」の場合と同様に、具体的な文脈で「線路のうえ」「舞台のうえ」の詳細位置が決まる。結語要素を意味的に分けて見れば、「上（じょう）」は「うえ」と同様に、それぞれ「線路」と述語の対象語である「僕」を、「舞台」とそこにある述語の動作主である「演者」を関連付け、その間の空間的な関係を表すと考えられる。このような場合における「―上」は「（あるところの）ある側面において」の意味を表し、述語の補語として、述語で示す動作、状態などの具体的な場所を前面に出し、話し手／語り手の叙述として示す。

（3 再掲）a 特色ある学校づくりは**教育上**大きな効果がある。（生活科授業研究　川上昭吾　教育出版）

b 座席の位置の**関係上**、城吉が先に車を降りる。（楡家の人びと　北杜夫）

c 従来は、上告を比較的無制限に許していて、だからこそ三審制だったのだが、現在では、かつて「まだ最高裁がある」といわれたような状況はすでになくなってしまっている。**事実上**、日本はいま二審制なのである。（離婚の作法　山口宏　PHP 研究所）

例（3）a における「教育上」は、「美容上」「経済上」「衛生上」などと同様なものである。このような「―上」は抽象的な意味を表す前要素を持ち、「ある側面において」という意味表す。そして、後続する話し手／語り手の「大きな効果がある」などのような判断、認識を出す条件、立場を前面に出して示すことで、話し手／語り手の主観的な事態把握を表していると考えられる。後続する判断、認識があるため、「―上」は「ある側面から見ると／言うと」という意味を表すとも考えられる。このような場合、「―上」は後続する判断、認識などの内容に先行する条件として働く。

例（3）の b、c における「関係上」「事実上」のような「―上」は、同様に話し手／語り手の主観的な事態把握を表し、「ある側面から見ると／言うと」ということを前面に出すが、前後関わる内容がより長く、影響する範囲が「教育上」のような場合よりも広いといえる。

このような場合における「上（じょう）」も「うえ」の場合と同様に、抽象的な事物や事態を示す要素と要素を関連付け、その間の関係を表す。

以上、語「―上」における「上（じょう）」の意味用法と機能について述べてきたが、表2に示すように、前接要素によって、「上（じょう）」と「―上」は多様なあり方、意味と性質を呈している。

表2　「上（じょう）」と「―上」の意味と性質

| 分類 | 前接要素の特徴 | 「上（じょう）」の性質 | 「―上」の性質 | 「上（じょう）」の意味 |
|---|---|---|---|---|
| A | 多くは具体的な事物を表す非自立形態素、一字漢語 | 名詞性語基 | 一語化の名詞 | 「ある側面において」という、空間的な位置・範囲・部分を表す |
| B | 具体的な事物を表す自立形態素、二字以上漢語／外来語 | 名詞性接尾辞 | 名詞 | 「ある側面において」という、空間的な位置・範囲・部分を表す;「ある側面から見ると／言うと」という発言する条件を示す抽象的な範囲を表す |
| C | 抽象的な事柄を表す自立形態素、二字以上漢語／和語 | 副詞性接尾辞 | 副詞 | 「ある側面から見ると／言うと」という、発言する条件を示す抽象的な範囲を表す |

このうち、接尾辞として振る舞うのがBとCにおける「上（じょう）」である。これは結合する要素の多様化のみならず、「句の包摂」という現象とも関わり、その前接部分が語のレベルのみならず、句のレベルまで拡大している。また、Cにおける「―上」は普通副詞として振る舞うが、使用される言語環境によって接続助詞的、接続詞的に振る舞う場合がある。これについて、以下で詳しく説明する。

### 3.4　「上（じょう）」の接尾辞化と用法の広がり

3.3 で示している A 種において、「上（じょう）」は「屋」「頂」「頭」「卓」「席」「地」のような一字漢語と共起するのに対し、B における前接要素は自立的形態素であるとともに、語種、文字数と前接要素の数（複数の前接要素）も多くなり、A よりも前接要素が拡大していると考えられる。また、C は A より、前接要素の語種、文字数などが多くなり、また、B 以上に前接要素が自由であるため、前接要素が更に拡大していると考えられる。A に対し、B、さらに C における「上（じょう）」は、独自の意味が薄くなり、抽象的な範囲、側面のような意味を生み、前接要素の拡大に伴って生産力も増すようになるため、接尾辞化しているといえる。

このように、結合要素の種類によって、語構成要素「上（じょう）」は語基または接辞として使用される。以下、一部の用例を再掲し、接尾辞として使用される「上（じょう）」の特徴を説明する。

（1 再掲）a ふたりは新校舎の**屋上**で、一緒に昼食を取っていた。

（2 再掲）a 僕は乗降台からプラットフォームと反対側の**線路上**に押し飛ばされ、誰か女の人らしい柔かい体の上に被さった。

（3 再掲）b 座席の位置の**関係上**、城吉が先に車を降りる。

（4）父の詩は、すべて、おおらかな人間讃歌の調べに溢れていた。行助は一月に生れていたのに、父は詩で五月生れにしていた。作詩の**環境上**、そうしたのかもしれない。（冬の旅　立原正秋）

上記の例における「屋上」と「線路上」は、「上（じょう）」が具体的な事物を表す要素と結合したものであり、文において同じく名詞として使用され、述語動詞の補語として働き、具体的な場所表す。しかし、その前に修飾部分がくる場合、修飾される範囲に違いがある。「新校舎の」は「屋上」全体を修飾しているのに対し、「プラットフォームと反対側の」は「線路上」全体ではなく、その前接要素である「線路」を修飾している。また、「上（じょう）」が抽象的な事柄を表す要素と結合した「関係上」と「環境上」においても、同様な点が見られる。連体修飾成分の「座席の位置の」「作詩の」は「―上」全体ではなく、それぞれ「上（じょう）」の前接要素「関係」「環境」を修飾している。このような現象は

「本来、形態的な語形成レベルのものが、意味的に語を越えた、統語論的なレベルのものを包摂している」（森山（1986：22））という「句の包摂」現象といえる。影山（1993）では、「中世のフランス風」などの例を挙げ、「元来は形態素ないし語を対象とする語彙的な接辞要素が、統語的な句にまで拡張する」[33]と説明している。「線路」「舞台」などのような具体的な事物を表す自立形態素、あるいは「教育」「環境」「経済」などのような抽象的な事柄を表す自立形態素と結合する「上（じょう）」にはこのような現象が見られ、「上（じょう）」は接尾辞になっているといえる[34]。これは「―上」の機能の移行とも関わっているが、詳しくは後述する。

### 3.5　文における「―上」の機能と機能の移行

国立国語研究所（1985）では「上」を副詞性接尾辞とし、例として「事実上」「形式上」「経験上」「手続き上」を挙げているが、機能的側面からみて、「―上」には様々なあり方がある。

（5）O 型と A 型の両親から、AB 型という子供は絶対に生れないんだ。つまりだよ、登美子のおなかの子供はお前の子供じゃなかったんだ。これは**学問上**まちがいの無い事なんだよ。（青春の蹉跌　石川達三）

（5）’O 型と A 型の両親から、AB 型という子供は絶対に生れないんだ。つまりだよ、登美子のおなかの子供はお前の子供じゃなかったんだ。**学問上**、これはまちがいの無い事なんだよ。

「上（じょう）」が抽象的な事柄を表す要素と結合した「―上」は、述語動詞に格支配されず、文において単独で使用され、副詞として働く。例（3）a、例（5）のように、述語の修飾語として働き、名詞の「屋上」などほどではないものの、文中での位置が相対的に自由であり、被修飾部分の直前にくることも、例（5）’のように文頭にくることもできる。また、述語は判断、評価などを表すことが多く、このような「―上」は普通、連体修飾成分が前接しない。

---

[33] 影山（1993:326）

[34] 「上（じょう）」の接尾辞化に伴い、前接要素の語種、文字数と数（複数の前接要素）などから前接要素の拡大現象も見られるが、本稿の注目点ではなく、この部分に関する詳しい説明は省略する。

(6) フレンドコーポレーションの本店所在地は河本の会社の一室にあり、実際の業務もここで行なっていた**関係上**、私は新年の挨拶も兼ねて河本の会社へ出向き、そこでゴルフ場の進行状況についての意見交換と報告を兼ねた会談を行なった。(真実の報酬　藤田敏彰　文芸社)

(7) 親戚はどちらも少くて、わたしの方は村内にいる遠縁のもの二、三人だけ、珠子の方は東京から、珠子の従兄という人が来てくれただけでした。村の人もだいぶ招いたのですが、村長のほかは四、五人という淋しさでした。これはまあ、わたしたちの結婚に反対した**行きがかり上**、来づらいからでもあったのでしょう。(エディプスの恋人　筒井康隆)

また、例(3)b、例(6)、例(7)のように、連体修飾成分が前接するものもある。そして、例(3)cのように、前に述べた内容を受けて、文頭にくるものがある。例(3)b、例(6)における「関係上」を接続助詞の「ため」、例(3)cにおける「事実上」を接続詞の「つまり」、あるいは複合接続詞の「ということで」などにそれぞれ言い換えても、前後の意味的関係は変わらない。これらの例に使用される「―上」は述語を修飾し、副詞として使用される「教育上」「美容上」「学問上」などと異なる機能的側面があり、前に述べた内容を受け、後ろにくる内容に引き継ぐという点で、それぞれ接続助詞と接続詞の性格を帯びていると考えられる。

このように、修飾成分が必要となるかどうか、必要な場合、修飾成分が前文または前文脈にあるかどうか、などの条件によって、副詞のように使用される「―上」は接続助詞的、接続詞的に振る舞うことがある。

表3　「上(じょう)」と「―上」の意味と機能

<table>
<tr><th>使用例</th><th>「―上」の機能</th><th colspan="2">「―上」の統語的、構文的特徴</th></tr>
<tr><td rowspan="3">教育上、表面上、生活上、仕事上、責任上、立場上、関係上、事実上、行きがかり上、など</td><td>副詞のように振る舞う。</td><td rowspan="3">普通はゼロ格で使用される。「句の包摂」現象がある。</td><td>修飾成分が不必要であり、単文で使用されることが多く、述語の前または文頭にくる。</td></tr>
<tr><td>接続助詞のように振る舞う。</td><td>修飾成分が必要であり、複文で使用され、従属節の節末にくる。</td></tr>
<tr><td>接続詞のように振る舞う。</td><td>修飾成分が必要で普通前文または前文脈にある。複文で使用され、文頭にくる。</td></tr>
</table>

前述した表 2 では、A、B、C の三類について、意味や性質などを説明したが、表 3 は C 類の更なる展開について、「—上」の多様な機能を示すものである。この類にある「—上」は副詞として使用されるほか、例（3）b、例（4）で示されるように、修飾成分が前接しながらも、文において機能的には副詞のように、また、例（6）、例（3）c で示されるように、接続助詞または接続詞のように使用されることがある。一つの語例であっても、例えば、「立場上」は場合によって、副詞のようにも、接続助詞または接続詞のようにも振る舞うのである。

上記のように、「—上」の機能する範囲の差がもたらした機能の移行現象はあると考えられる。続けて、どのような「—上」が、どのような条件で接続表現[35]の性格を帯びるか、次節で検討する。

### 3.6　「—上」の接続用法の使用条件と機能移行の原因

3.2 先行研究で述べたように、接続表現のように機能する「—上」における語構成要素「上（じょう）」の必要性と機能を説明する必要があるが、このことは接尾辞「上（じょう）」による「句の包摂」現象と関わると思われる。普通、接続表現は前件を受けて後件に引き継ぐという機能を持つため、このように振る舞う「—上」も同様な機能を持つことを明らかにする必要がある。また、副詞として使用される場合と比較し、接続表現のように振る舞う「—上」にある特質についても検討してみる。

前述した用例から分かるように、副詞として使用される「—上」も、接続表現のように振る舞う「—上」も、それのみで文または叙述内容を完結させることができず、後続内容が必要である。また、「上（じょう）」にはある側面、範囲の意味が潜んでいるため、その側面、範囲という角度から何かについて語ることができる。つまり、「—上」はある事態を切り出すような機能を持っており、これによって後続内容を展開し、【引き継ぐ】機能を果たす。これに対し、前者の【受ける】に関する更なる検討が必要であると思われる。

【受ける】: 前の文または文脈を受ける可能性と必要性

【引き継ぐ】: 後の文または文脈を引き継ぐ展開機能

---

[35] 本稿は接続助詞と接続詞を合わせていう場合、「接続表現」という用語を使う。

抽象的な事柄を表す自立形態素と結合する「上（じょう）」には、次のようなものがある。ただし、これらの語全てが副詞として以外に、接続表現のように機能することがあるわけではなく、それは一部のみであり、例えば、「事実上」「実際上」「立場上」「行きがかり上」「責任上」などが挙げられる。

想起閾上、表面上、戸籍上、衛生上、美容上、職務上、経験上、組織上、公務上、商売上、生活上、歴史上、法律上、法規上、財政上、証券上、宗教上、営業上、経営上、教育上、学問上、医学上、生物学上、心理学上、作戦上、技術上、責任上、企業戦略上、会社運営上、公安保持上、看護並治療上、体面上、体裁上、風体上、環境上、捜査上、整理上、登録上、想像上、性質上、実際上、事実上、名目上、必要上、関係上、都合上、仕事上、手続上、立場上、行きがかり上、など

さて、上記のリストにあるものは次の 3 種に分けることができる。

①その前接要素である語自身で、ある抽象的な事物または事態を表すことができ、修飾部分が必要ではない語。

例：「想起閾上」「戸籍上」「衛生上」「美容上」「商売上」「教育上」「宗教上」「医学上」「生物学上」「心理学上」

②複数の前接要素が合わせてある物事を表し、修飾部分も必要ではない語。

例：「企業戦略上」「会社運営上」「公安保持上」

③前接要素自身で完全な内容を表すことができず、修飾部分が必要となる語。

例：「事実上」「実際上」「立場上」「行きがかり上」「関係上」「必要上」「都合上」

なお、このような「修飾部分＋「—上」」形式の成立は、接尾辞「上（じょう）」の「句の包摂」現象に由来すると考えられる。修飾部分と「—上」の位置によって、接続助詞あるいは接続詞のように機能するものに分けられる。典型例として、後述する「関係上」と「事実上」がある。前者は修飾部分が必要であっても、その位置が常に直前であり、「関係上」に前接して出現するのに対し、後者はその意味を補足する内容がしばしば前

文脈にある。また、「立場上」のような両方の用法を持つものもある[36]。

当然、修飾部分が必要となるものとそうではないものの間に明確な境界線はなく、例えば「（子供の）教育上」のように、修飾部分が必須ではないが、あってもいいというものもある。

③に分けられるものは、接続助詞あるいは接続詞のように振る舞うことがあるが、この両者にはどのような区別があるか、両方の用法を持つ「立場上」を例に、以下で説明する。

（8）松倉は周玲が魅力的なことに今更ながら気付いた。今まではあまり女性であることを意識したことはなかった。むしろチャチャイのエキゾチックな美貌が気になっていた。**立場上**、手を出すわけには行かないが。「コーヒー、わたし入れます」　周玲が腰を浮かせた。（警視庁国際特捜隊　田中光二　勁文社）

（9）光があたっている。道の表面を薄くおおっている白い砂も乾ききっている。後ろに人の気配がし、二人は同時にふりかえった。日傘代わりに黒い雨傘をさした痩せた男が立っていた。（中略）「勲、わしはな、工事現場の交通整理をしている**立場上**、賛成せざるをえないが、ずっと苦しんでいるんだ。わかってくれよな。わしの立場があるんだ。だが、トゥジ（女房）やウヤ（親）には反対するように話しておくよ」「賛成をして、苦しむいわれは何もないですよ。私も賛成しています」自治会長は父を制するようにすぐ言った。（陸蟹たちの行進　又吉栄喜　新潮社）

全体的に見ると、「―上」の位置が文頭あるいは主節の冒頭であっても、従属節の節末であっても、従属節／前文で表している事態（以下「前件」と呼ぶ）と主節／後続文で表している事態（以下「後件」と呼ぶ）とは緊密に関連しているものでなければならない。ただし、前件と後件との意味的な関係によって、「―上」の機能が違ってくると考えられる。例（8）において、前件の事態を受けて、後件はそれに対する情報付加、補説のような役割

[36] これらすべての用例を挙げることをせず、その振る舞いについて、まとめて説明する。副詞として以外、「事実上」と「実際上」は「……、―上、……」または「……。―上、……」のようなパターンで接続詞的に使用されることが多いのに対し、「関係上」「必要上」「都合上」は「……―上、……」のように修飾部分が前接して接続助詞のように使用されることが多い。また、「立場上」「行きがかり上」はこの両方の用法がある。

をする。それに対し、例（9）では、前件と後件が因果関係をなしている。前述の例（6）においても、「関係上」によって関連づけられている前件と後件が因果関係をなしているのに対し、例（3）c では、「事実上」に後続する内容はその前件で表す内容に対する帰結の意味を持つ補説の役割をする。

緊密度についてより詳しく検討する必要がある。まず、「……、／……。事実上、……」のようなものにおいて、前件は例（3）c のように長いものあるいは複数の文からなるものもあり、「事実上」は後件と共に、前件に対して情報付加、補説のような役割を果たす。つまり、後続内容との緊密度がより高いと考えられる。これに対し、「～関係上、……」のようなものにおいて、「関係上」は前件と共に後件の原因と理由をなすため、先行内容との緊密度がより高いと考えられる。また、情報付加、補説の関係は、因果関係より前件と後件との緊密度が低いと考えられる。これは、塚原（1969:73）が接続助詞と接続詞の違いについて述べた「接続詞の連接は、単位を分離したままで関係づける機能である」こと、「接続助詞の連接は、関係づけることによって単位を癒着する機能である」ことと一致している。このことはまた、接続表現が機能する範囲とも関わると思われる。「事実上」は複数の文からなる前件のみならず、次のように、会話間の接続もできる。

（10）「（前略）ぼくは袖から出ていって、両手をあげてこういったんだ。“わるいけど、事故があったんだ。みんな客席にすわってくれ。ハービー、ちょっとこっちへ”とね」「そういったとき、きみが立っていた位置は？」「ステージの下手前方だ」「ドアのところかな？」「いや。ドアは下手後方だ。ぼくは演台のところからまっすぐ袖をつっきってステージに出たんだ」「目隠し板のあいだを抜けて？」「**事実上**、プロセニアムとセットの正面のあいだの、狭い空間のあいだに体を割りこませるようにしてね」「下手前方に立っていて、そこからステージに歩み出てさっきのようにいったわけだね？」「そうです」（後略）（俳優は楽じゃない　パーネル・ホール著／田中一江訳　早川書房）

この例では、「―上」は文を越えて機能するのみならず、談話機能をも持つと考えられる。これは「談話機能の発達」「主観化」などの文法化の概念と関わっており、次章で「事実上」を例に検討する。なお、今後、より多くの個別考察を取り上げ、詳しく検討する予定である。

このように、「—上」は接続表現のように振る舞うことがあるが、「関係上」「事実上」「立場上」「行きがかり上」などには未だ前接要素である名詞の意味が残っているため、完全に接続表現になっているのではなく、機能的側面からみて、接続助詞あるいは接続詞のように振る舞うと言えよう。また、前件と後件の因果関係を表す「関係上」にしても、後件と共に前件に対する情報付加、補説の役割を果たす「事実上」にしても、「—上」の用法は前接要素である名詞の意味に影響されており、「立場上」も「立場」の意味的な解釈によって両方の機能を持つことができると考えられる。

以上より、「—上」が接続詞のように振る舞う条件と機能的な面に見る原因について、次のようなことがいえると考えられる。

①前接要素自身で完全な意味を表すことができず、その意味内容を補足するための修飾部分が必要となる。また、修飾部分が前文または前文脈にあり、「—上」は単独で使用され、先行内容を受け後続内容に引き継ぐ機能を果たす。

②語彙的な意味が残っている前接要素と「上（じょう）」が結合して構成した「—上」は、先行内容と後続内容の意味的関係に影響を与える。「—上」は後続内容とともに先行内容に対する状況説明、情報付加の働きをする場合、後続内容との緊密度がより高く、接続詞のように振る舞うと考えられる。

益岡・田窪（1996：57）では、接続詞は他の品詞から転用したものが多く、接続助詞やそれに相当する表現に由来するもの、指示詞を含む表現に由来するもの、動詞に由来するもの、「名詞＋助詞」の形のもの等があると述べているが、本稿で考察したように、機能面からみれば、「—上」も接続表現への参与があり、「—上」なりの特質があるとわかる。

### 3.7　まとめと今後の課題

本章は接尾辞「上（じょう）」を後要素とする語「—上」を取りあげ、その意味用法と機能について記述した。また、それが文においてあるいは文を越えてどのように振る舞うか、更に、なぜ接続表現のように振る舞うかなどについて検討した。

語構成要素「上（じょう）」と、これを後要素とする語「—上」には多様なあり方がある。具体的な意味を表す前要素と結合する場合、「ある側面において」という意味を表し、述語の補語として、述語で示す動作、状態などの具体的な場所を前面に出し、話し手／語り手の叙述として示す。また、抽象的な意味を表す前要素と結合する場合、後続する話し手／語り手の判断、認識を出す条件、立場を前面に出して示すことで、話し手／語り手の主観的な事態把握を表していると考えられる。結合要素の種類と前後文脈によって、「ある側面において」「ある側面から見ると／言うと」という意味を表す「—上」は、前面に出され、後続する内容に先行する条件として働く。

「上（じょう）」は前接要素の拡大を伴って生産力を増し、接尾辞化し、抽象的な側面・範囲という意味を表すようになる。その前接部分は語の内部のみならず、語を越えて句まで拡大し、そこには、接尾辞「上（じょう）」が前接要素とその修飾部分を包み込む「句の包摂」現象が見られる。

「上（じょう）」は、抽象的な事柄を表す自立形態素と結合する場合、副詞のように振る舞うことが多い。しかし、修飾成分が必要となるかどうか、必要な場合、修飾成分が前文または前文脈にあるかどうか、などの条件によって、副詞のように使用される「—上」が接続助詞、及び接続詞のように振る舞うことがある。

「上（じょう）」の前接要素自身で完全な意味を表すことができず、その意味内容を補足するための修飾部分が必要となる場合がある。このような「—上」の用法は、語構成要素「上（じょう）」の接尾辞化による「句の包摂」現象に由来するものであると考えられる。「—上」の意味用法は前接要素である名詞の意味に影響されるが、修飾部分が直前にきて「—上」が前件と共に後件に対する原因、理由を表す場合、接続助詞のように振る舞う。これに対し、修飾部分が前文または前文脈にあり、「—上」が単独で使用され、後件と共に前件に対する情報付加、補説の働きをする場合、後続内容との緊密度がより高くなり、接続詞のように振る舞う。このように、「—上」は前件を受け、後件に引き継いで、接続表現のように振る舞う。特に、接続詞のように振る舞う「—上」は文を越えるのみならず、談話機能をもつ場合もあり、これについては、次章で「事実上」を例に、個別考察を行う。

なお、本稿の内容と関わる「句の包摂」現象は、「—上」だけでなく、他の空間的な関係

を表すことができる接尾辞を後要素とする語の場合にも当てはまると考えられるが、ここでは今後の課題とし、別稿に譲る。

## 第 4 章　「事実上」の意味用法と機能

### 4.1　はじめに

現代日本語における「事実上」という語には、次のような用法がある。

(1) 文部科学省が今、国立大学を独立行政法人化するということで、それはさておき、その前に今年の四月から独立行政法人化した文科省の機関として、博物館を**事実上**民営化に近づけました。（知と美のハーモニー　末松安晴編　オーム社）

(2) 従来は、上告を比較的無制限に許していて、だからこそ三審制だったのだが、現在では、かつて「まだ最高裁がある」といわれたような状況はすでになくなってしまっている。**事実上**、日本はいま二審制なのである。（離婚の作法　山口宏　PHP 研究所）

例（1）では、「事実上」は述語「民営化に近づけました」を修飾し、「事実という側面から見ると」という意味を表し、文中で副詞として働く。例（2）では、「事実上」は後続文全体を修飾しており、また、前述内容を受けている。「事実上」と関わる前後の内容を意味的な関係から見ると、前述内容で示す事実によって、後続内容で示す事態がある／いえるということを表す。機能的には、この例における「事実上」は前の内容を受けて後の内容に引き継ぐということで、接続表現のように振る舞っているといえる。このように、抽象的な名詞「事実」と接尾辞「上（じょう）」が結合し、副詞として働く「事実上」には使用される言語的な環境によって、機能的な広がりが見られる。

上記の 3 章において、空間的な関係を表す自立語と語構成要素の意味用法とその広がりについて述べた。「事実上」は、その用法と機能に幅広い広がりが見られ、第 3 章で検討した「—上」の個別例として、詳述する余地と価値があると考えられる。このことから、個別考察の対象として「事実上」のみを扱うのでは不十分であることは承知の上で、本研究では「事実上」を個別考察の代表として扱うこととする。

「事実上」が、副詞として働く場合、どのような意味用法と機能を持つか、またどのような条件で接続詞のように振る舞うか、そして「事実上」の各意味機能の間にどのような関連性があるかについて、「事実」「事実の上」などの表現と比較しながら、明らかにすることを考察の目的とする。

具体的に、先行研究の紹介は 4.2 節、文において副詞として働く「事実上」については 4.3 節、文を越えて接続詞のように振る舞う「事実上」の意味機能と性質については 4.4 節、「事実上」と意味的に、あるいは機能的に共通性を持つ「事実の上」、「事実」、またこれらと異なる側面を持つ「事実上」については 4.5 節、「事実上」の各意味機能の関連性とこの点と関わる接尾辞「上（じょう）」の働きについては 4.6 節で詳述する。そして、4.7 節でまとめを行う。

## 4.2　先行研究

「事実上」に関する個別考察の先行研究は見当たらないが、「—上」の例として挙げているものはある。その中で、「事実上」は「事実」と違う側面を持ち、「—上」の全般と共通しているところがあると考えられている。以下で、その性質と関連する内容を紹介する。なお、「事実」に関する内容は該当する 4.5 節で「事実上」と比較しながら詳述する。

国立国語研究所（1985:54）では、接尾辞を「名詞性接尾辞」「動詞性接尾辞」「形容詞性接尾辞」「形容動詞性接尾辞」「副詞性接尾辞」と分け、「上」を副詞性接尾辞とし、例として「事実上　形式上　経験上　手続き上」を挙げている。

野村（1978）では「地球上」の例を挙げ、「上（じょう）」を＜位置・順序＞を表す体言型語基としているが、「経済上」の「経済」のような抽象的な概念と結合する場合、「…に関する」という意味しか持たなくなり、相言型語基[37]に近づくと述べている。

「事実上」は普通、副詞として扱われるが、「事実上の親」のような名詞を修飾する場合、体言とされることがある。このような名詞を修飾する「事実上」は、本稿で検討する問題に直接関連しないため、ここでは対象から除外する。

秋元（1991）では、文頭にくる「行きがかり上」「対抗上」「形式上」「便宜上」における接尾辞「上（じょう）」の意味はすでに希薄であり、前項の語と結合して先行の表現内容を受けて後続の表現を展開させる接続詞としての働きを持っており、研究の余地を指摘して

[37] 野村（1978）では、品詞性に注目し、後部分の接辞性の語基を体現型、用言型、相言型に分けている。相言型の語基は、結合形全体を形容動詞の語幹相当の性格に変える特徴を持ち、結合形全体が「○○○ノ」というかたちで、体言を修飾することが多いという。これは用言型語基と似ているが、「ガ」「ヲ」などの格助詞をともなうことは、ほとんどないと述べている。ただし、例として、「経済上の問題」「捜査中の事件」のようなものを挙げており、本稿で取り扱う用法とは異なるものである。

いる[38]。拙作張（2019）の考察から分かるように、接続詞としての働きを持つものはこの 4 つのみならず、他にもある。また、接続詞として以外に、接続助詞としての働きを持つものもある。

秋元（1994）は先行文（先行文脈）と後続文（後続文脈）との間を明確にするための接続詞が省かれる場合、「上（じょう）」の付く語は副詞としての機能のほかに接続詞としての機能を担うことになり、どちらの機能が優位に立つかは、「上（じょう）」と結合する語の抽象度の違いによるとしている。また、「上（じょう）」は結合する語に後接し、それをぼかして表現し、書き手（話し手）が断定を避け、緩和させるような漠然化の働き[39]を持つと述べている。確かに、「上（じょう）」の付く語（本稿ではこれを「―上」と表記する）は副詞として働く場合も接続詞のように振る舞う場合も、「上（じょう）」が抽象的な語と結合するが、どちらの機能が優位に立つかは、語の性質ではなく、語が使用される言語的な環境による。「事実上」のような一語であっても、使用環境によって両方の機能を持ち得るのである。

先行研究に個別考察はないが、「事実上」は文中で副詞として使用され、場合によっては接続詞のように振る舞うことがあり、その特徴や条件などについて、また、「事実上」の各意味用法の関連性などについて、「―上」の事例研究として研究する余地があると考える。

以下、上記のことを解明するため、具体的に記述し、検討していく。

具体的な記述と分析は、4 つの部分に分けて行う。具体的には、副詞として働く「事実上」の意味用法の特徴、接続詞のように振る舞う「事実上」のあり方と性質、「事実上」と「事実の上（うえ）」、「事実」との共通点と相違点及びそこにおける「上（じょう）」の役割、「事実上」の各意味機能の関連性などについて検討し、明らかにする。

### 4.3　文において副詞として働く「事実上」

国立国語研究所（1985：54）では、「事実上」における「上」を副詞性接尾辞、「事実上」を副詞としているが、この節では、文において、「事実上」が副詞としてどのような意味、

---

[38] 秋元（1991：26）

[39] 例えば、「事実」という語が百パーセント確実な場合にしか用いることができないのに対して、「事実上」という語は、書き手（話し手）がかなり確実だと判断した場合に用いることができる（秋元（1994：13））。

用法と機能を持つかについて記述する。また、「事実上」は話し手／語り手の判断、認識を述べる条件・立場を前面に出し、このような相反の関係、または相関の関係を強める役割を果たす副詞であることを主張する。

(3)（前略）このような債権者平等の理念・労働債権の優先的地位が現実のものとなるのは、法的整理の手続においてのみであり、私的整理の手続では、多くの場合、これらの理念は無視されることが多いのです。私的整理手続では、早い者勝ちのルールが**事実上**支配します。そこで従業員は、迅速に手段を講じ、そのような私的整理の手続の中においても早い者勝ちのルールの中での勝者となるように努める対策をしようとします。（会社経営の法律知識　実著者不明　自由国民社）

(4) 政策情報は既存の情報・知識を補完し、修正可能なものでなければならない。ある時期・ある状況・ある問題に適用するために収集した情報をすべての問題に対し常に適用することは、**事実上**不可能である。（図書館情報政策　金容媛　丸善）

(5) 幸徳が無政府主義を唱え出して、多数の青年がそれに従ったとき、社会主義の片山潜や西川光二郎は、幸徳や堺を「買収された」と公言した。市子一人が経済的に独立していて大杉を含む他の三人が独立していないということはすでに大杉の多角恋愛論が破産していることであり、同時に彼の革命論の基盤を否定することにも通じた。それはプライドだけはやけに強い、革命家であることを自負している大杉にとっては辛い真実であった。大杉を支持する研究会の参加者も次第に彼から離れていき、研究会も**事実上**崩壊していた。（プロメテウス　杉山秀子　新樹社）

(6) 小選挙区制の趣旨からいえば、選挙運動の手段はすべて政党に与え、政党だけが選挙運動を行えるようにした方がよい。しかし、個人の選挙運動を全面禁止すると憲法に違反することになるので、最低限の手段は個人にも認めざるを得ない。（中略）こうすると、個人は選挙運動の最低限の権利は認められても、全部自費で、しかも限られた範囲内で運動する以外にない。有効な選挙運動は**事実上**、政党しかできないことになる。この措置は、資金力のある政党や候補者が有利に選挙運動を展開するのを防ぎ、かつ、公認漏れになった候補者が無所属で立候補する道を閉ざすためだ。（日本改造計画　小沢一郎　講談社）

例（3）～（6）において、「事実上」は述語を修飾する副詞として働いており、「事実という側面から見ると／言うと」という意味を表す。ここの「事実上」は話し手／語り手の

立場、発話する条件を表しており、述語で述べている「(早い者勝ちのルールが）支配します」「(ある時期・ある状況・ある問題に適用するために収集した情報をすべての問題に対し常に適用することは）不可能である」「(研究会も）崩壊していた」「(有効な選挙運動は）政党しかできないことになる」という事態（波線で示す部分）が成立する条件を示す。文においては修飾成分として働くが、「事実上」がなければ、文の内容が意味的に変わってしまうこと、または前後の内容が食い違うことがある（下記では、「＃」記号で例文の前後文脈の内容が食い違うところがあることを示す)。

(5)’（前略）市子一人が経済的に独立していて大杉を含む他の三人が独立していないということはすでに大杉の多角恋愛論が破産していることであり、同時に彼の革命論の基盤を否定することにも通じた。それはプライドだけはやけに強い、革命家であることを自負している大杉にとっては辛い真実であった。大杉を支持する研究会の参加者も次第に彼から離れていき、研究会も崩壊していた。

例（5)’では、点線で示す前文脈である「市子一人が……ことにも通じた」は事態の背景を提示している。このような背景となる原因があって波線部分の「大杉を支持する研究会の参加者も次第に彼から離れていき」と「研究会も崩壊していた」という結果状況になった。この用例を例（5）の原文「大杉を支持する研究会の参加者も次第に彼から離れていき、研究会も**事実上**崩壊していた」と比べると、例（5）では、「研究会」が名前だけが残って、実質がなくなるという名存実亡の状況を表す意味を読み取ることができるのに対し、例（5)’では研究会の崩壊を現実として示しているということが分かる。ここに話し手／語り手が判断・認識を発話する条件や立場を示す「事実上」のような副詞がなければ、意味的に文の内容が変わってしまう。

(6)’**＃** 小選挙区制の趣旨からいえば、選挙運動の手段はすべて政党に与え、政党だけが選挙運動を行えるようにした方がよい。しかし、個人の選挙運動を全面禁止すると憲法に違反することになるので、最低限の手段は個人にも認めざるを得ない。（中略）こうすると、個人は選挙運動の最低限の権利は認められても、全部自費で、しかも限られた範囲内で運動する以外にない。有効な選挙運動は、政党しかできないことになる。

例（6)’では、点線で示す前文脈から、個人の選挙運動は様々な制限を受けているが、全面禁止ではなく、選挙運動ができないわけではないということが分かる。これに対し、後続文「有効な選挙運動は、政党しかできないことになる」は前述の内容と一致していないところがある。ここに発話する条件や立場を示す「事実上」のような副詞がないと、前後の内容が食い違うことがあると考えられる。

上記の例により、文における「事実上」の必要性が窺える。副詞「事実上」は、これに修飾される述語の表す事態が成立するための前置きのような役割を果たすものであり、話し手／語り手の判断、認識に先行する条件として前面に現れる。「事実上」が修飾する述語は上記の「支配します」「不可能である」「政党しかできないことになる」のように、しばしば話し手／語り手の判断、認識を表す。「事実上」はこのような判断、認識を述べる立場、出発点となる条件を前面に出すのである。つまり、「事実上」が修飾する部分は述語であるが、前述内容と無関係ではなく、意味的に関わっている。そのため、「事実上」がなければ、意味的に文の内容が変わること、または前後の内容が食い違うことがある。

また、このように話し手／語り手の判断、認識を述べる条件を前面に出す働きをする「事実上」は、述語を修飾するのみならず、文全体を修飾する場合がある。

益岡・田窪（1996）は、述語の修飾語として働く語を副詞とするほか、文全体に対して修飾語として働く語も副詞の一種とみなし、「文修飾副詞」と呼んでいる。また、文修飾副詞を、「陳述の副詞」「評価の副詞」「発言の副詞」に分け、それぞれの例として、「ぜひ、もし、万一、かりに、たとえ…」「あいにく、さいわい、当然、もちろん、むろん…」「実は、実際（は)、言わば、例えば、要は…」などを挙げている。

「事実上」は文修飾副詞（以下「文副詞」と呼ぶ）として働くことがあり、「発言の副詞」と似通っている。また、多くの場合、名詞ほどではないが、文中の位置が固定ではなく、移動することができる。例えば、例（3）は例（3)’のように、「事実上」を「早い者勝ちのルールが」の前に移動することができる。例（6）も同様に、例（6)”のように、「事実上」を「有効な選挙運動は」の前に移動することができる。例（4)、例（5）も同様である。ただし、副詞の位置によって、それの文中での機能が変わることがある。これは副詞の作用域（「スコープ」とも呼ぶ）と関わる。

(3)’（前略）私的整理手続では、**事実上**早い者勝ちのルールが支配します。

(6)”（前略）こうすると、個人は選挙運動の最低限の権利は認められても、全部自費で、しかも限られた範囲内で運動する以外にない。**事実上**、有効な選挙運動は政党しかできないことになる。

トラウゴット&ダッシャー（2019:127）では、スコープは主として副詞、否定表現、数量詞、モダルに関わっていると述べ、副詞のスコープの例として次のようなものを挙げている。

（7）a. She ran happily.

（狭いスコープ、happily は ran を修飾する）

b. Happily,she ran.

（広いスコープ、happily は she ran という文を修飾し、話し手にもとづく表現：I am happy to say she ran.（彼女が走ってうれしい）の意味）

このように、副詞の位置とそれの果たす役割は関わりを持つことが分かる。「事実上」が修飾し、作用する範囲はその位置によって変わることがある。また、次節で詳しく説明するが、位置の移動ができるからこそ、「事実上」の機能に広がりが見られるといえる。

(5)”a.（前略）大杉を支持する研究会の参加者も次第に彼から離れていき、**事実上**研究会も崩壊していた。（プロメテウス　杉山秀子　新樹社）

b.（前略）**事実上**大杉を支持する研究会の参加者も次第に彼から離れていき、研究会も崩壊していた。（プロメテウス　杉山秀子　新樹社）

例（5)”a では、「事実上」は後続文全体「研究会も崩壊していた」を修飾しているのに対し、例（5)”b では、「事実上」は文全体「大杉を支持する研究会の参加者も次第に彼から離れていき、研究会も崩壊していた」を修飾しており、作用域の差が見られる。これはつまり、話し手／語り手の判断、認識がかかる範囲の差ということにもなる。

前後文脈の間に、話し手／語り手が発話する条件や立場を示す「事実上」のような副詞がなければ、意味的に文の内容が変わること、または前後の内容が食い違うことがあると述べたが、文において「事実上」と橋渡しのような役割を果たす接続表現とが共に現れる用例も少なくない。このような用例により、「事実上」が副詞として使用される場合に関わっている前後内容の意味的な関係と、そこにおける「事実上」の役割がよりはっきり浮かび上がってくると考えられる。

（8）竹永智恵子が突然姿を消してしまったことは、小さからぬショックだった。（中略）もちろん、それはそれとして、智恵子の父親の消息を知りたいという**思い**はあった**が**、**事実上**、敦子には、これ以上踏み込むことは不可解な状態だったのである。「分かったわ」と、敦子は言った。（人形たちの椅子　赤川次郎　朝日新聞社）

（9）郡及び県における地域検査の規定は、市町村法とは別個に**定められているが**、**事実上**、その条文の市町村の語を郡や県に置き換えただけで、内容的にはまったく同一である。（予算・財政監督の法構造　甲斐素直　信山社出版）

（10）夫が国民年金にしか加入していなくても、遺された妻にたいして支払われる年金があります。（中略）受給資格は、以下の五つです。（中略）3 結婚生活が十年以上あった。ただし、この結婚は**正式に**婚姻関係を結んでい**なくとも**、**事実上**、結婚生活を送っていた場合も認められます。（年金の疑問にズバリ！答える本　ライフ・エキスパート編　河出書房新社）

例（8）～（10）は「事実上」が「～が」「～なくても」など逆接を表す接続表現と共起している例であり、ほかに「しかし」「けど」「のに」などがある。「〈接続表現〉、事実上、」の前後内容は相反の意味的な関係をなす。このような場合における「事実上」は、「が」「しかし」などの接続表現のように強い逆接を表さずに、「…が、事実上、…。」のような形で、前に述べたことを受け、後件が話題を転ずるあるいはそれと相反する事実を述べる場合に使用されることが多い。そのため、前文脈では思い、考え、予定、規定等に関する内容がよく現れ、後文脈では事実はその通りにならず、別の状況になったという意味を表す内容がよく現れる。ただし、事実を述べる後続文としても、それは客観的な現実と異なる側面があり、話し手／語り手の判断、認識によるという条件が先行する。例えば、例（9）では、

前述内容から「郡及び県における地域検査の規定は、市町村法とは別個に定められている」という規定があると分かるが、事実という側面から見て、規定通りにはならず、「その条文の市町村の語を郡や県に置き換えただけで、内容的にはまったく同一である」という状況がある。前後の内容は規定と現実との齟齬を表すと同時に、後続内容に語り手の判断が見られる。

上記のように、「事実上」が逆接を表す接続表現と共起する場合、波線で示す後続内容は点線で示す前述内容（背景となる内容も含む）の事態に対する反論、または修正を表すと同時に、その事態に関する話し手／語り手の判断、認識を含む。「事実上」は「事実という側面から見ると／言うと」という意味を表し、話し手／語り手が判断、認識を述べる条件として先行する。

また、逆接を表す接続表現のみならず、順接を表す接続表現と共起する場合もある。

（11）大衆が、投票などの政治参加をするにしても、日常的に政権や政府・政治家、行政（政府）官僚などを批判・擁護するにしても、まずもってそれに必要な情報を必要とする。しかし、大衆自らが、そうした情報を収集するには膨大な時間と費用を要する**ため**、**事実上**、不可能である。（政治行政学講義　佐藤俊一　成文堂）

（12）二千年現在、アメリカではブタ肝細胞の人工肝臓を用いた手術が八十例以上ある。ブタ独自のウイルスが原因で病気になったという報告はないが、ブタに無害なウイルスが、ヒトにも無害という保証はない。というのも、発見されたウイルスが、ヒトに対して感染性をもつレトロウイルスだったからである。「このウイルスは核の中に入り込んでいて、取り除こうとすると細胞が死んでしまう。現段階ではそれがヒトに有害だというデータもない**から**、**事実上**、問題がないという形で進んでいる**わけです**」（船津教授）（人体改造の世紀　森健　講談社）

順接の場合、「〈接続表現〉、事実上、」の前後内容は相反する意味的な関係でなく、相関する意味的な関係をなす。

例（11）では、前述内容である「大衆自らが、そうした情報を収集するには膨大な時間と費用を要する」ということに対し、事実という側面から見ると「不可能である」という語り手の認識を述べている。波線で示す後続内容は点線で示す前述内容（背景となる内容

も含む）の事態に対する認識を表すと同時に、その事態に関する帰結という意味も持つ。

例（12）では、「事実上」に後続する内容「問題がないという形で進んでいる」の根拠として、前述内容「現段階ではそれがヒトに有害だというデータもない」があるが、「わけです」というモダリティ表現から、後続内容は話し手の「事実という側面から見て」による判断であることが分かる。また、「事実上」という副詞の使用は後続内容を強めるニュアンスが読み取れる。意味的に、点線で示す部分から分かるように、理論上、問題がないという保証はできないが、ただ有害データがないということで、事実という側面から見て、問題がないという形で進んでいる。波線で示す後続内容は点線で示す前述内容（背景となる内容も含む）の事態に対する判断を表すと同時に、その事態に対する情報の補足であるとも読み取れる。

このような用例から、「事実上」が副詞として使用されるが、意味的に前後の内容とも関わるということが分かる。

順接を表す接続表現と共起する「事実上」は、ほかに用言の連用形（中止を表す）と共起する場合がある。

（13）銃撃戦には強いが、白兵戦には弱い。民兵の弱点を露呈したともいえるが、いきなり、地形もわからぬ敵地で包囲され、パニック状態となった。この戦いで戦死者十七名、手負い六名の大損害を**出し**、**事実上**、農兵一番隊は、この一戦で壊滅状態になった。（秋田・庄内戊辰戦争　郡義武　新人物往来社）

（14）部落「ミドルクラス」の親の場合　「ミドルクラス」という言葉は、社会学の世界では主として専門的な仕事、事務的な仕事、管理的な仕事、販売に関わる仕事をしている人を指している。しかしここで分析の対象にするのは、そういう意味でのミドルクラスではない。ここでは仮に、部落家庭の中でお父さんが高卒という層を「ミドルクラス」ととらえている。というのも、部落では本来の意味でのミドルクラスに近い大卒の保護者層はきわめて**少なく**、**事実上**、高卒の保護者が部落の中では上層に位置するからである。（見えざる階層的不平等　鍋島祥郎　解放出版社）

この場合においても、「〈接続表現〉、事実上、」の前後内容は相関の意味的な関係を持ち、前述内容に対して「事実という側面から見て」という条件を先行させ、後続内容が帰結、

または情報の補足を表す。例（13）では、「この戦いで戦死者十七名、手負い六名の大損害を出し」ということで、事実という側面から見て、「農兵一番隊は、この一戦で壊滅状態になった」という語り手の判断が見られる。例（13）’の「事実上」を省略した用例と比べると、「事実上」は後続内容で示す事態を強めるニュアンスが読み取れると考える。

（13）’（前略）この戦いで戦死者十七名、手負い六名の大損害を出し、農兵一番隊は、この一戦で壊滅状態になった。

上記のように、「事実上」は「が」「ても」「しかし」など、前後の内容の**相反**を表すときに使用される接続表現と共起する場合と、または「ため」「から」「したがって」あるいは用言の連用形など、前後の内容の**相関**を表すときに使用される接続表現と共起する場合とがある。前者では、「〈接続表現〉、事実上」の前文脈で述べたこと（思い、考え、予定、規定）があるが、事実はその通りにならず、話し手／語り手の判断、認識によると、別の状況になったという反論または修正の意味を表す後件がしばしば現れる。後者では、「〈接続表現〉、事実上」の前文脈で述べたことを踏まえ、「事実という側面から見て」という条件が先行し、後続内容は前述の事態に関する帰結、またはそれに対する情報の補足を表す。「事実上」は話し手／語り手の判断、認識を述べる条件・立場を前面に出し、このような相反の関係、または相関の関係を強める役割を果たしていると考えられる。

①「〈接続表現〉、事実上」の後続内容：前述内容の成り行きへの帰結、前述内容を踏まえた情報の補足（前後相関関係）

②「〈接続表現〉、事実上」の後続内容：前述内容で表す常識、規定、あるいは話し手／登場人物の期待、思いなどに反する展開（前後相反関係）

以上、この節では、文において副詞として働く「事実上」の意味と機能の特徴について説明した。「事実上」は、述語を修飾するものとしても、文全体を修飾する文副詞としても、「（前述した内容を踏まえて）事実という側面から見ると／言うと」という意味を表し、後

続内容で表す話し手／語り手の判断、認識が出される条件を前面に示す。このことから、「事実上」は述語または後続文全体を修飾するが、前文脈とも関わるといえる。これについては、次節で検討する「事実上」の機能とも関わっているため、4.4 節で詳述する。

### 4.4　文を越えて接続詞のように振る舞う「事実上」の意味機能と性質

文中のみならず、「事実上」は文を越えて機能する場合があり、前後内容の意味的関係に関わる。ただし、実際に文を越えて機能するかどうかは、「事実上」が実際に作用する範囲と関わってくる。「事実上」が修飾し、作用する範囲はその位置によって変わることがあるが、位置の移動ができるからこそ、「事実上」の機能に広がりが見られるといえる。

本節では、「事実上」が前後の内容を関連付けようとする話し手／語り手の立場や観点を表し、前述内容を受け、後続内容に引き継ぐ働きをすることで、機能的に接続詞のように振る舞うことについて論証する。以下では、まず「事実上」が接続詞のように振る舞う場合の用法と機能、その作用域について述べる。そして、この場合における「事実上」の性質について、接続機能（順接か逆接かなど）と発話態度（客観的か主観的か）に分けて検討する。

（15）結局、先ほど紹介した公聴会での国民の声は直接に審議会に届かず、第三十八回審議会で、司法制度改革に関する「中間報告（案）」が配布された。この中にはまだ裁判員制度の文字はないものの、「（陪審・参審制度といった）特定の国の制度にとらわれることなく…我が国にふさわしいあるべき参加形態を検討する」と示されていた。**事実上**、「独自の制度を導入する」と明言したのも同じであった。（裁判員制度　丸田隆　平凡社）

（16）Q.「父と母は長年、別居状態が続いています。戸籍上はそのままでも、家を出た母は別の男性と暮らしていますし、父にも付き合っている女性がいます。**事実上**、離婚しているようなものです。もし、このままの状態で父が亡くなったとき、母には相続権はあるのでしょうか？」A.法的には、このままの状態では、別居中のお母さんに相続権はまだあります。しかも、お父さんが親しく付き合っていらっしゃる女性には、相続権はありません。（もめない相続と手続き　北村晴男　主婦と生活社）

例（15）では、前述内容「この中には…と示されていた」に対し、「事実上」に後続する

内容「「独自の制度を導入する」と明言したのも同じであった」は語り手の判断である帰結を表す。すなわち、「事実上」は「事実という側面から見ると」という意味で、その判断を出す先行条件を示す。例（16）も同様である。

なお、例（15）（16）において、点線と波線で示す部分はそれぞれ「事実上」と関わる前文脈と後文脈であるが、「事実上」に対し、どちらも必要な要素である。

接続表現の特徴として、前述内容を受け、後続内容に引き継ぐという橋渡しのような受け継ぎの役割を持つ、ということがある。拙作張（2019）では、「関係上」「立場上」「事実上」など接続表現のように振る舞う「―上」全般について、その条件と原因を検討した。そこで、「―上」は修飾部分が必要となり、且つそれが前文または前文脈にあり、単独で文頭に使用されるとき、接続詞のように振る舞うと提示している。「事実上」は、前文脈がなければ全体の情報が足りず、上記の用例で示したように、後続文全体を修飾するとともに、前文脈とも関わってくる。実際、「事実上」が文頭に位置し、完全に前文脈なしで始まる文は見当たらない。

帰結の意味のほか、情報の補足という意味を表す場合があり、また、前述内容に対する修正の意味が読み取れる用例もある。

（17）結局、張鼓峰事件では、停戦協定が成立したあと、朝鮮軍は張鼓峰、沙草峯一帯から自主的に撤退したが、間もなくソ軍は進出して強固な野戦陣地を構築した。**事実上**、そこはソ軍の領土と化した。（日本のアジア支配を考える　丸山静雄　新日本出版社）

（18）もしも、ファミレスの各メニューで大盛りをお出しできるようにしようとしたら―これはたいへんなことになります―（中略）そうなると調理を担当する者がその技術・方法を修得するまでにかかる時間も増えてしまいますし、混乱によって調理を失敗するケースも従来よりも相当増えてしまうでしょうね…以上のような理由から、各料理の大盛りをメニューに加えるということは非常に困難なことなのです。**事実上**、不可能と言った方がいいかもしれません。（ファミリーレストラン(裏）マニュアル　横田克治　データハウス）

例（17）における「事実上」と後続内容は、前述内容を踏まえた帰結の意味が全くないとは言えないが、「～と同じだ」「～のようだ」「～と変わらない」などのような帰結の意味

以上に、情報の補足という意味が強く読み取れると考える。ただし、帰結と情報の補足の間にははっきりとした境界線があるのでなく、意味的に重なっている部分があり、文脈によって両方の意味を読み取れる場合があると考えられる。

例（18）では、点線で示す前述内容が各理由をもって各料理の大盛りをメニューに加えることの難しさを説明しているのに対し、「事実上」に後続する内容「不可能と言った方がいいかもしれません」は語り手の認識、「非常に困難というより不可能と言った方がふさわしいかもしれない」というような前述内容への修正を表す。「事実上」は「事実という側面から言うと」という意味で、その認識に至る先行条件を示している。

これらの場合における「事実上」は述語や後続内容が所在する文内でなく、前述内容と後続内容を照応し、文と文の間の関係を示すこともでき、前後の一貫性に関わって働く。一貫性は、上記のように、前述内容に対する帰結、情報の補足、内容の修正などによって示される。「事実上」は前後の内容を関連付けようとする話し手／語り手の立場や観点を表すことで、前述内容を受けて後続内容に引き継ぐ働きをする。したがって、このような場合、「事実上」は機能的に、接続詞のように振る舞うといえる。

4.3 節で述べたように、「事実上」は「が」「ても」「しかし」など、前後の内容の相反を表すときに使用される接続表現と共起する場合と、「ため」「から」「したがって」あるいは用言の連用形など、前後の内容の相関を表すときに使用される接続表現と共起する場合がある。「事実上」は話し手／語り手の判断、認識を述べる条件・立場を前面に出し、このような相反の関係、または相関の関係を強める役割を果たしていると考えられ、「事実上」と後続内容とで、前述内容に対する反論・修正、または帰結・情報補足という意味を表す。接続表現のように振る舞う場合においても、「事実上」には意味的に上記のような性格が染み付いていると考えられる。ただし、「事実上」は「しかし」「が」のような逆接の接続表現と共起しなければ、強い逆接の意味を表すことが難しく、接続詞のように振る舞う場合は、後続内容と共に、前述内容の帰結、前述内容に対する情報の補足、あるいは前述内容の修正を表すことが多い。

以上、接続詞のように振る舞う「事実上」の意味的、機能的な特徴について記述してきたが、副詞の場合と同様に、「事実上」の作用域に注意する必要がある。これは「前述内容

を受けて後続内容に引き継ぐ」という働きと関わり、「事実上」が接続詞のように振る舞う条件とも関わる。なぜかというと、「…。事実上、…」のような構造になっても、前の内容を受け後の内容に引き継ぐという接続詞のような振る舞いをするとは限らないからである。

（19）監査役の選任・解任・辞任についての監査役の意見陳述権（二百七十五ノ３．２７５ノ３ノ２）（中略）この場合、監査役が本条の規定に基づいて意見を述べることができるのはもちろん、任期が満了する監査役または解任決議の対象となっている監査役が、自分が再任されないこと、または解任されることについても意見を述べることができる。**事実上**、強制されて辞任することもありうるので辞任の場合にも意見陳述権が認められている。／**事実上**、強制されて辞任することもありうるので辞任の場合にも意見陳述権が認められている。（会社法　弥永真生　弘文堂）

例（19）は作用域によって二通りの解釈ができると考えられる。「事実上」の作用域が狭いと見る場合、見た目として「事実上」は前後の内容を関連付けるようである。しかし，実は「事実上」と意味的にひとまとまりになっているのは「強制されて辞任することもありうる」という部分であり、前述内容に対する情報の補足を表すのが「～意見陳述権が認められている」までの後続文全体である。この場合、「事実上」は副詞として働く。また、「事実上」が広い作用域を持つと見る場合、「事実上」と意味的にひとまとまりになっているのが後続文全体であり、「事実上」は前の内容を受け後の内容に引き継ぎ、接続詞のように振る舞うと考えられる。

（20）小沢とともにこの日夕、国会近くの金丸事務所を訪ね、住らを説得したように「三木おろし」の時の例を引きながら、金丸を説いた。「ウン、分かった。党則が変えられるんならそれが一番いいさ」金丸はあっさりと了解した。金丸は翌日の記者会見で「首相の任期をべんべんと延ばすわけにはいかないし、政権を死に体にするわけにもいかない。そのへんを足して二で割るよう、知恵を絞るということではないか」と述べ、前日とはまるで逆のことを平然と言った。金丸はまたしても、自分の考えを平気で棄てた。この発言は大きな影響を与え、結局党則に「一年以内の期間を定めて延長することができる」との附則が盛り込まれた。**事実上**、首相の任期を決めることになる総裁任期決定の主導権を握ったのは、党の三役でも派閥の実力者でもなく、ニューリーダー側近の各派中堅だった。彼らは

絶頂期にあった中曽根に刃を向けて金丸や党の機関を動かした。梶山は「もはや、われわれが動かしていく時代だ」と誇らしげに言った。（梶山静六死に顔に笑みをたたえて　田崎史郎　講談社）

例（20）における「事実上」は広い作用域を持っており、受ける内容も引き継ぐ内容も長いものである。ここの「事実上」は、後続内容と共に前述内容への情報補足という語り手の「事実という側面から見る」認識を表す。

このように、接続詞のように振る舞う「事実上」の機能と条件を検討する際、その作用域に注意する必要がある。

次に、接続詞のように振る舞う「事実上」の性質について、具体的には接続機能（順接か逆接かなど）と発話態度（客観的か主観的か）に分けて検討する。

順接か逆接かという接続機能について、「事実上」の前述内容と後続内容が対立関係にある（対立項を持つ）かどうかという観点から考察する。前後内容の意味的関係に配慮しながら、上記の例（15）～（18）における「事実上」をほかの接続表現に置き換えてみる。

（15）’（前略）この中にはまだ裁判員制度の文字はないものの、「（陪審・参審制度といった）特定の国の制度にとらわれることなく…我が国にふさわしいあるべき参加形態を検討する」と示されていた。**ということで／それで**、「独自の制度を導入する」と明言したのも同じであった。

（16）’Q.「父と母は長年、別居状態が続いています。戸籍上はそのままでも、家を出た母は別の男性と暮らしていますし、父にも付き合っている女性がいます。**つまり／要するに**、離婚しているようなものです。（後略）

（17）’結局、張鼓峰事件では、停戦協定が成立したあと、朝鮮軍は張鼓峰、沙草峯一帯から自主的に撤退したが、間もなくソ軍は進出して強固な野戦陣地を構築した。**それで／すなわち**、そこはソ軍の領土と化した。

（18）’もしも、ファミレスの各メニューで大盛りをお出しできるようにしようとしたら―これはたいへんなことになります―（中略）そうなると調理を担当する者がその技術・方法を修得するまでにかかる時間も増えてしまいますし、混乱によって調理を失敗するケースも従来よりも相当増えてしまうでしょうね…以上のような理由から、各料理の大盛りをメニューに加えるということは非常に困難なこ

となのです。**というより**、不可能と言った方がいいかもしれません。

以上より、「しかし」「けれども」「のに」「でも」のような逆接の接続表現に言い換えられるものはない。例（18)’は前述内容への修正を表すもので、前後の接続関係が順接とは言えないが、逆接でもないことが確認できる。上記の例から分かるように、接続詞のように振る舞う「事実上」は強い逆接の意味を表しておらず、後続内容と共に、前述内容の成り行きへの帰結、前述内容を踏まえた情報の補足、または前述内容の修正を表す。つまり、接続詞のように振る舞う「事実上」の前後の内容は対立関係を持たず、逆接でなく、主として順接の接続関係をなす。

客観的か主観的かという発話態度について、「事実上」に後続する内容に主観的な意味を表すモダリティ表現が現れるかどうかで判断する。

モダリティ表現の分類と用語は研究者によって異なるが、大まかな分類として、命題に対するものと聞き手に対するものがある。

例（16）では、「**事実上**、離婚しているようなものです。」のように、「事実上」は認識的モダリティ表現「ものだ」を含む後続文と共起している。例（18）では、「**事実上**、不可能と言った方がいいかもしれません。」のように、「事実上」は当為評価のモダリティ表現「ほうがよい」を含む後続文と共起している。両方とも命題に対する話し手の判断を表す。このほか、相手に対する働きかけではないが、問いかけ、確認などの意味が読み取れ、聞き手に対するモダリティ表現を含む後続文と共起する場合がある。この場合、前後内容の話者交替がよく見られ、後続内容の話し手から前述内容の話し手への確認など、主観的なニュアンスが読み取れる。

（21）（前略）代表的には、千九百七十一年のテヘランの協定といったふうなものが最近に見ますOPECの動きのいわばスタートポイントであったというふうなことが言えるのではないかと思います。そういうふうなことで、六十年代の世界の石油の情勢を考えますと、産油国各国は国有化等を逐次進めるというふうな方向で進んでおりまして、いわばメジャーの支配が次第に後退していった時代というふうな把握の仕方ができるのではないかと思います。この一つの指標としまして、たとえばわが国が外

国から原油を入れます場合にどういうルートで入れているかという数字を見ますと、昭和四十七年度には七十一％が米英系の企業から入れておりました。しかしながら、五十年度にはそれが六十一.四％まで下がっておるというふうな形でございまして、いま言ったような傾向がこういう形で逐次具体化してきているというふうな考え方がとれるのではないかというふうに思います。**○立木洋君　事実上**、いま言ったようにメジャーが一定の打撃を受ける、つまり支配権が揺らいで後退していくという状態が生じてきた。**しかし**、国際石油資本というのはそれに甘んじて後退をし続けたのではなくて、そうであればあるほど、いわゆる進出をして支配を強めていく、そういう状態を彼らは目指したと思うんですね。（中略）。**○政府委員（古田徳昌君）**OPEC が中東諸国を中心にしまして、産油国の資源主権を主張し始めるというふうなことで、産油国におきます利権、あるいはその他の契約関係の条件がだんだん悪くなる（後略）（国会会議録）

例（21）は『国会会議録』の用例であり、「○立木洋君」「○政府委員（古田徳昌君）」が話者の交替を示すものである。ここで接続詞のように振る舞う「事実上」は前述内容の帰結を表しながら、自分なりの判断としての確認を前述内容の話し手である相手に告げる。

このように、接続詞のように振る舞う「事実上」はモダリティ表現が後続し得るため、主観的な発話態度を持つ接続表現であると考えられる。

以上、この節では、接続詞のように振る舞う「事実上」について、作用域の広狭による「事実上」の性質の違いに関する説明を含め、その意味機能と性質を記述し、検討した。文頭／段落頭／対話の最初に来る「事実上」は「事実という側面から見ると／言うと」という意味を表し、前後の内容を関連付けようとする話し手／語り手の立場や観点を表すことで、前述内容を受けて後続内容に引き継ぐ働きをする。「事実上」は後続内容と共に、前述内容の成り行きへの帰結、前述内容を踏まえた情報の補足、あるいは前述内容の修正を表し、主に順接で主観的な表現として前後の一貫性に関わって働く。

### 4.5　「事実の上」「事実」と異なる側面を持つ「事実上」

「事実上」と類似する表現として、「事実の上（うえ）」（以下「事実の上」と記す）と「事実」がある。「事実上」は両者と意味的にも機能的にも共通点を持つ一方、両者と異なる側

面も持つ。したがって、「事実の上」「事実」と比較することで、「事実上」の性格がよりはっきり浮かび上がってくると考えられる。

以下、本節では、まず関連する先行研究を紹介し、「事実上」と「事実」、「事実の上」の概況について述べたうえで、意味的に共通点を持つ「事実上」と「事実の上」、機能的に共通点を持つ「事実上」と「事実」について記述する。そして「事実の上」「事実」と異なる性質を持つ「事実上」のあり方について検討する。更に、談話標識化と主観化の側面から「事実の上」と「事実」に見られない「事実上」の特質について論じる。

「事実上」特に「上（じょう）」に関する先行研究は、4.2 節で述べたとおりである。「事実の上」に関する論考は見当たらず、「事実」の意味用法について言及しているものとして寺村（1992）と三枝（2013）がある。

寺村（1992）では、意味的には、内の関係では「私ガソノ時聞イタ**音**」のように、修飾部は底の名詞を単に特定化するための情報を付加するもので、底の中味については何事も語らないのに対し、外の関係では、「樹ノ枝ガ冷気で折レル**音**」のように、修飾部は底の名詞の中味、内容を語るために存在すると説明している。「事実」は内容の修飾節をとる名詞であり、後者に属するものであると提示している。

三枝（2013）では、「実際、事実、勢い、結果」という 4 つの語を取り上げ、もともと格を取る名詞として使用されるものが副詞的に使用される場合、接続詞的な用法が見られる場合について説明している。前文脈なしに「事実、」「実際、」から文がはじまるのは不自然で、前文 X は不可欠であると述べ、「実際、事実」は前文の一側面を後続文で示すと説明している。「X 事実、Y」は、X の証拠を Y にあげるという標識で、「その証拠に」といった意味に近いと述べ、次のような例を挙げている[40]。

(22)「そば博覧会」という全国規模のイベントを開催するには、いささか小規模な集落である。{事実・実際}、人口 4000 人の過疎地帯である。

(23)…たちまちマラリアの患者数は増加することが考えられる。{事実・実際}、そのようなことは各地で観察されている。

[40] 三枝（2013：54）にある用例であり、例文番号は本稿の通し番号である。

現代日本語書き言葉均衡コーパス（中納言）で三者の用例を収集したところ、次のような使用実態の差があることが分かった。

・「事実」の用例：13689 件

・「事実上」の用例：1424 件

・「事実の上」の用例：10 件

全体的な用例の概況として、「事実」は普通、名詞として多様な格助詞と共起し、使用されるが、三枝（2013）の考察によると、「事実」は名詞から副詞、そして接続詞のように振る舞う場合がある。また、上述したように、「事実上」は「事実という側面から見ると／言うと」という意味を表し、普通、副詞として文中で働くが、使用環境によって接続詞のように振る舞う場合がある。「事実の上」はこの二者と比べると、用法が単純であり、「事実という側面において」という意味で、文中において格助詞と共起し、使用される。このような用法の多様性における差が使用実態の差をもたらすと考える。

三枝（2013）で述べているような「前文の一側面を後続文で示す」という証拠を挙げる用法と、本稿で提示している「事実という側面から見る／言う」という判断・認識の立場、条件を前面に出す用法とは、違うものであると考えられる。三枝（2013）の提示する接続詞用法を持つ「事実」と、本稿で提示する接続詞のように振る舞う「事実上」にはどのような共通点と相違点があるか、「事実上」で語るときに何を語り、それは本当に事実であるのか等について、以下、「事実上」を「事実」「事実の上」と対照しながら、検討する。

相違点を検討する前に、まず、「事実上」と意味的に共通点を持つ「事実の上」について見てみる。

（24）およそこの新植民地の事業は、祖国に刺激を与えて、その治績の成功をもって祖国の腐朽―老朽を防ぐということは見聞しておるが、**事実の上**にかくのごとき事を見るを得たるは満足するところであります。独り私の満足のみならず、諸君においても満足せらるるであろう。（正伝・後藤新平　鶴見祐輔　藤原書店）

（25）今世間の通用に紙幣と金銀貨とを比較して、その通貨たる功能に於ては少しも差別なしとして、**事実の上**に孰れか便利なるやと尋るに、紙幣の方に便利多しと云わざるを得ず。（福澤諭吉著作集　福澤諭吉著・小室正紀編　慶応義塾大学出版会）

これらの例から分かるように、「事実の上」は文中で後続する述語の補語成分として働く。例（26）における「事実上」も同様である[41]が、「事実上」の方は普通、副詞として働くため、このような用法が稀にある。

（26）直接経験の立場は神に通ずる道を直下に含んでいる。それについて著者の言葉を聞こう。「然らば我々の直接経験の**事実上**に於て如何に神の存在を求むることができるか。（後略）（西田幾多郎　西谷啓治　河出書房新社）

（26）’直接経験の立場は神に通ずる道を直下に含んでいる。それについて著者の言葉を聞こう。「然らば我々の直接経験の**事実の上**に於て如何に神の存在を求むることができるか。（後略）

例（26）’のように、意味的に似通っているため、文中で述語を修飾し働く場合、例（26）における「事実上」は「事実の上」に言い換えられる。

上記のように、「事実という側面において」という意味を表すことで、「事実上」と「事実の上」とは意味的な共通点がある。

次に、「事実上」と機能的に共通点を持つ「事実」について述べる。

「事実上」と「事実」は、文を越えて、「……。事実上、……」「……。事実、……」のように似通った構造で、前の内容を受け後の内容に引き継ぎ、接続詞のように振る舞う場合がある。

（27）（前略）つまり、森は三度、その姿を変えると予測された。最初は陽樹のマツ類中心の森、つぎがより耐陰性のある針葉樹を主体とする森、最後に常緑広葉樹の森になって安定する。**事実、**神宮の森は、その予測どおりに移り変わってきた。（日本の美林　井原俊一　岩波書店）

（28）いろいろな品種どうしの雑種の不稔性を調べているうちに、加藤博士はたくさんの品種の類縁関係が、雑種の稔性でわかるのではないかと考えるようになった。両親の縁が遠くなればなるほど、その

[41] 「事実」の前に修飾部分が来る場合がある。このような場合においても、「（修飾部分で表す事態）という事実の側面」という意味は変わらない。

間にできる雑種不稔性の程度が大きくなると考えるのは、ある意味で自然である。**事実、**ショウジョウバエやいろいろな植物にはそういうケースも多く知られている。（DNA が語る稲作文明起源と展開　佐藤洋一郎　日本放送出版協会）

（18 再掲）もしも、ファミレスの各メニューで大盛りをお出しできるようにしようとしたら―これはたいへんなことになります―（中略）そうなると調理を担当する者がその技術・方法を修得するまでにかかる時間も増えてしまいますし、混乱によって調理を失敗するケースも従来よりも相当増えてしまうでしょうね…以上のような理由から、各料理の大盛りをメニューに加えるということは非常に困難なことなのです。**事実上**、不可能と言った方がいいかもしれません。（ファミリーレストラン(裏)マニュアル　横田克治　データハウス）

例（27）と（28）において、「事実」は、波線で示す後続文と共に、点線で示す前述内容の証拠となる説明を表す。ここの「事実」は前の内容を受け後の内容に引き継ぎ、全体の一貫性に関わって働くという点で、例（18）における接続詞のように振る舞う「事実上」と機能的に同様である。

また、品詞の面からみて、普通「事実上」は副詞として、「事実」は名詞として使用されるため、言い換えられるかどうかは文中での位置と現れる形にも関わる。

（3 再掲）（前略）このような債権者平等の理念・労働債権の優先的地位が現実のものとなるのは、法的整理の手続においてのみであり、私的整理の手続では、多くの場合、これらの理念は無視されることが多いのです。私的整理手続では、早い者勝ちのルールが**事実上**支配します。そこで従業員は、迅速に手段を講じ、そのような私的整理の手続の中においても早い者勝ちのルールの中での勝者となるように努める対策をしようとします。

（(3)’再掲）（前略）私的整理手続では、**事実上**早い者勝ちのルールが支配します。（後略）

(3)”（前略）**事実上**、私的整理手続では、早い者勝ちのルールが支配します。（後略）

（3 再掲）’○（前略）このような債権者平等の理念・労働債権の優先的地位が現実のものとなるのは、法的整理の手続においてのみであり、私的整理の手続では、多くの場合、これらの理念は無視されることが多いのです。**事実**、私的整理手続では、早い者勝ちのルールが支配します。（後略）

4.3 節で述べたように、作用域の差があるが、副詞として働く「事実上」は文中での位置の移動が可能である。「事実」になると、そうではない。三枝（2013）でで言及しているが、もともと「事実」は名詞として使用されるため、副詞のように働く場合は「事実、……」のような独立副詞の形で現れる。独立副詞のような形ではないと、「事実」の名詞としての性格が薄まりにくいと考えられる。そこで、例（3）と（3)’のような場合において、「＊私的整理手続では、早い者勝ちのルールが**事実**支配します」「＊私的整理手続では、**事実**早い者勝ちのルールが支配します」[42]で示しているように、「事実上」を「事実」に言い換えられない。これらに対し、例（3)”のような場合、例（3 再掲)’のように言い換えられる。

このように、「事実の上」と「事実」は、「事実上」とそれぞれ意味的、機能的に共通点を持つ。普通、文中で補語として使用される「事実の上」は「事実上」と意味的な共通点を持ち、「事実という側面において」という意味を表す。また、文頭／段落頭／対話の最初に来る「事実」は機能の面において、同じ位置に現れる「事実上」と同様に、前述内容を受けて後続内容に引き継ぎ、前後の一貫性に関わって働く。

では、意味的な面から見て、「事実」と「事実上」はどうなるか。

まず、両者の言い換え状況から検討する。

同じく接続詞のように振る舞うことがある「事実上」と「事実」は前述内容に対する後続内容のあり方とニュアンスに違いがあると考えられる。例（4）と例（18）における「事実上」を「事実」に置き換えて比べてみよう。

（4 再掲）政策情報は既存の情報・知識を補完し、修正可能なものでなければならない。ある時期・ある状況・ある問題に適用するために収集した情報をすべての問題に対し常に適用することは、**事実上**不可能である。（図書館情報政策　金容媛　丸善）

（4 再掲)’**？** 政策情報は既存の情報・知識を補完し、修正可能なものでなければならない。**事実、**ある時期・ある状況・ある問題に適用するために収集した情報をすべての問題に対し常に適用することは、

[42] 「＊」は不適切を示す。

不可能である。[43]

例（4）における「事実上」の文中の位置を変えると、例（4 再掲）’のように「事実」に言い換えられるが、意味的な違い、ニュアンスの違いに注意する必要がある。例（4）において、「事実上」に後続する内容である「（ある時期・ある状況・ある問題に適用するために収集した情報をすべての問題に対し常に適用することは、）不可能である」は「事実という側面から見ると（理想、予定などの側面から見るとそうではないかもしれないという意味が潜在的に存在する）」という条件が先行し、点線で示す前述内容に対する語り手の判断と認識を表す。これに対し、例（4 再掲）’において、「事実」は「確かに（事実として）」というような意味を表し、後続内容は前述内容の証拠として存在する。

（18 再掲）’＊ もしも、ファミレスの各メニューで大盛りをお出しできるようにしようとしたら―これはたいへんなことになります―（中略）そうなると調理を担当する者がその技術・方法を修得するまでにかかる時間も増えてしまいますし、混乱によって調理を失敗するケースも従来よりも相当増えてしまうでしょうね…以上のような理由から、各料理の大盛りをメニューに加えるということは非常に困難なことなのです。**事実**、不可能と言った方がいいかもしれません。

（18 再掲）”もしも、ファミレスの各メニューで大盛りをお出しできるようにしようとしたら―（中略）…以上のような理由から、各料理の大盛りをメニューに加えるということは非常に困難なことなのです。**事実**、各料理の大盛をメニューに加えるファミレスは見当たらない。

例（18 再掲）’を見ると、後続内容である「不可能と言った方がいいかもしれません」が「事実」という語の後に現れにくいことが分かる。これは、例（18）において、「事実上」に後続する内容は前述内容に対する話し手の修正になり、主観的な意味を持ち、客観的に表しにくいためであると考えられる。上述したように、「事実」は「X 事実、Y」のような用法において、X の証拠を Y にあげるという標識で、「その証拠に」といった客観的な意味に近い性質を持ち、例（18 再掲）”のように用いることができる。後続内容にモダリティ表現が現れることの多い「事実上」は認識の副詞として使用されるのに対し、事態また

[43] 「？」は言い換えられるが、意味的に違いがあることを示す。

は状態に関する叙述が後続する「事実」は事柄の副詞として使用される。

このように、「事実上」に比べ、「事実」が使用される場合はより客観的な叙述の意味が読み取れ、「事実という側面から見ると」という話し手／語り手による主観的な判断・認識のニュアンスがなくなっていると思われる。この点は次の例でより明白である。

上記は「事実上」を「事実」に言い換えられるかどうかに関する検討であるが、逆の場合も両者の意味的な、ニュアンスの違いが読み取れる。

(22)’「そば博覧会」という全国規模のイベントを開催するには、いささか小規模な集落である。**事実上**、人口 4000 人の過疎地帯である。

(23)’…たちまちマラリアの患者数は増加することが考えられる。**事実上**、そのようなことは各地で観察されている。

例（22)’と（23)’における「事実上」は後続内容と共に、「事実という側面から見ると」という語り手の判断という条件が先行し、前述内容への情報補足の意味が読み取れ、「事実」の場合における前述内容への客観的な証拠の提示という意味とは異なるところがあると考えられる。「事実」の場合と比べ、語り手による主観的な判断のニュアンスが加わっていると考えられる。

接続詞のように振る舞う場合のみならず、副詞として働く場合においても、両者に意味的なニュアンスの違いがあることが分かる。

4.3 で述べたように、副詞「事実上」に修飾される述語はよく話し手／語り手の判断、認識を表し、「事実上」はこのような判断、認識を述べる出発点となる条件を前面に出す。つまり、「事実上」が修飾する部分は述語であるが、前述内容と無関係ではなく、意味的に関わっている。そのため、「事実上」がないと、意味的に文の内容が変わること、または前後の内容が食い違う箇所が現れることがある。また、「接続表現、事実上」の前文脈で述べたこと（思い、考え、予定、規定）があるが、事実はその通りにならず、話し手／語り手の判断、認識によると、別の状況になったという反論または修正の意味を表す後件がよく現

れるということで、「事実上」はある現実と齟齬がある場合においても使用できる。

(29)「それにしても不思議なのは、沢松美穂子と松坂恵が至近距離で犯人を目撃している**にもかかわらず**、**事実上**、何も見ていないということだ」ますます激しくなった外の雨に目をやりながら、朝比奈耕作は言った。(「伊豆の瞳」殺人事件　吉村達也　徳間書店)

(9 再掲) 郡及び県における地域検査の規定は、市町村法とは別個に**定められているが**、**事実上**、その条文の市町村の語を郡や県に置き換えただけで、内容的にはまったく同一である。

(10 再掲) 夫が国民年金にしか加入していなくても、遺された妻にたいして支払われる年金があります。(中略) 受給資格は、以下の五つです。(中略) 3 結婚生活が十年以上あった。ただし、この結婚は**正式に**婚姻関係を結んでい**なくとも**、**事実上**、結婚生活を送っていた場合も認められます。

この 3 例においては、前述するある現実、規定などと相反することを後続内容が表す。上述したように、「事実上」は話し手／語り手の判断、認識を述べる条件・立場を前面に出し、このような相反の関係、または相関の関係を強める役割を果たしていると考えられる。前述内容の証拠として後続内容を取り込むという「事実」の用法とは、異なる用法であると考えられる。しかし、「事実」の場合、前後内容が対照的なものが存在しないわけではないが、「事実上」のような、「事実という側面から見るとそうであるが、現実、理想、予定などの側面から見るとそうではないかもしれない」という潜在的に存在する意味はないと考えられる。この点については、「事実の～」と「事実上の～」のような、名詞あるいは動詞の語幹と共起する場合から見ても分かる。

・「事実の確認」「事実の調査」「事実の報道」など
・「事実上の親」「事実上の死亡」「事実上の管理会社」など

「事実の～」の場合、多くは「確認」「調査」「報道」などのような漢語動名詞の語幹と共起するのに対し、「事実上の～」の場合は「親」「死亡」「管理会社」などのような名詞と共起することが多く、事実という側面以外のある側面と、潜在的に対照的になっているニュアンスが読み取れる。

このように、前述内容と後続内容を関連付け、前後の一貫性に関わって働くものとして、「事実」は後続内容と共に「客観的な事柄の叙述」を、「事実上」は後続内容と共に「事柄に対する主観的な把握」を表すと考えられる。

以上、「事実上」と「事実」、「事実の上」とは共通点を持つと同時に、相違点も有することを述べた。特に、「事実」と「事実上」の間である。4.4 節で述べたように、接続詞のように振る舞う「事実上」はモダリティ表現が後続し得るため、主観的な発話態度を示す接続表現であると考えられる。また、「事実上」は後続内容と共に、話し手／語り手の判断・認識が先行し、前述内容の成り行きへの帰結、前述内容を踏まえた情報の補足、あるいは前述内容の修正を表す。これに対し、「事実」は前文の一側面である証拠を後続文に挙げ、「その証拠に」といった意味に近いかたちで、後続内容と共に、実際に起きた／存在している事柄を示す。「事実上」の各意味用法のうち、前述内容を踏まえた情報の補足を表す場合、「事実」に言い換えられるが、両者には主観性と意味的なニュアンスの違いがあると考えられる。

「事実」と「事実の上」を対照することで、「事実上」の性格がよりはっきり浮かび上がってきたと考えられるが、その特質は他にもある。

寺村（1992）では、「事実」は内容の修飾節をとる名詞であると提示され、拙作張（2019）では、「—上」は修飾部分（「句の包摂」現象による修飾）が必要となり、且つそれが前文または前文脈にあり、単独で文頭に使用されるとき、接続詞のように振る舞うと提示している。しかし、「事実上」の場合、更に用法の広がりがあると考えられる。

（16 再掲）Q.「父と母は長年、別居状態が続いています。戸籍上はそのままでも、家を出た母は別の男性と暮らしていますし、父にも付き合っている女性がいます。**事実上**、離婚しているようなものです。もし、このままの状態で父が亡くなったとき、母には相続権はあるのでしょうか？」（後略）

（17 再掲）結局、張鼓峰事件では、停戦協定が成立したあと、朝鮮軍は張鼓峰、沙草峯一帯から自主的に撤退したが、間もなくソ軍は進出して強固な野戦陣地を構築した。**事実上**、そこはソ軍の領土と化した。

（18 再掲）もしも、ファミレスの各メニューで大盛りをお出しできるようにしようとしたら―これはたいへんなことになります―（中略）そうなると調理を担当する者がその技術・方法を修得するまでにかかる時間も増えてしまいますし、混乱によって調理を失敗するケースも従来よりも相当増えてしまうでしょうね…以上のような理由から、各料理の大盛りをメニューに加えるということは非常に困難なことなのです。**事実上**、不可能と言った方がいいかもしれません。

4.4 で述べたように、例（16）、例（17）、例（18）は、それぞれ「事実上」が後続内容と共に、前述内容の成り行きへの帰結、前述内容を踏まえた情報の補足、または前述内容の修正を表すものであるが、これらの意味を表す「事実上」は全てが同様に使用されるのではなく、前述内容と後続内容の意味的関係によって、異なる性質を持つと考えられる。例（16）と例（17）において、点線で示す前文脈は内容的に「事実上」の「事実」の部分を修飾し、「事実」の具体的な中身として存在する。後続内容は「～のような事実」という具現化した事実の側面からみる話し手／語り手の判断、認識を表すものである。これに対し、例（18）は質が異なるものと考えられる。前述内容で示す「……ことは非常に困難なことだ」という事実が先行し、後続内容の「不可能と言った方がいいかもしれません」ということは成り行きとして現れにくいからである。この場合における「事実上」は、例（16）、例（17）の場合とは異なり、「というより」のような意味が読み取れ、直接事実の中身と関わるというより、前述内容の修正に対する話し手の主観的な認識を示すと考えられる。

トラウゴット&ダッシャー（2019:196）では、「談話標識機能を持つ副詞の発展」において、談話標識化の用法として、「真実と関わる点でなく、談話のレベルにおいて、談話の適正に対する話し手の態度を示す」と述べている。この視点から見ると、例（18）における「事実上」は談話標識の用法に近いと考えられる。

接続詞のように振る舞う「事実上」は、前述内容を受けて後続内容に引き継ぐという橋渡しのような機能を持っているが、談話という視点から見ても同様であり、前方照応（anaphoric）と後方照応（cataphoric）の談話機能を持っていると考えられる。このような機能を持つ「事実上」の談話における構造は以下のようなものである。

図 1　「事実上」の談話における構造

| | | |
|---|---|---|
| ［……、／……。 | **事実上、** | ……。］ |
| （前述内容で示す情報） | （帰結・補説・修正などの導入） | （話し手の判断・認識などの見解） |

前述内容を踏まえた帰結であっても、前述内容の補足または修正であっても、「事実上」は後続内容と共に、新しい情報を取り込むことで、前後の一貫性に関わって働く。特に前述内容の修正の場合、事実の中身と直接関わっているというより、前述内容の修正に対する話し手の主観的な態度を示すことで、談話標識に近づいているといえる。また、先行する条件として、話し手／語り手の観点、認識を強める役割を果たしているとも考えられる。

「事実」は後続内容と共に「客観的な事柄の叙述」を、「事実上」は後続内容と共に「事柄に対する主観的な把握」を表すと述べたが、これは「主観化」という観点と関わる「事実上」の特質である。

トラウゴット&ダッシャー（2019:186-192）では、indeed の歴史的な発展を主に事柄の副詞、認識の副詞、談話標識の 3 つに分け、説明した。認識の副詞としての indeed は事柄の副詞の場合に現れない文の真実性に対する話し手・書き手の姿勢を表す。また、談話標識として使用される indeed の主要な機能は、what's more（さらに）のような追加を表すことができ、前に述べた事態よりもこれから述べる事態の方が、修辞的議論に付け加えるものとして、その状況において適切であるという話し手・書き手の意図を示すことであるとした。このような認識副詞の発展について、トラウゴット&ダッシャー（2019:203）では、話し手・書き手がその副詞によって、発言の真実性に対する明確な意思表示をすることによる、主観化の例であると述べている。また、談話標識への発展は話し手・書き手の前言に対する修辞的姿勢が強められ、これを主観性の増加であると述べている。

「事実上」は文中で副詞として働く場合においても、文を越えて接続詞のように振る舞う場合においても、後続内容で表す話し手／語り手の判断、認識に先行する「事実という側面から」という立場、条件を示す。また、上記のように、「事実上」が談話標識に近づく一面もあることで、「事実上」の特質として、主観性と主観性の増加が見られると考えられる。

以上、本節では、「事実上」と意味的に共通点を持つ「事実の上」、機能的に共通点を持つ「事実」について、そして「事実の上」「事実」と異なる性質を持つ「事実上」のあり方について検討した。また、「事実の上」と「事実」に見られない、談話標識に近づく一面を持ち、主観性と主観性の増加が見られる「事実上」の特質について論じた。

意味的、機能的に共通点を持っているのに、なぜこのような違いが生じるかについては、「事実」と「事実の上」にはない、「事実上」における接尾辞「上（じょう）」の意味機能と関わると考え、次節で検討する。

### 4.6　「事実上」の各意味機能の関連性と接尾辞「上（じょう）」の働き

上記のとおり、副詞として使用される「事実上」と接続詞のように振る舞う「事実上」との間にははっきりとした境界線がなく、多くの場合、「事実上」の位置によって互換できる。ただし、副詞は位置によってその作用域、機能が変わる。「事実上」の機能はそれが働く具体的な言語の環境によって多様な側面を持つ。例（6）と例（6）”で示しているように、副詞として働く「事実上」が文頭に来て、前述内容を受け、その作用域が後続文全体にかかると、「事実上」は接続詞のような振る舞いが見られる。

（6 再掲）小選挙区制の趣旨からいえば、選挙運動の手段はすべて政党に与え、政党だけが選挙運動を行えるようにした方がよい。しかし、個人の選挙運動を全面禁止すると憲法に違反することになるので、最低限の手段は個人にも認めざるを得ない。（中略）こうすると、個人は選挙運動の最低限の権利は認められても、全部自費で、しかも限られた範囲内で運動する以外にない。有効な選挙運動は**事実上**、政党しかできないことになる。この措置は、資金力のある政党や候補者が有利に選挙運動を展開するのを防ぎ、かつ、公認漏れになった候補者が無所属で立候補する道を閉ざすためだ。

（(6)”再掲）（前略）こうすると、個人は選挙運動の最低限の権利は認められても、全部自費で、しかも限られた範囲内で運動する以外にない。**事実上**、有効な選挙運動は政党しかできないことになる。

この例は、「事実上」の各意味機能の間には関連性があることの説明に有益なものである。当然、この関連性は上記のような位置による言い換えのみならず、意味的にも、機能的にも窺える。副詞として働く場合と接続詞のように振る舞う場合とには関連性があり、一部

共通している意味、機能がある。

4.3 節では、文中で副詞として働く「事実上」について、4.4 節では、文を越えて接続詞のように振る舞う「事実上」について、意味、用法と機能を記述し、検討した。

「事実上」は、述語を修飾するものとしても、文全体を修飾する文副詞としても、「（前述した内容を踏まえて）事実という側面から見ると／言うと」という意味を表し、後続内容で表す話し手／語り手の判断、認識が出される条件を前面に示す。このことから、「事実上」は述語または後続文全体を修飾するが、前文脈とも関わるといえる。また、「事実上」は「が」「ても」「しかし」など、前後の内容の相反を表すときに使用される接続表現と共起する場合と、「ため」「から」「したがって」あるいは用言の連用形など、前後の内容の相関を表すときに使用される接続表現と共起する場合があり、このような相反の関係、または相関の関係を強める役割を果たしていると考えられる。この場合の「事実上」は後続内容と共に、前述内容に対し、反論・修正、または帰結・情報補足という意味を表す。接続表現のように振る舞う場合においても、「事実上」には意味的に上記のような性格が染み付いていると考えられる。ただし、「事実上」は「しかし」「が」のような逆接の接続表現と共起しなければ、強い逆接の意味を表すことが難しい。

文頭／段落頭／対話の最初に来て接続詞のように振る舞う「事実上」は「事実という側面から見ると／言うと」という意味を表し、前後の内容を関連付けようとする話し手／語り手の立場や観点を表すことで、前述内容を受けて後続内容に引き継ぐ働きをする。この場合における「事実上」は後続内容と共に、前述内容の成り行きへの帰結、前述内容を踏まえた情報の補足、または前述内容の修正を表し、主に順接で主観的な表現として前後の一貫性に関わって働く。

このように、「事実上」の各意味用法の間には、「事実という側面から見ると／言うと」という意味的な共通点、後述内容と共に前述内容の帰結、補足または修正を表し、前後の内容の一貫性と関わるという機能的な共通点がある。

また、4.5 節で論じた「事実上」と「事実」との比較から分かるように、「上（じょう）」がないと、使用できる文脈と果たす機能が変わる。「事実上」における接尾辞「上（じょう）」は「ある側面から見ると／言うと」という意味を表し、それなりの働きと存在する意義が

ある。

秋元（1994）では、「上（じょう）」は結合する語に後接し、それをぼかして表現し、書き手（話し手）が断定を避け、緩和させるような漠然化する働きがあると指摘している。このような働きを持つ原因は、「ある側面から見ると／言うと」という意味を表す「上（じょう）」にあると考えられる。漠然化するというより、ある側面を先行する条件として前面に出すと共に、ほかの側面も背後に潜在的に有し、これによって話し手／語り手が表現したい判断、認識といった内容を「限定」する。「ある側面から／この立場に限って、そう言える」という意味を表すため、婉曲で、完全な断定を避ける用法を持つことができると考えられる。

トラウゴット&ダッシャー（2019:178）では、副詞が使われている言語では、副詞が節内の副詞（述語副詞）から文副詞になり、最後には談話標識（接続副詞）になるという圧倒的傾向があると述べている。「事実上」は節内の副詞、文副詞、接続のように振る舞うなど実に多様な用法があり、理論上、各用法の間にトラウゴット&ダッシャー（2019）で提示する傾向があるといえるかもしれない。しかし、本稿は現代日本語における「事実上」を取り上げ、共時的な視点から各意味機能の関連性について記述するため、派生の過程と拡張の方向や傾向は問わない。これらの間に貫くものとして、どのような意味的な共通点、機能的な共通点があるかについて明らかにすることが醍醐味である。すなわち、仕組みに注目するのである。

### 4.7　まとめと今後の課題

本稿は現代日本語における「事実上」という語を取り上げ、その意味と機能を記述し、以下の点を明らかにした。

①「事実上」は副詞として働く場合と接続詞のように振る舞う場合があり、また、談話のレベルにおいて、談話標識に近づく場合もある。これらの用法の間には関連性はあるものの、はっきりとした境界線がなく、「事実上」の機能はそれが働く具体的な言語の環境によって多様な側面を持つ。

②文中で副詞として働く「事実上」は、述語を修飾するものとしても、文全体を修飾する文副詞としても、「(前述した内容を踏まえて）事実という側面から見ると／言うと」という意味を表し、後続内容で表す話し手／語り手の判断、認識が出される条件を前面に示す。また、接続表現と共起し、前後内容の相反の関係、または相関の関係を強める役割を果たす。

・前後内容と相関する関係：「接続表現、事実上」は後続内容と共に、前述内容の成り行きへの帰結、前述内容を踏まえた情報の補足を表す。

・前後内容と相反する関係：「接続表現、事実上」は後続内容と共に、前述内容で表す常識、規定、あるいは話し手／登場人物の期待、思いなどに反する展開を示し、反論または修正を表す。

③接続詞のように振る舞う「事実上」は「事実という側面から見ると／言うと」という意味を表し､前後の内容を関連付けようとする話し手／語り手の立場や観点を表すことで、前述内容を受けて後続内容に引き継ぐ働きをする。「事実上」は後続内容と共に、前述内容の成り行きへの帰結、前述内容を踏まえた情報の補足、または前述内容の修正を表し、主に順接で主観的な表現として前後の一貫性に関わって働く。

④「事実上」と意味的に共通点を持つ表現として「事実の上」が、機能的に共通点を持つ表現として「事実」があるが、「事実上」はこれらと異なる性質も持ち、「事実の上」と「事実」に見られず、談話標識に近づく一面があり、また、主観性と主観性の増加が見られる。

⑤「事実上」の各用法の間には、「事実という側面から見ると／言うと」という意味的に共通している点、後述内容と共に前述内容の帰結、補足または修正を表し、前後の内容の一貫性と関わるという用法に共通している点がある。また、「事実上」に「ある側面から見ると／言うと」という意味を表す接尾辞「上（じょう)」があるため、「ある側面から／この立場に限って、そう言える」という意味を表し、婉曲で、完全な断定を避ける用法を表すことができると考えられる。

以上、「事実上」の各意味と機能のあり方、その間の関連性、意味的な共通点と機能的な共通点について論じたが、「関係上」「立場上」など、ほかの「―上」にもそれぞれの個性があり、それらに関する個別考察は今後の課題とする。

また、中国語の中にも「事実上」という語があり、日本語の「事実上」と同様に、文中で副詞として働き、「事実という側面から見ると／言うと」という意味を表し、後続する内容である話し手／語り手の判断、認識の先行条件を示すことができる。また、前の内容を受け後の内容に引き継ぎ、接続詞のように働くことがある。

(30)（前略）最后我想感谢我的父母和妻女。我曾经和朋友说，应该这样来写这本书的献词："献给我的女儿，如果没有你，这本书会提前五年出版。"这当然是玩笑之语。**事实上**，正是因为有了她，让我更加确定幸福是可能的，也正因为此，愈发认识到为了使幸福可能，就必须确保正义是可能的。（周濂　正义与幸福）

**訳文：**最後になるが、両親、妻と娘に感謝の意を表したい。「娘に捧げる。君がいなければ、この本は五年前に出版されるはずだった。」とこの本の献辞を書くべきだと友達に言ったことがあるが、当然、冗談のつもりで言った。**事実上**、娘がいるからこそ、幸福は可能なことだと確認できたし、そして、幸福を可能なことにするには、まず正義の可能性を確保することが必要だと気付いてきた。

(31) 语言学研究中跨学科的倾向也是现代科学技术发展的必然。长期以来，人们把语言和技术看作是风马牛不相及的。**事实上**，没有技术就没有现代意义的语言。（後略）（北京大学 CCL 语料库[44]　\当代\CWAC\ALJ0044.txt）

**訳文：**言語学研究における学際的研究の傾向も現代科学技術発展の必然となる道である。長い間、言語と技術は互いに全く無関係であるものだと見られてきた。**事実上**、技術がなければ、現代意義上の言語がない。

ただし、面白いことに、接続詞のように振る舞う日本語の「事実上」は後続内容と共に、

[44] 北京大学中国语言学研究中心（CCL）语料库　http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus（日本語訳：北京大学 CCL コーパス）

前述内容の成り行きへの帰結、前述内容を踏まえた情報の補足、または前述内容の修正を表すのに対し、用例の観察と筆者の母語の内省による確認において、中国語における「事実上」はこれらすべての意味を持つわけではない。上記の 2 例で示しているように、中国語における「事実上」は主として後続内容と共に、前述内容で示す前述内容への修正、あるいは前述内容を踏まえた情報の補足を表す。具体的な使用状況において、中日両言語における「事実上」には共通点と相違点があると思われるが、これらに関する対照考察、及び両言語における「—上」全般に対する対照考察は今後の課題とする。

## 第 5 章　関連性と共通性からみる空間的な関係を表す表現

第 1 章から第 4 章までは、現代日本語における空間的な関係を表す表現、具体的には、自立語「うえ」の意味用法と機能、自立語「うち」の意味用法と機能、語構成要素「上（じょう）」の意味用法と語「—上」の機能、及び個別考察として「事実上」の意味用法と機能について論じた。

序論のところで述べた考察目的に基づき、各章で検討した内容を踏まえ、以下の点から空間的な関係を表す表現の全体的な関連性と共通点について説明する。

①空間的な関係を表現の意味と用法に影響する要素

②各表現が関連付ける要素間の関係のあり方

③各意味機能にある関連性が見られるところとその関連性と関わる現象

空間的な関係を表す表現は多様な意味用法を持ち、用法によって共起・結合する要素、格助詞と述語との組み合わせ方が異なるが、共起・結合する要素間の「関係」を表すのに、前後の要素の存在（文脈に存在する場合がある）が必要である。自立語の共起要素にしても、語構成要素の結合要素にしても、基本的な用法として、以下のような形式で使用されると考えられる。

要素 A＋**空間的な関係を表す表現**＋要素 B＋述語

自立語「うえ」「うち」の場合において、語や句が前起し、空間的、時間的、属性的、あるいは抽象的な側面・範囲を表すとき、各部分の組み合わせはある程度自由であり、要素が省略される場合と文脈にある場合がある。節や文が前起するものを含め、「うえ」「うち」が接続表現のように機能するとき、各部分の組み合わせは固定しており、省略できない。また、要素と述語が合わさり、ひとまとまりの要素になることが多く見られる。

語構成要素「上（じょう）」及びこれを後要素とする語「—上」（「事実上」も含む）の場合、結合要素の意味を補足する部分の拡大による「句の包摂」現象が見られ、接続表現のように振る舞う用法はそれと関わると考えられる。

空間的な関係を表す表現の各意味機能の間の関連性を把握するには、要素と要素を関連

付け、その間の関係を示す用法に注目する必要があると考えられる。空間的な関係を表す各表現は、事物間の具体的な空間関係を表すとともに、意味用法の広がりによって、抽象的な事物間の関係、事物と事態間の関係、あるいは事態間の論理的な関係を表すことができる。

空間的な関係を表す表現の、意味用法が広がり、接続表現のように機能することができるということには可能性とある程度の必然性があると考えられる。なぜなら、両方とも「関係」を示す表現として機能するためである。上記の形式のとおり、空間的な関係を表す表現は「要素 A＋空間的な関係を表す表現（で／に／から……）＋要素 B＋述語」のように、2 つ（あるいは 2 つ以上）の要素を関連付け、その間の空間的な相対位置関係を示す用法がある。これに対し、接続表現は前件を受け、後件に引き継ぐような働きを持ち、前件と後件の間の論理的な関係を表す。要素の種類によって各表現の意味用法が異なるが、要素と要素を関連付け、その間の関係を表すという点で共通していると考えられる。

また、空間的な関係を表す表現は、共起する要素（主として前起要素）と共に表す意味も大切なポイントであると考えられる。各章で検討してきたように、空間的な関係を表す「うえ」「うち」「上（じょう）」のような表現は、基本的な意味用法として、「ある側面／範囲において」という意味を表し、前起要素で具体的に示す側面／範囲を前面に出し、後続する要素と関連付け、その間の関係を示す。共起する要素の種類と性質によって、この「ある側面／範囲の前面化」という意味を表す部分は話し手／語り手の判断、認識の立場を示すことで、後続内容に先行する条件になる。また、抽象的な意味、前後内容の間の論理的な意味を表す場合、「うえ」「うち」「上（じょう）」のような表現は前起要素と共に接続の前件となり、「ある側面／範囲の前面化」という意味が潜在的になり、先行条件という意味が優位に立つ。

要素と要素を関連付け、その間の関係を示すと共に、「うえ」「うち」「上（じょう）」のような空間的な関係を表す表現の意味用法の広がりには、「ある側面／範囲の前面化」と「先行条件」の意味の競合が見られると考えられる。特に、用法の多様性に富む「うえ」の場合、このような競合が明らかである。なお、「うち」の場合において、用法による「範囲」に異なる性質が見られたため、「範囲の設定」と「範囲の限定」に分けて検討した。

更に、話し手／語り手による事態把握のあり方としては、意味機能と連動し、述語で表す場所、時間などに関する叙述、ある側面／範囲という立場・条件を前面に出し、それに基づく判断と認識を述べる場合、後続内容を述べる先行条件として前述内容を出す場合、などがあり、これらを言語化する手段と方法として各表現が多様な用法で使用されると考えられる。特に、用法の広がりに広い幅を持つ「一上」の場合、例えば、個別考察を行った、談話標識に近づく用法も持つ「事実上」の場合、このような現象は明らかである。

このように、意味と用法に影響する要素、各表現が関連付ける要素間の関係のあり方、各意味機能にある関連性が見られる箇所､及びその関連性と関わる現象のような観点から、現代日本語における空間的な関係を表す表現の意味機能には、関連性と共通点が見られると考えられる。

## 第 6 章　結論と今後の課題

本論文は、現代日本語における空間的な関係を表す表現について、自立語「うえ」、自立語「うち」、語構成要素「上（じょう）」と「上（じょう）」を後要素とする語「―上」、「事実上」といった表現を対象に、各表現の意味機能を記述、分析し、その意味機能の広がりにおける関連性を明らかにしたものである。

空間表現の各意味用法の連続性については、認知言語学の視点から考察するものが多い。この立場は意味間の繋がりを説明するのに有効かもしれないが、各意味機能の間の関連性を説明するにあたり不十分なところがあると考えられる。本稿では、通時的な派生または共時的な拡張の方向を考察するのではなく、現代日本語における空間的な関係を表す表現が、それぞれどのような意味と用法を持っているか、いかに空間的な関係を表すものから、文において、または文を越えて、抽象的、論理的な関係を表すものになることができるかという疑問を念頭に置き、以下のような点に注目し、各意味機能の間の関連性を考察した。

①空間的な関係を表現の意味と用法に影響する要素

②これらの表現の具体的な用法ごとに、いかに具体的な位置方向などを表す意味を反映させ、接続表現として用いることができ、また、繋がりを持つと考えられるそれらの意味と用法にどのような関連性があるのか

③各表現によって関連付ける事物や事態の間の「関係」のあり方、各「関係」の共通点と相違点

④同じく「空間的な関係を表す表現」として、各表現の間にどのような共通点と相違点があるか

空間的な関係を表す表現の各考察対象について、明らかにしたことは以下のとおりである。

### (1) 自立語「うえ」（第 1 章）

現代日本語における「うえ」は多様な意味用法を持ち、その意味用法は共起する要素、特に前起する要素に大いに影響される。本稿は「関係」を検討するため、前後の両要素とも存在する場合を中心に考察した。

空間的な関係を表す表現としての「うえ」が、その意味用法を広げ、接続表現のように

機能することには、可能性とある程度の必然性があると考えられ、その理由として両方とも「関係」を示す表現として機能することを挙げた。「うえ」は「要素 A＋うえ（で／に／から……）＋要素 B＋述語」のように、2 つ（あるいは 2 つ以上）の要素を関連付け、その間の空間的な相対位置関係を示す用法を持つ。これに対し、接続表現は前件を受け、後件に引き継ぐような働きを有し、前件と後件の間の論理的な関係を表す。要素の種類によって「うえ」の意味用法は異なるが、要素と要素を関連付け、その間の関係を表すというところに共通点があると考えられる。

また、「うえ」の各意味機能に関連性、共通点が見られるのは、「うえ」が関連付ける要素と要素の間の関係のほか、共起する要素の種類、性質と関わる「うえ」が「ある側面の前面化」と「先行条件」という意味を持つためである。「うえ」の意味用法の広がりに 2 つの意味の競合（潜在的な意味か顕在的な意味か、優位に立つかどうか）が見られる。

更に、今後より詳しく考察する余地があるが、節や文が前起する場合、「うえ」が関連付ける要素と要素は、空間的な関係と時間的な関係にも関わり、それぞれの要素の性質によって、要素間の時空関係が異なると考えられる。

**（2）自立語「うち」（第 2 章）**

「うち」の意味も共起する要素に影響される。要素 A と要素 B が揃っていることを前提に、「うち」は前起要素で示すある空間的な側面・範囲、時間的な範囲、抽象的な範囲あるいは部分が所属する全体の範囲を前面に出し、後続要素と関連付け、その間の空間的な相対位置関係、相関関係あるいは所属関係を示す。その各意味機能の関連性は、「うち」が前起要素と共に表す「範囲」のあり方と「うち」によって関連付ける要素間の関係のあり方に見られる。「要素 A＋うち」が表す「範囲」は用法によって異なる性質を持つと考えられることから、両者を分けて見る必要があることを主張し、「範囲の設定」と「範囲の限定」に分け、説明した。

「うち」が空間的な範囲と方向、抽象的な範囲、時間的な幅を示す範囲を表す場合、「要素 A＋うち」は述語の補語のようなものであり、後続する事物との空間的な相対関係に関わる場所などのような条件として、あるいは述語で表す事態の時間的な先行条件として前面に出る。これを本稿では「範囲の設定」と提示する。

前起要素の種類と関わらず、「うち」が、部分の所属する全体の範囲を表し、「要素 A＋うち」は後続内容で示す事態全体と関わる範囲ではなく、要素 A の下位のものに該当する後続内容の一部（主体、客体、あるいは時間など）を規定する範囲である。これを本稿では「範囲の限定」と提示する。

節や文が前起する場合、「範囲」を示す「うち」の前起要素は、存在している状態や持続している動作、時間的に幅を持つ動作及び一定の時間内で反復性を持つ動作を表すものであるという傾向が見られる。この点は、動詞の分類と関わる前起要素のあり方として、より詳しく検討する余地があると考えられる。

**(3) 語構成要素「上（じょう）」と「上（じょう）」を後要素とする語「—上」（第 3 章）**

語構成要素「上（じょう）」は、具体的な意味を表す前要素と結合する場合、「ある側面において」という意味を表し、述語の補語として、述語で示す動作、状態などの具体的な場所を前面に出し、話し手／語り手の叙述として示す。また、抽象的な意味を表す前要素と結合する場合、後続する話し手／語り手の判断、認識を出す条件、立場を前面に出して示すことで、話し手／語り手の主観的な事態把握を表していると考えられる。結合要素の種類と前後文脈によって、「ある側面において」「ある側面から見ると／言うと」という意味を表す「—上」は前面に出され、後続する内容に先行する条件として働く。

「上（じょう）」は前接要素の拡大を伴って生産力を増し、接尾辞化し、抽象的な側面・範囲という意味を表すようになる。その前接部分は語の内部のみならず、語を越えて句まで拡大し、それによって、接尾辞「上（じょう）」が前接要素とその修飾部分を包み込む「句の包摂」現象が見られる。

「上（じょう）」は、抽象的な事柄を表す自立形態素と結合する場合、副詞のように振る舞うことが多い。しかし、修飾成分が必要かどうか、必要な場合、修飾成分が前文または前文脈にあるかどうか、などの条件によって、副詞のように使用される「—上」が接続助詞的、接続詞的に機能することがある。

「上（じょう）」の前接要素自身で完全な意味を表すことができない場合、その意味内容を補足するための修飾部分が必要となる。この修飾部分が前文または前文脈にあり、「—上」は単独で使用され、先行内容から後続内容に引き継ぐ機能を果たす。このような機能の移

行は、語彙的な意味が残っている前接要素と、「上（じょう）」が結合して構成した「―上」が先行内容と後続内容の意味的関係に影響を与えることに起因すると考えられる。「―上」が後続内容とともに先行内容に対する状況説明、情報付加の働きをする場合、後続内容との緊密度がより高く、接続詞のように振る舞うと考えられる。

**(4)「事実上」（第 4 章）**

「事実上」は副詞として働く場合と接続詞のように振る舞う場合があり、また、談話のレベルにおいて、談話標識に近づく場合もある。これらの用法の間には関連性はあるものの、はっきりとした境界線がなく、「事実上」の機能はそれが働く具体的な言語環境によって多様な側面を持つ。

文中で副詞として働く「事実上」は、述語を修飾するものとしても、文全体を修飾する文副詞としても、「（前述した内容を踏まえて）事実という側面から見ると／言うと」という意味を表し、後続内容で表す話し手／語り手の判断、認識が示される条件として前面に現れる。また、接続表現と共起し、前後内容との相反の関係、または相関の関係を強める役割を果たす。

接続詞のように振る舞う「事実上」は、「事実という側面から見ると／言うと」という意味を表し、前後の内容を関連づけようとする話し手／語り手の立場や観点を表すことで、前述内容を受けて後続内容に引き継ぐ働きを持つ。「事実上」は後続内容と共に、前述内容の成り行きへの帰結、前述内容を踏まえた情報の補足、または前述内容の修正を表し、前後の一貫性に関わって働く。

「事実上」と意味的に共通点を持つ表現として「事実の上」が、機能的に共通点を持つ表現として「事実」があるが、「事実上」はこれらと違う性質をも持ち、「事実の上」と「事実」には見られない、談話標識に近づく一面を有している。

以上の内容を踏まえ、現代日本語における空間的な関係を表す表現の意味機能には、意味と用法に影響する要素、各表現が関連付ける要素間の関係のあり方、各意味機能に見られる関連性、及びその関連性と関わる現象のような点において、関連性と共通点が見られると考えられる。

また、以下のような内容について、更に詳しく考察する余地があると考えられるため、今後の課題として示す。

①動詞の性質と関わる要素間の空間的な関係、時間的な関係、名詞が前起する場合における要素間の時空関係。

②節や文が前起し、「うち」が前起要素と共に時間的に幅を持つ状態や事態が存続する範囲を表す場合における、動詞の分類と関わる前起要素のあり方。

③空間的な関係を表す語構成要素を後要素とする語について、「―上」のほか、「句の包摂」現象が見られるものの考察。

④日本語における「事実上」、中国語における「事実上」に関する対照考察、及び両言語における「―上」全般に対する対照考察。

⑤「うえ」と「した」、「うち」と「そと」のような意味的に対となる空間的な関係を表す表現の対照考察。

**参考文献**

秋元美晴（1991）「漢語系接尾辞「―上」について」『緑岡詞林』15．19-27 頁．青山学院日文院生の会.

――――（1994）「談話における漢語系接尾辞「―上」の機能について」『恵泉女学園大学人文学部紀要』6．1-16 頁．恵泉女学園大学人文学部.

秋元実治（2015）「文法化から構文化へ」『日英語の文法化と構文化』ひつじ書房.

新川　忠（1996）「副詞の意味と機能―結果副詞をめぐって―」言語学研究会編『ことばの科学 7』むぎ書房.

安　在珉（2014）「日本語の空間名詞「上･下」が表す空間について」『日本認知言語学会論文集』14 号．336-348 頁．日本認知言語学会.

安　祥希（2016）「「うえに」の内部構造：「うえ」の名詞性と「に」の位置付けを中心に」『言語学論叢』9 号（通巻 35 号）．28-44 頁．筑波大学応用言語学研究室.

今井　忍（1998）「句の包摂に関する意味論的考察」『日本語・日本文化』24．1-18 頁．大阪外国語大学留学生日本語教育センター.

大島弘子（1999）「「～なか」と「～うち」について」『世界の日本語教育　日本語教育論集』09．177-195 頁．国際交流基金日本語国際センター.

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房.

金田一春彦（1988）『日本語』．岩波新書.

黄　小丽（2014）「日语方位词“上”的语法化考察」『外语教学与研究』46(4)．531-542 頁.外语教学与研究出版社.

国立国語研究所（1985）『語彙の研究と教育（下）』大蔵省印刷局.

――――――――（2004）『分類語彙表―増補改訂版』大日本図書株式会社.

三枝令子（2013）「名詞から副詞、接続詞へ」『一橋大学国際教育センター紀要』4．49-61 頁．一橋大学国際教育センター.

鐘　勇・井上奈良彦（2013）「日本語における上下メタファーの体系構成及びその特徴に関する一考察」『言語文化論究』30 号．13-26 頁．九州大学大学院言語文化研究院.

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房.

砂川有里子（2000）「空間から時間へのメタファー―日本語の動詞と名詞の文法化」『空間

表現と文法』くろしお出版.

高橋奈津美（2009）「現代日本語における空間相対名詞の修飾節についての試論」『京都大学言語学研究』28 号．185-204 頁．京都大学大学院文学研究科言語学研究室.

田窪行則（1984）「現代日本語の「場所」を表す名詞類について」『日本語・日本文化』12 号．89-117 頁．大阪外国語大学.

田中　寛（1999）「接続助詞化した形式名詞「ウエ」の意味と機能」『語学教育研究論叢』16 号．145-165 頁．大東文化大学.

――――（2004）「形式名詞「ウエ」の意味と機能―累加的な接続成分について―」『日本語複文表現の研究―接続と叙述の構造―』白帝社.

張　希西（2018）「上下関係を表す空間表現「うえ」と「した」の記述研究―具体と抽象の間―」『日本語学会 2018 年度春季大会論文集』．日本語学会.

――――（2019 a）「接尾辞「上(じょう)」を後要素とする語の機能：機能の移行と移行の条件について」『大阪大学言語文化学』28．57-69 頁．大阪大学言語文化学会.

――――（2019 b）「空间表达语法化前后形式用法的关联性－以该关联性的影响因素为中心－」『日本学研究』30．北京日本学研究センター.

趙　無忌（2016）『認知言語学から見た日中空間辞の意味と機能拡張に関する比較研究』宇都宮大学博士学位論文.

陳　瑞英　（2014）「中国語の方位詞「上」と日本語の「うえ」の意味と機能について―空間的用法を中心に―」『Polyglossia』26 号．79-90 頁．立命館アジア太平洋研究センター.

塚原鉄雄（1969）「連接の論理―接続詞と接続助詞―」『月刊文法』2-2．68-74 頁．明治書院.

寺村秀夫（1981）「ムードの形式と意味 (2): 事態説明の表現」『文藝言語研究　言語篇』巻 5．103-119 頁．筑波大学文芸・言語学系.

――――（1992）『寺村秀夫論文集 I：日本語文法編』くろしお出版.

中野はるみ（2004）『名詞連語「ノ格の名詞+名詞」の研究』大東文化大学博士論文.

中右　実（1980）「文副詞の比較」『日英語比較講座第 2 巻　文法』大修館書店.

仁田義雄（1995）「複文の研究（上）（下）」くろしお出版.

野村雅昭（1978）「接辞性字音語基の性格」『電子計算機による国語研究』9．102-138 頁．国立国語研究所.

長谷部亜子（2013）「多義語ウエの意味の分析：空間名詞・形式名詞・複合辞としてのウエ」『日本認知言語学会論文集』13 号．63-75 頁．日本認知言語学会.

畠　　郁（1991）「副詞論の系譜」国立国語研究所編『副詞の意味と用法』大蔵省印刷局.

馬場俊臣（2006）「複合辞「うえで」について―特に動詞の基本形に接続する「うえで」の特徴―」『複合辞研究の現在』和泉書院.

――――（2005）「接続助詞的用法の複合辞「うえで、うえは、うえに、うえ」―統語的特徴の整理と各用法の関係を中心として―」『北海道教育大学紀要（人文科学・社会科学編）』55(2)．27-42 頁．北海道教育大学.

方　允炯（2013）「日本言語：接続助辞化した「～うえで」の意味と機能―明治期と現代との用例比較を通じて―」『일본언어문화（日本言語文化）』25 号．207-223 頁．韓国日本言語文化学会.

――――（2008）『空間を表す形式名詞の意味と機能』大阪大学博士論文.

――――（2004）「接続助詞化した「～うえで」形式の意味・機能」『待兼山論叢（日本学篇）』38 号．1-16 頁．大阪大学大学院文学研究科.

比毛　博（1989）「接続詞の記述的な研究」言語学研究会編『ことばの科学 2』むぎ書房.

日野資成（2001）『形式語の研究―文法化の理論と応用―』九州大学出版会.

益岡隆志・田窪行則（1996）『基礎日本語文法（改訂版）』くろしお出版.

松下大三郎（1924）『標準日本文法』紀元社.

松中義大（2008）「日本語接続助詞に関する一考察―「うち」「なか」を中心に― 」『ことば・空間・身体』ひつじ書房.

三宅知宏（2005）「現代日本語における文法化：内容語と機能語の連続性をめぐって」『日本語の研究』1(3)．61-76 頁．日本語学会.

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店.

森山卓郎（1986）「接辞と構文」『日本語学』3．19-27 頁．明治書院.

山本秀樹（1989）「日本語の時の副詞節：「前に」と「ないうちに」」『言語学論叢』8．29-42 頁．筑波大学.

梁　慶模（2000）「「内外」의 공간 개념과 은유적 확장（「内外」の空間概念と隠喩的拡張）」『日本語文学』8．257-280 頁．한국일본어문학회（韓国日本語文学会）.

劉　川菡（2018）「場所を表す名詞「あたり」の接続辞化について」『日本語／日本語教育研究』9 号．55-70 頁．日本語／日本語教育研究会編.

Elizabeth C. Traugott, Richard B. Dasher（2001）*Regularity in Semantic Change*．Cambridge University Press.（日野資成訳．エリザベス・C・トラウゴット&リチャード・B・ダッシャー(2019)『意味変化の規則性』東京：ひつじ書房.）

Paul J. Hopper, Elizabeth C. Traugott（2003［1993］）*Grammaticalization*（second ed）. Cambridge University Press.

**用例出典**

CD-ROM 版　新潮文庫の 100 冊（訳文を除き、1950 年以降出版された作品に限定した）.

現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）国立国語研究所.

# 謝　辞

本研究を進めるにあたり、研究に向かう姿勢をご教示くださり、ご指導と激励を賜りました大阪大学文学研究科田野村忠温教授に深く感謝申し上げます。また、今日まで学恩を賜りました文学研究科日本語学講座の工藤真由美教授、石井正彦教授、三宅知宏教授、渋谷勝己教授、Matthew Burdelski（マシュー・バーデルスキー）教授、高木千恵准教授に深くお礼申し上げます。

修士時代の短期留学の半年、及び 2014 年来日してからの一年間、チューターとして、研究の進め方や悩みについて親身になって相談にのっていただきました全紫蓮先輩に、博士論文の作成に何度も相談にのっていただきました酒井雅史助教に、博士論文の日本語をチェックしていただきました黒田真代様に、心よりお礼申し上げます。

日本語学講座の皆様、一緒に頑張ってきたゼミ生の皆様に深く感謝いたします。

言語学研究の道に導いていただきました北京外国語大学日本学研究センターの譙燕先生、施建軍先生と徐一平先生に心より感謝いたします。

修士時代から共に研究の道を歩み、留学で来日し、ずっとそばにいて励ましてきてくれた親友の張琳に深く感謝いたします。

最後に、これまで私をあたたかく応援してくれた両親と妹に心から感謝します。

2019 年 12 月